

やはり私と同中の彼との  
青春ラブコメはまち  
がっている。

巢羽流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

総武高校の2年生になり春を迎えた愛川花菜。

彼女は同じ中学出身の同級生が居ないと少し淋しがっていた。

そんな中今まで気付いていなかったが同じ中学に通っていた生徒を発見する。

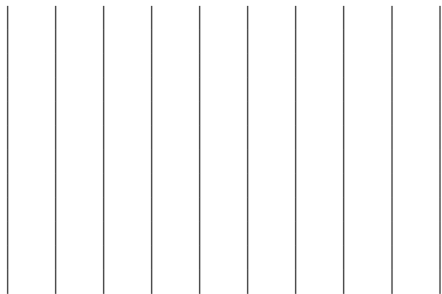
その出会いにより彼女の青春は加速していく。

# 目次

1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
140	127	113	103	88	73	58	48	32	24	12	1

2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話	1 3 話
348	329	309	299	277	262	250	223	215	200	183	169	159

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2  
5 4 3 2 1 0 9 8 7 6  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



494 480 467 451 439 423 403 393 379 369

## 1話

黒板にチョークで文字を書く音が響く教室。

窓から吹いてくる気持ちのよい春風を受け、私の黒い前髪が視界で動くのを感じる。

私の名前は愛川花菜（あいかわ かな）。

総武高校の2年J組の生徒です！

きーんこーんかーんこーん

本日はここまで。

先生がそう告げ四時間目の授業が終わりを迎えるとクラスの皆がガヤガヤ騒ぎ始めた。

「ぶへえー。やつと終わったー」

「はあー……あんた……なんつー声だしてんのよ」

「あはは……いくら男子が少ないって言ってもそれはダメでしょ」

そう言っただけで私に話しかけてきたのは私の友達。

つり上がった目で私を見ながらため息混じりに注意してきたのが橋本基子（はしもと

もとこ)

背中くらいまである綺麗な黒髪を後ろに纏めているのが特徴で、姉御肌の世話焼き屋だ。

隣の苦笑している茶髪ロングの垂れ目少女は上溝 美波（かみみぞ みなみ）

これでもかかってくらいのおまーい声を地声で出す。

基子は完全に逆方向の女の子だ・・・ほんとに地声かどうかはわからない。

「だって今の授業古典だったんだよ？こうなるって」

「なっさけない・・・古典とは言え国語でしょうが。自分の国の言葉くらいでダウンしてんじゃないの」

「ええー・・・」

古典であれじゃない？国語とか言つといて英語よりやっつかいじゃない？なんだよはべり活用って・・・誰が省いてんの活用してんのか？そんないじめをするような物は日本語と認めません（暴論）

「あんた・・・またろくでもない考えてるでしょ？」

「あはは・・・」

ジトーつと基子は私を見てくる。

「べっつにー・・・」

「まあ別に良いけど・・・さっさとお弁当たべよ」

「そだそだ。早く食べよー!」

そういつてお弁当を机に置く美波。

ほんとどっからあの声が出るんだろ？

ーーーーー

私たちは別にトップカーストと言うわけではない。

というかうちのクラスにはカーストなるものがない。

学力は皆ほとんど同じで容姿に関しても皆、中の中から中の人がほとんどだ。

まあ一人だけ圧倒的な学力と容姿をもつ例外はいるけどね。

ちなみに言うとは私は上の下にはいるんじゃないかね？つてくらいの可愛さだ（どやつ）

「基子。そういえばね、この間ね！伊勢ちゃんにあつたんだよー」

「おつ。伊勢ちゃんかー！なつかしいなー。どうだったどうだった？」

「それがねー」

あっ・・・

私が一人で回想してる間に私の入れない話題になりやがった。

あの二人は同じ中学出身でそういう話をたまにする。

羨ましいいなー！私だってこの前同じ中学だった折本にあったのに！

「二人はいいよねー。同じ中学出身でそういう話ができ

私もそういうの話したい！」

「あー。そういうえば花菜は同じ中学の人この学校にいないんだよね」

「うん・・・」

そう！この学校は県内でも屈指の進学校で学力も高い。

それに家から少し遠いことも相まってこの高校に進学したのは私だけなのだ。

「でも花菜ちゃんが知らないだけでこの高校にも同じ中学の人いるかもよ？普通科とか

さー」

「居ない居ない。前に顔見たけど見覚えある人いなかったもん」

「そっかあー」

「まっ、しかたないっしょ」

「まあ別に気にすることって訳じゃないしね」

そういつてこの話の流れは途切れて別の話題へと移った。

私が見つけられてないだけで同じ中学だった人なんてさすがに居ないだろ。



・ ・ ・ いないよね？

――

あの日から数日がたったとある日の放課後。

「おつかれさまでしたー！」

「おつかれえー」

帰り支度を終えて鞆を背負い部活の後輩に挨拶をした。

部室をでるとそこには同じ部活の同級生が通り掛かった。

「おつかれ戸塚くん」

「あつ！愛川さん！おつかれさまあー」

うつ ・ ・ ・ かわいい ・ ・ ・

もはや天使といつても過言じゃないほどの笑顔を振り撒かれた。

私より絶対かわいいよ ・ ・ ・ おかしくね？神様？仕事まちがえてますよー？

「戸塚くんはまだ練習するの？」

「うん！もう先輩たちも居なくなつたし僕たちが頑張らなきゃだからね！」

「そうだね ・ ・ ・ お互いがんばろうね」

「うん！じゃあまたね！」

まっまぶしい！何ですかその微笑みは!?

あつぶないあぶない。女の子なのに惚れかけたわー。

あつ戸塚くん男だから惚れていいのか。

—————

そして駐輪場について自転車で乗車。

しゅっぱーつ！と心のなかで叫びこぎ始める。

「♪」

鼻歌を歌いながらいつもの帰路からそれで違う道に行く。

今日はガットを張り替えるためにテニスショップに預けていたラケットを取りに行

くのだ。

新しいガットはどうか？なーんて思いながら進んでく。

駅前につくと自転車を二時間無料の駐輪機に置いてつと。

さーって行きますか！

—————

「ありがとうございましたー」

「……ふう」

つつかれたー。

思ってたより店が混んで受けとるだけなのに30分も待った。

もう八時なりそうだよくそっ！

ちくしよー。時間を無駄にしたぜ。

そう思いながら自転車を取りに向かっている途中で本屋があることに気付いた。

ん？こんなところに本屋なんかあったっけ？あたらしくできたのかな？

まあ、そんなことは良いかはやく帰ろー。

そう思ってたらなにやら二人組のおじさまに呼び止められた

「ねえねえ君。かわいいねえ」

「えっ……」

うっわあー！もしかしてナンパ!?初ナンパされちゃったよー！えへへへ……ってお

じさんかよ！

「高校生かな？」

とりあえず面倒くさい。

「あの……急いでるんで……」

そういつて立ち去ろうとする。

「まあ待ってよ」

「っ」

おじさん（禿）が行く手を阻んだ。  
ちよつとしつこいんじゃないの？

「なんなんですかもうっ」

内心イライラしながらそう言うど、

「おじさんたちといいことしない？」

「お金なら持つてるよー」

そういつて、お札を財布からとりだしひらひらさせてきた。

むっ！諭吉が10枚だと!?ぐぬぬ・・・

「ねえねえ。どうどう？」

「っ！」ビクッ

そういつておじさん（豚）が肩に触れてきた。

あぶねえー。一瞬もつてかれかけた。まあ行くきは元々ないけどね？

・・・ほんとだよ？

「あの・・・急いでるんで・・・」

「つれないねー。おじさんかなし！」

「そんなこと言わずにさー！」

「この人たちなんなの？しつこい！」

どうしたもんかと、悩んでいると本屋から総武高の制服をきた男子が出てきた。

ナイスタイミング！

遠くて顔はよく見えないけど目があつた。

たすけて！

そうアイコンタクトを送ると彼は頭をかきながらこちらに近づいてきた。

うわっ！目が！目がああ！

彼はそんな感想を抱く濁った目をしていた。

そんな彼はこう言った。

「待たせたな愛川」

なるほど・・・そういう作戦か。

「ううん！そんなにまつてない！」

「そうか・・・ところでこの人たちは誰なんだ？」

濁った目で、二人を見つめて言うとおジサンズの二人は少しビクツとなつてから舌打ちをしてどこかに行つてしまった。

あの目少し怖いもんね・・・気持ちわかります。

「ふう・・・助かった！ありがとう！」

飛びつきりの笑顔で彼にそう言った。

戸塚くんほどではないけどそれなりに笑顔には自信がある。

基子に顔面詐欺と言われるほどだ。

とりあえずこのあとに何か奢ってちやらにしてもらおう。

「・・・おう。それじゃあな、気を付けて帰れよ」

「ええ!? まつてよ! まだお礼してないよ!」

「えっ・・・お前お礼言つてたじゃん」

「言葉だけじゃん! 何か奢るよ!」

「良いよ別に。なにかほしくてやった訳じゃないし」

「ええ・・・じゃなんで助けてくれたの?」

「そりゃ見知った顔があんな状況なら助けるだろ。俺ももさすがに見捨てるほど腐って

ない」

「・・・見知った顔?」

そういえばこの人私のこと愛川って・・・

うちのクラスの男子じゃないし普通科だよね?

私は派手じゃないしJ組なら雪ノ下さんに全て持ってかれてるから知名度は上がっ

てないはず。

「ならなぜ彼は私を知っている？」

「えつと・・・どこかで話した？」

「えつ・・・だつて俺たち」

「??？」

「つ・・・まあそりやそうか」

「はなしたことがある・・・っけ？」

「もう気にすんな。じゃあ俺帰るから。もう時間も遅いし気を付けろよ」

「えっ!?!ちよっ！」

彼は私の制止を聞かずに本屋の前からチャリを取り出して帰っていった。

「・・・いったい誰なの？」

## 2話

「はあー。今日もつかれた」

そう眩くと私はベットに倒れこむ。

あのあと私はすぐに自転車にのって自宅に帰ってきた。

お風呂もご飯も済ませて今は自分の部屋にいる。

「……あの男の子は何者なんだろ」

ぼさぼさな髪にアホ毛が立っている目の腐った男子の顔が頭に浮かんだ。

『だって俺たち……』

……俺たちの後にはいつたいなんの言葉が続くのだろうか。

同じクラスだった？

そんなはずはない。

私のクラスはクラス替えが無いので今とクラスメイトは変わらない。

それに男子の数も極端に少ないので顔と名前くらいなら絶対に覚えている。

やはり彼は普通科に違いない。

ならテニス部の新しい後輩か？



それならため口なんか聞いてこないはずだ。

敵しくないとは言え運動部なので上下関係はしっかりしているしね。

「ほんとに何者なんだろ・・・」

目を閉じて考えていると次第に意識が薄れていった。

—————

きーんこーんかーんこーん

「・・・zzz」

「花菜ちゃーん。お昼たべよ？」

「かなー！起きろ！」

「・・・ゴフツ」

「はあ・・・花の女子高生がなんつー声だしてんのよ」

くっ眠い・・・

「たつてえ・・・日本史とかよくわかんないんだもん・・・」

「あんたほんとに文系科目でできないのね」

「理系は凄いんだけどね」

そう！私はばりつばりの理系脳なのだ！

「まあねー！理系科目だけなら学年三位だよ！」

一位は雪ノ下さんだけど二位とか誰だよ？

「三位かよ・・・すごいけど微妙だなー」

「なによ！自分は文系4位の癖に！」

「うっさい！何時も何時も上位の3人が動かないんだよ！誰だよ二位と三位!？」

文系も一位は雪ノ下さんだもんね。

ほんとなんなのあの人。

完璧すぎる。

「二人ともいいよねー。得意科目があつてさー」

「美波はバランスよく取れてるじゃない。学年順位五位だよね？すごいよ」

「ほんとほんと。私たちは良いところ20位だもんねー」

「えへへえー。ありがとう！」

――

あれからなんやかんやでご飯を食べ始める私たち。

「そういえば花菜。知ってる？昨日の昼休みのテニスコートでの事」

「ん？なんかあつたん？」

「あのサッカー部のエースのさ、THEつりア充って感じの葉山くんっているじゃん？」  
ああ・・・あのキラキラ王子か。

「それがどうしたの？」

「どうやらテニスコートであの雪ノ下さんとダブルスの試合をしたらしいんだよ」

「ええ!？」

うそ!?あの雪ノ下さんが!?

「な、なんでそんなことになったの？」

美波がビツクリした顔で聞く。

そりやそうだ。あの孤高の雪ノ下さんが昼休みに誰かとテニスだなんて信じられない。  
い。

「それが、よくわかんないんだよねー。ただガチでやりあつてみたい」

「へえ。ねえねえ!結果はどうなったの!？」

「雪ノ下さんの勝ちだつてさ。さすがだよねー」

「まじかよ・・・。あの運動部のエースでキラキラ王子に勝つとは・・・さすがだね」

ほんと世の中って不平等だよね。

「そういえばさ。ダブルスって言ってたけど雪ノ下さんとペア組んで乗った誰なの？」

「さあー？名前はみんなわからないっていったなー」

「はーん」

雪ノ下さんが連れてくるくらいだから相当なイケメンとか美女だろ？もしくはテニス部にとかね。

「見た目はどんななの？」

「たしか目が腐敗してる男子らしいよ」

「えっ!？」

目が腐敗してる!?

あのとぎ助けてくれた男子の顔が脳に浮かぶ

「花菜ちゃん？いきなりどうしたの？」

「そっだよ。大声だしてさ」

あの人雪ノ下さんと・・・どういう繋がりだ？

「花菜！花菜ったら！」

「っ！」ビクッ

びっくりした。なんなのよ基子は。

「どうした？なんかあったんか？」

なんかあったなんてもんじゃない。

昨日の夜、正体が気になって仕方なかった人が雪ノ下さんと繋がりを持っていたのだ。

ほんとあの男子なにもん？

「え？なんにもないよ！なんにも！」

「嘘だ」

ううー

話すのはなんか恥ずかしいし誤魔化したい。

「花菜ちゃん。教えて」

にこつと微笑みながら美波がいう。

なんだかちよつと威圧的じゃない？

いつもの、あまーい声はどうした。

「目が腐敗してる男子がどうかしたのか？」

ニヤニヤと楽しそうにしゃがって・・・

なんかむかつく☆

「はあ・・・あんまり面白い話してもないよ？」

「いいからいいから」

「・・・昨日の部活帰りにね」

――

「つてことがあったのよ」

洗いざらい昨日事を話した。

プライバシーも糞もあつたもんじやない。

あ！いけない！女の子が糞なんて言っちゃだめ！

うんち♪

どつちもダメかな・・・だめだよね。

「そんなことがあつたんか」

「それでそれで!?花菜ちゃんはそのな彼が気になつちゃうの!?好きになつた!」

美波がキラキラした目をしながら質問してくる。

この娘こういう話し好きそうだもんね。

「別に。ただなんで私の事知ってるのか気になるだけだよ」

この言葉に嘘はない。

ほんとにただの興味でしかないのだ。

「なーんだ。つまんないの」

つまらなそうに美波はいう。

ごめんなさいねつまらない女で。

てかあんたも恋話ないでしょうが。

「まあ確かに気になるよな。あの雪ノ下さんと繋がりを持つてるって事でさらに興味がわくな」

「だよね」

基子の意見には同意だ。

彼はいったい何者なのか。

「ふーん……気になるならさ！明日の昼休みに探しに行かない？」

「そうだなー。2年の教室片っ端から探せばいるだろ」

確かに……ちよつとした見物に行く位ならいいかも。

「だね。じゃあ明日行こうか」

私は好奇心が踊っているのを感じながら昼食を再開した。

――

翌日の昼休み私たちは2年の教室を探した。

しかし……

「どっどこにもいないな」

基子はがっかりしたように言った。

ほんとにどこにいるんだ？

覚えている顔と目（顔のパーツじゃね？）を頼りに一年の教室を含めて探したがどこにも居なかった・・・

「どこにいるんだろうね」

「じつは花菜の妄想でしたーって落ちじゃないだろうね？」

「なわけあるかい」

まったくそんなわけないじゃない！失礼な！

・・・そんなわけないよね？

一人不安になってると昼休みが終わるチャイムがなった。

「昼休み終わっちゃった・・・」

「次は古典かー」

「げえ・・・また古典か・・・」

ああああ。めんどくさい。

また地球外生命体の言語やんなきやならんのか。

「古典ってことはさ、先生って生活指導の先生じゃなかったっけ？」

「ん？そうだと思うけどそれがどうかしたの？」

突然なにいつてんだ？ついに自分の激甘ボイスに脳がやられたのか？



「生活指導の先生ならさ、目が腐敗してる男子って言えばわかるんじゃない？そんな特徴があれば目立つしね」

「確かに・・・雪ノ下さんと繋がりがあある時点で目立ちそうだしな」  
「なるほどおー。じゃあ後で聞いてみようか」

ふむふむ。美波やるじゃん！さすが学年五位だね！

えっ？さっき貶してた？ナニソレシラナイ

――

「アノ〜平塚先生」

「ん？愛川か。どうかしたか？」

私たちの古典担当の平塚先生。

スタイル抜群で容姿も抜群。スーツも似合ってまさに仕事ができるキャリアウーマンって感じだ。

ぐぬぬ・・・そのスタイルが羨ましい。

「お聞きしたいことがあるですが」

「なに？君から質問とは珍しいな。どこの問題かな？」

「い、いえ！古典の事じゃなくて・・・人を探してるんです」

「人？誰の事だ？」

「えっと・・・背が中くらいで髪がぼさぼさでアホ毛がたっている目の腐った男子を探してるんです。心当たりありません？」

先生が驚いた顔をしている。

え？そんなにヤバイこと聞いた？

「うーん。心当たりは一人だけいるな」

「誰ですか？」

「恐らく、比企谷のことだろう」

「ひき・・・がや・・・」

ヒキガヤ？あれあれ？どこかで聞いたような・・・どこだ？

「たぶんその人です。その人に用があるのですがどこの組か教えてもらえませんか？」

「構わんぞ？あいつは2年F組だ」

「2年F組・・・」

たしかFはトップカーストが集まるリア充クラスだったような気がする。そんなところへ彼が？

「ありがとうございます！」

「ああ。つと、次の授業が始まるな。ではまた」

そういつて平塚先生は急ぎ足で出ていった。

「やったね！情報ゲットだね」

「なんか昼休み頑張って探したのにあっさり情報手に入ったな」  
「うん。明日の昼休みにもう一回見に行ってみようか」

比企谷君・・・

なんか引つ掛かるんだよなー。

まあ、明日会えばなんかわかるかもね！

## 3話

「二人とも、もう行くよー？」

「おっけえ」

平塚先生に彼、比企谷君のクラスを教えてもらった次の日。

私たちはお昼を食べてからF組に向かい始めてた。

「腐敗してると情報だけで誰だかわかる目……見てみたいよね」

基子は興味津々でそう言った。

「あの目はやばいよ。知らない制服着てたら軽く悲鳴あげるかもしれないレベル」  
「なんだそれ。気になる」

それを聞くとくくくと笑い始めた。

いや……マジですごいから。

「でもでも花菜ちゃんはそのな彼が気になって仕方ないんだよね」

「確かにそうだけど誤解を招くような言い方はやめえい」

「きやー。怒った怒った！あやしー」

くっこのアマ……どうしてくれようか。

おっとこんな言葉使いだめだめ。

このお嬢さん♪

それは違うか。

「まったく・・・つとついたね」

「さあーでどんな目か拝ませてもらおうか」

キヨロキヨロとみんなで探しだす。

・・・あれ？

「・・・いない」

「ええー・・・なんでいないのよ」

「あのー。すみませーん」

美波があまーい声でカチューシャを着けたいかにもチャラそうな男子に声をかける。

「ん？どうしたん？」

「あの。比企谷君って今いないですか？」

「ヒキガヤ・・・？」

んーんーつと、考えてる。

え？クラスメイトだよね？

「ああ！もしかしてひきたにくんのこと！わかんなかったわー。てかひきたにくんとか

見てないからよくわかんないっしょ」

けらけらと笑って、しゃべってる。

・・・なんだろ。この人イラつくかも。

「にしてもひきたにくんばないわー。ああ見えてすみにおけないってゆうの?」

「いえ。そういんじゃないから」

う、うぜえ。

「結局今はいないの?」

「たぶんねー」

「わかった。ありがとう」

基子がさつとうぎ男との会話をきる。

普通科ってあんなの多いのかな。

あんなのばっかならイライラしてストレスたまりそう。

普通科じゃなくてよかった。

「なんか用事でもあったのかな?」

「そうじゃない? また明日も来てみようよ」

「うん」

——

結論から言おう。

一週間毎日ここに来たが彼は一日も居なかった。

どういふ事だまつたく。

チャイムが鳴ったら昼食もとらずにダツシユでF組に言っても見付けられなかったし。

クラスメイトに見られてもないしあの忍者可なんか？

雪ノ下さんの懐刀とか？

・・・なんか雪ノ下さんならありそうだな。

「おつ帰つてきた帰つてきた」

「今日もお疲れ〜」

この二人は二日目を最後に来なくなつた。

ちよつと意思が弱すぎませんかね〜？

「またダメだったよー」

「学校には来てるっぽいのにね。どこにいるんだろ？」

「ほんとどこにいるんだろ？」

「花菜ちゃんはまだ探すの？」

「あつたり前よ。私は諦めないからね」

「物好きだねー。まあがんばれ」

————

「はあー」

陰気なため息がでる。

あれから一ヶ月。

毎日毎日F組に通つてみたが一度たりとも彼に会えない。いつになつたらお目にかかれるのよもう。

そんなことを部活中に考えていたら天使が降臨した。

「愛川さん？そんなため息ついてどうしたの？」

ああ癒されるく浄化されて召されるく

いや、召されちやうのかい。

「いやー。ちよつとね・・・」

「もしかして悩みごと？」

「うーん。そんな感じかな」

「あつ！だつたらさ！良いところがあるんだよ！」

「いいところ？」

良いところとはどこだろうか？天界のこと？



いくら私がそれなりに可愛くても天界レベルには達してないかなー。  
冗談はさておき何の事をいってんのかな？

「うん！お悩み相談をしてくれる部活があるんだよ」

「へえ〜」

そんな部活があつたのか・・・

そんなことして何の意味があるんだろ。

「よし！じゃあ行ってみようか」

「えっ・・・でも」

そんな人に相談するほどの悩みじゃ・・・。

「良いから良いから！行くよー！」

そう言つて手を掴んで引つ張つてくる。

いやん。戸塚くんつて以外と大胆☆

つてどこにつれてかれるのー!?

ーー

校舎に入つてから戸塚くんに観念してついていく。

向かつていたのは特別棟だ。

こんなところにその部活が？

そう思っていたら戸塚くんはある教室の前にたちノックをした。

どうぞつと綺麗な声で告げられ中にはいる。

「失礼します」

「あつーさいちゃんだ！やっばろー！」

染めた髪をお団子を作った美少女がいた。

さいちゃんつて可愛いなあ。

私も呼んでみたいな・・・無理ですけど。

とりあえずこの教室を見渡してみる。

ごくごく普通の教室には特別な道具はなかったただ机と椅子があるだけの空間。

そんな平凡な光景に一際目立つ少女が・・・。

「こんにちは」

「え!？」

長くてさらさらした黒髪、見るものすべてを魅了する美貌、凛とした雰囲気纏った美少女。

雪ノ下雪乃。

この総武高校1の美少女だ。

いやー！おどろいたあー。

「八幡もよっ！」

「よっ！」

もつともつと驚くべき人がいた。

ぼさぼさの髪にアホ毛、恐ろしく腐った目をした男子が戸塚くんに最高の笑顔で挨拶をしていた。

「ええー……！」

そして叫んだ私をみるなり一瞬で嫌そうな顔に変わった「比企谷君」がそこには居た。

## 4話

どうも！愛川花菜です！

私は今とても驚いています！

戸塚くんに悩みがあるならとつれていかれた教室には何と！我が高校1の美少女！  
雪ノ下さんがいました！

それだけではありません！

なんとなんと！例の腐敗してる目の彼も居たのです！

「ええー！ー！ー！」

「・・・よう」

私が比企谷君をみるなり大声を出して驚く。

比企谷君もめちやくちや嫌そうな顔で挨拶をする。

「えっ？えっ？？どういうことなの？なんでここににいるの？」

「なんでつて・・・俺はここの部員だからな」

「ここの部員？」

お悩み解決の部活の部員？彼が？

むしろ自分の解決しなくてはならないお悩みが山ほどありそうなのに？  
頭が混乱しているところほんと咳払いをする声が聞こえた。

「愛川さん。依頼なのかしら」

「えっ依頼？」

えつと・・・そうか！ここはお悩み相談所なのか！

だとしたら私の目的はすでに果たしつつあるんですが？

「えつと・・・」

そう言つて比企谷君の方をちらちらと見ていると雪ノ下さんは・・・

「比企谷君」

名前を呼び彼を見つめた。

すると彼は立ち上がり飲み物買ってくるわつと出ていこうとした。

この二人には言葉は要らないの？てかほんとに懐刀っぽくない？

「ヒツキー！私は午後ティーね！」

「いやなんでお前の買つてこなきゃなんないんだよ」

心底嫌そうに言う。

「八幡。僕アクエリアス」

「よし！任せとけ！」

「なんか私の時と対応が違う!」

比企谷君・・・戸塚くんに落とされてるな・・・

まあ気持ちはわかるぜい!

「・・・あー、愛川はどうする?」

「え?」

私がいよとした顔をしてると彼は。

「お前だけ何にもないのも変だろ・・・で、どうする?」

へえ・・・以外と優しいんだ・・・

なんかもつと自分勝手に冷めてる人だと思ってた。

「じゃああったか〜いMAXコーヒーで」

やっぱここの自販機で飲み物買うならホットなマッカンですよ!

千葉県民ならこれ1択よ!

「っ!」

比企谷は驚いたように目を見開く。

「お、お前あれ好きなのか・・・」

「え?・・・そうだけど?もしかして引いてる?」

あれ甘すぎるってみんなよく毛嫌いしてるもんね。

みんな非県民すぎるよ。

「なわけあるか。むしろ感動してるまである。千葉県民のソウルドリンクを人に頼まれたのが嬉しくてな」

な、なんだと・・・？

彼も同士だと言うのか？

急に親近感がわいてきたぞー。

感動してるとなんだかすこし寒気が増してきた。

あれ？おかしいなあー。

「比企谷君」

雪ノ下さんが無言で比企谷君を見つめていた。

これが寒気の原因か。

比企谷君は目を泳がせながら教室を後にした。

こ、こわいよ雪ノ下さん。

「・・・彼が居たのでは話しにくい内容なのでしょう？」

「うん」

なるほど・・・気をきかせて比企谷君を追い出したのか。

「では話をきかせてもらえん？」

何を話すか・・・まず助けてもらったことからかな。

「一ヶ月くらい前にね・・・」

――

「つてことがあつて私はこの学校の男子生徒に助けられたの」

「ふええ。そんなことあるんだね」

由比ヶ浜さん？が興味津々に話を聞いていた。

「なるほど・・・それで？」

「私はその男の子に会いたくて探していたんだけど・・・どのクラスかはわかったんだけど昼休みとかに行つても見つからなくて」

「・・・つまりそれが悩みな訳ね」

「うん」

「さて・・・どうしたものかしら」

そう言つて指を顎に置いて考え始める。

その姿はとても絵になつていてつい見いつてしまった。

「それが、その・・・」

「どうしたの？」

「実はもう見つかったんだ」



「えっ？」

「どういうことかしら？」

なんかここにいたしね。

見つけるだけなら終わってる。

「その彼って言うのが比企谷君なんだよ」

「「え？」」

雪ノ下さんと、由比ヶ浜さんは心底驚いた顔をしている。

プラス戸塚くんも。

三人とも可愛いからとても絵になるね！

「・・・愛川さん。本気で言っているの？」

「う、うん」

「あの男がそんなことするだなんてとても信じられないのだけれど」

「だ、だよね・・・働かないが信条のヒツキーが・・・」

す、すごい言われようだ。

彼はどうやら働かないっていう方向で信用されているようだ。

こんなに悲しい信用初めてみたよ・・・

「それで・・・彼を、見つけることが出来たわけなのだけど、どうするつもりかしら？」

雪ノ下さんが聞いてくる。

えっ?どどどどどうするつもり?

見つけることに全力を注いで考えてなかった・・・どうしよ・・・

そうだ!

「お礼!あのお礼がしたかったの!」

我ながら素晴らしい言い訳だ。

さすが私!てんさい☆

「それだけでは無さそうだけど・・・」

「そ、そんなことないよ?」

声が裏返ってしまった。

私になやつてんの!?!雪ノ下さんジト目で見てくるし!

「・・・まあ良いわ、ではもう悩みは無いつてことで良いのね」

「うん」

なんとか誤魔化せた。

誤魔化せてないか。

そうこうしてから少し雑談を始めるとガラガト扉が開いた。

「買ってきたぞ」

「おー！ヒッキーありがとー！」

比企谷君がみんなに飲み物をくばり始めてる。

「ほらよ」

「っ」

なんだこれ？なにか変な感じが・・・

『ほらよ』

『ありがとー！』

こんな会話以前にもしたようなきが・・・

「どうした？」

比企谷君が不思議そうな顔をする。

「いや！なんでもないの！・・・ありがと」

「おう」

なんだったんだ？

やっぱり私は彼と以前関係があつたのか？

考え事していると、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんが比企谷君に事情を話してた。

「お礼？んなもんいらんとあん時も言つたら・・・」

「それじゃあ私の気が済まないの！」

「……はあ。わかったよ。んで何してくれんの？肩たたきとか？」

彼は観念したように言う。

「って私もそんなにゆうほどお礼したい訳じゃないのにごめんね？」

「私は娘かい！……うーんと……そうだな……」

「お礼か……なにがいいかな？」

「うーん……そうだ！」

「何か奢ってあげる！」

「じゃあマツカンで」

「そういうんじゃなくてもっとちゃんとしたものだよ！」

「もしかして外食か？ええ……」

今日何度目かわからない嫌そうな顔をする。

「こ、この男……」

それなりにかわいい女の子とお出掛けのチャンスなのになんだその態度！

「そうだけど？だめ？」

「やだよ面倒くさい」

もう決めた。

私の女としてのプライドに掛けてこの男を引っ張り出してやる。

「良いからいくの！拒否権はありません！」

「あれ？俺ってお礼される側だよね？おかしくない？」

「めんどくさ……」

「てか、愛川。言葉がどんどん汚くなつてくぞ？」

はつとなつて口を押さえる。

見渡すとみんな少し驚いた顔をしてこつちを見てる。

「……なんの事かな☆」

「いやいや。無理があるだろ」

う、うるさいなあもう。

「とにかくいくの！詳しいことは後で決めて連絡するから！」

「連絡つて……どうやってだよ」

「どうやってつてアドレス交換すれば良いじゃない」

「ええ……めんどくさい」

「こんな可愛い女の子とアドレス交換するなんてなかなか無いチャンスだよ？」

「自分で可愛いとかいうなよ……」

アドレス交換くらいでなにしぶつてんのよ……

「良いからするの！はやく！」

「はあ・・・ほら」

そう言つて彼はスマホを手渡してくる。

「え？」

「アドレス交換なんぞほとんどしたこと無いからやり方とかわからん。やつてくれ」

「えっ？でも色々見えちゃうよ？」

「色々つて・・・とくに見られて困るもんなんてねえから大丈夫だよ」

「じゃあ・・・」

スマホにはロックもついておらず簡単に中が見れた。

つてアドレス登録してる人すくな！

家族と、迷惑メールの差出人と思われる人とか思えない名前しかない。

てか、比企谷君迷惑メールに騙されてるんだ。

「比企谷君・・・こういうのつて詐欺のメールだから登録しちゃだめだよ？」

「ん？・・・ああ、これ由比ヶ浜だ」

「えっ!?!」

うそ！なんで、こんな名前で登録してんの!?!

驚きの表情をしてると比企谷君が説明してきた。

「由比ヶ浜が勝手に名前いれたんだよ」

「な、なるほど・・・」

由比ヶ浜さんはなあに？つて感じの顔でこっちを見てる。

由比ヶ浜さん・・・さすがにこれはないよ・・・

「と、とりあえず登録しといたから」

「ほんとに？違うメールアドレスとか、いれてない？」

「入れてない入れてない」

なんでそんなに疑うんだろ。

「にしても手打ちとは・・・赤外線くらいついてないの？」

「そんな機能無い」

「さすがあなたの所持品ね。あなたと同じで友人を必要とする機能が無いのね。あなた

と同じで」

「おいまて。なんで二回言った」

それを聞いて雪ノ下さんはクスクス笑う。

雪ノ下さん・・・こんなに楽しそうに笑ってるの始めて見た。

でも内容がひどいよ。

「はあ・・・終わったなら返してくれ」

「うん・・・はい」

スマホを返したらキーンコンコンと完全下校時刻を知らせる余鈴がなった。

「今日はここまでにしましょうか」

その声を合図にみんなが帰り支度を始める。

さて、私も帰り支度始めますか。

――

帰り支度を済ませて駐輪場に向かっている。

部室にもどってから着替えるのがめんどくさかったが仕方ない。

駐輪場につくとそこには目が腐った男子生徒が自転車を押しているのが見えた。

「おーい！比企谷君！」

「大きな声で呼ぶな。目立つだろうが」

比企谷君は目立つのが嫌なのかな？

良くも悪くも私はそこまで目立つ方では無いので一緒にいても大丈夫だよな？

「ごめんごめん、自転車通学なんだね！途中まででも一緒に帰ろうよ」

「え？嫌だけど」

またもや・・・それなりにかわいい女の子との下校が嫌なのかね？



よーし！ここは美波の真似をして・・・

「そう言わずに帰ろうよ」

「あざとい」

一言でバツサリ切られた。

美波・・・あんたの技は比企谷君には通じないよ・・・

「とにかく一緒に帰るの！自転車持ってくるからまっててね！」

「ええ・・・」

比企谷君の不満の声は無視して自転車を取りに行く。

自転車乗ってくると比企谷君がまっていた。

「お待たせ！行こっか」

――

「比企谷君の家ってこっちの方なんだ！私と同じ方向だね」

「そりゃそうだろう」

「えっ？・・・なんで？」

「え？お前思い出したんじゃないの？」

「思い出す？」

なにを？彼との事？

「なんだ・・・まあ別に良いけど」

「ねえ・・・私たちなにかあったっけ？」

この質問を私は一ヶ月以上前から聞きたかった。

私がどれだけ考えても思い出せなかった。

私と彼とのなぞの繋がりがいっただいなんなのか

それが知りたい。

その真相を彼が喋り始めた。

「なにかもなにも・・・ただ同じ中学出身だっただけだろ」

「えっ」

えっ？ 同じ中学？ うそ？

「ほんと？」

「ああ。ついでに言えば、一年の頃は同じクラスだったぞ」

「え、ええーーーーー！！」

うそ?! なんてそんなことにきづかなかったんだろ!?

なんで、わすれてたんだろお!

「もう・・・こんな簡単な事なのに悩んでたのバカみたい」

「そりやお気の毒だな」

そんなことならあのときの教えてくれてもよかったのに。  
彼に不満をぶつけることにした。

「なんであの時教えてくんなかったの？」

「えっ、だってめんどくさいし」

「そんだけかあ！」

私の悩んでた時間をかえせ！

ふざけるな！

「ああ・・・そんだけだよ」

彼の声は何時よりも暗く、何時よりもどんどん濁っていく目を伏せていた。  
このとき私はそれに気づいたが大したこと無いとたいして心にとめなかった。

## 5話

「い、いた」

卒業アルバムを漁っていると目の腐っている彼を見つけた。

私が彼に衝撃的な告白？をされた日の夜。

とても信じられない気持ちになったので実際に調べてみることにした。

そうしたら彼はほんとにいたのだ。

「ほんとに同じ中学だったんだあー」

そう思うとすつと胸がスツキリするのを感じた。

それと同時に高校に同じ中学出身の人がいることが嬉しくなってきた。

そう思いながらなんとなく卒業アルバムをめくっていると、一年生の頃の遠足の集合

写真に目が止まった。

「同じクラスならいるはずだよね……」

腐った目腐った目と、比企谷君を探してみる。

・・・あれ？

おかしいなあー。

見つからない。

アホ毛アホ毛と、もう一度探してみる。

すると彼を発見した。

「えっ……」

中学一年の彼の目は今ほど腐敗してはいなかった。

確かに腐つてはいたが目付きが少し悪いって程度だと思う。

こりや気付かないわ。

もはや別人に感じるレベルだ。

「……」

なんで彼はあんなに目を腐らせてしまったのだろうか？

中学の三年間の間でいじめられてた？

でもそんな話聞いた事無いし。

わからないなあ。

そんなわからないことを考えていた夜はどんどんフケていった。

——

キーンコーンカーンコーン

「ふう……」

翌日の四時間目が終わりを告げるチャイムになる。

お弁当の準備をして基子の席に向かうと二人から驚きの声があがった。

「花菜ちゃん、今日は行かないの？」

「え？花菜あんた諦めたの？」

「諦める？ああ・・・」

ああ・・・この二人はまだ知らないんだったね。

「それね。実は昨日の放課後比企谷君にあつたんだ」

「え!？」

二人が目を丸くして見てくる。

そんなに見ないで。

恥ずかしい☆

「どういうこと？状況を詳しく教えなさい」

「気になる気になる！花菜ちゃん教えて」

まあ、べつに秘密にする事でもないしね。

話すか。

「昨日の放課後にね・・・」

———

「つてことなの」

「あ、あんた・・・人探しの相談を探してる人にしに行くとか」

プルプルと基子は笑いをこらえてる。

ええわかつてますとも。

間抜けですよね。

「私は雪ノ下さんがそんな部活やってることに驚きだよ」

「それはほんとに思うよね。なんだっけ？たしか奉仕部って言ってたような・・・」

「なにその響き、エロそう」

笑いがおさまった基子がいう。

「私も思った」

「なんかやらしいことすんのかなく」

「なわけあるかい。お悩み相談所だつて言つたじゃん」

雪ノ下さんと由比ヶ浜さんのご奉仕とか毎日満員になること間違いないだろう。

比企谷君の存在意義無いし。

「それよりさ、花菜はどうするの？」

ニヤニヤしながら基子が聞いてくる。

「どうするつて・・・なにが？」

「比企谷君へのお・れ・い☆」

「いやらしいことしてあげるの?」

ニヤニヤと、美波も混ざってからかってくる。

「そ、そんなことしないよ」

「ええー!比企谷君お礼つて言われて期待してるよ?」

「してあげなよ」

「あほか!ご飯奢るだけだわ!」

まったくこいつら・・・

「ご飯奢るんだ」

「じゃあじゃあデート!?!」

「別にそんなんじゃ」

「きゃー!花菜ちゃん青春してる」

う、うぜえ・・・

このあと私はキスするだの抱き締めるだの一晚を二人で明かすだの二人のくだらない妄想を聞かされた。

にしてもその気はなかったとは言えお礼することになったのは事実。  
さてどうしようか・・・



「ほんとにどうしよ!?!」

その日の夜にそろそろ本格的にどうするか考えようと思ったのだが何にも思い付かない。

考えてみたら男の子と二人だけでお出掛けなんて初めてだ。

まあでも別に好きでもない相手だし構わない構わない。

気にならない気にならない。

『じゃあじゃあアートの!?!』

「っ」

ふと昼の時の美波の言葉を思い出すとなんだか心臓がはやくなる。

き、緊張するうう。

ベツトにダイブして手足をばたばたさせて悶える。

くっ・・・美波い!

どうしよ・・・何にも考えられないよ・・・

顔が熱くなってるのを感じたので窓を開ける。

すると心地のよい風が吹いてきた。

もう少しで夏がくるのでこの気持ちのよい風ももうすぐ無くなるのか・・・

そんなことを考えていると冷静になるのを感じた。

てかお礼なんて私がよく行くご飯屋さんとか奢るので良くない？  
なんでこんな簡単なことに気づかなかったのかな。

そう自分に呆れつつ比企谷君にメールを送る準備をする。

「今度の土曜日でいいか・・・」

そう呟きながらメールを打つ。

どうでも良いけどスマホでメール打つときも打つって言うんだね。  
変な感じする。

――

約束の！

――

昨日言ってたお礼なんだけど今度の土曜日にしようとおもうんだ！

予定とか入ってるかな？（▽。＊）

――

変なこと言っていないよね？

言っていないな。

「送信つと・・・」

手を空に向けて伸ばしながらそう呟く。

よし、とりあえずお風呂に入るか。

入浴シーン？

ふふふ。今回はお・あ・ず・け☆

・・・たいした胸でもないのになにバカなこと考えてんだか。

自分で自分を呆れつつお風呂に向かった。

――

「ふう・・・」

お風呂からあがって部屋に戻ってきた。

携帯を確認すると一件のメールが来ていた。

比企谷君だ。

――

Re, 約束の！

――

あれマジだったの？

—————

えっ？本気にしてくれてないの？

軽くシヨツクなんですが？

にしてもこんな返信思っても、普通しないだろ。

呆れつつ返信を返す。

———

無題

———

マジだよ！

と言うわけだから土曜日の11時にこの前助けてくれた本屋さんの前に集合ね！（

☆▽☆）

—————

送信つと。

さーてどんな返事がくるかな。

———

無題

———

了解

—————

すくな!

必要最低限しかないよ!?

どんだけエコロジー精神豊富なんだよ!

そんな突っ込みを心のなかで入れてはいたが少し驚いた。

比企谷君ならもっともっとうだうだ嫌がるかと思つてたのに意外とあつさりオーケーしたからだ。

なにかあつたのかな?

まあ別にいいか。

そう思いベッドに倒れて目を閉じた。

今度の土曜日少しだけ……

楽しみだな。

## 6話

どうも！それなりに可愛いと噂の愛川花菜です！

え？そんな噂しらない？

そのうち流れるから大丈夫☆

そんなどうしよも無いことを考えつつ本屋までの道のりを歩いていく本屋は駅前であり自転車だとそれなりに近いのだが徒歩だと少し遠いもう少し近ければいいんだけどなー

そんなことを考えてると本屋につく

時間は・・・15分前か

比企谷君の姿はまだない

しばらく待ってるか

そう思つてスマホをいじり始める

「よう」

「ひゃあー！」

いきなり声をかけられ悲鳴をあげてしまった

び、ビックリした

そう思つて振り返ると相変わらず目が腐つた男の子がそこにいた

服装は青いシャツに白いパンツ、シンプルだが清潔感がある服装だ

顔も目以外はそれなりに整っているので似合つてる

というか普通にかっこいいんだけど・・・

「比企谷君！おはよう！」

元氣よく笑顔で挨拶をする

笑顔と挨拶は大切だね！

「・・・おう」

「ええ・・・そっけないなあ」

「そりやお前、声かけられたら悲鳴あげられるとかどんだ俺不審者レベル高いんだよ。

下手したら通報されてたぞ。軽く傷ついちゃったじゃねえか」

「あつ・・・ごめん」

確かに挨拶したら悲鳴を上げられるとか傷つくよね・・・

「そのなんだ。あんまり気にしねえし。てかまじになんなよ」

比企谷君はそっぽを向いてそう言った

なんか気使わせちゃったかな？

「あー、あとな．．．その服似合ってるぞ」

「えっ」

ビツクリして比企谷君を見つめる

今度は照れ臭そうにそっぽを向いていた

なんか前に話した感じだとそんなこと言う人じゃ無さそうなのに

「ありがとう」

微笑みながらお礼を言う

「おう」

彼はまだそっぽを向いたままだ

そんな彼を見てるとなんだかニヤついてしまう

意外と可愛いんだけど

なんだか、女の子に慣れてない感じがね！可愛いですね！

こりや楽しくなりそうだ

私は男の子を照れさせた経験が少ないのでなんだか楽しくなってきた

「じゃあ、行こっか！」

笑顔で素晴らしい歩き始める

———



テクテクと二人で歩いて目的地向かう

「なあ。今日はどこに行くんだ？」

「みんなでよく行くカフェに行こうかなって」

「カフェか・・・洒落たところか敷居が高いのは嫌だぞ？」

「私たちが遊びにいったときよく行く場所だから大丈夫だよ」

「なら良いんだが・・・」

そう言つて彼はついてくる

てかさ

「なんで後ろ歩いてるの？」

比企谷君は私の3歩ほど後ろを歩いてる

「え？なんでつて愛川は俺と一緒にいるところ学校のやつに見られるのとか嫌だろ？誤

解とかされるかもしれないし」

「うわあく卑屈だなあ」

「うっせ・・・」

なにをどうしたらそんな性格になるんだ？

女の子とデートだよ？

普通隣にポジションニングするでしょ！

「良いから隣に来るの」

「いやでも……」

むっ、この私の隣で歩くのがそんなに嫌か！

ここは泣き落とし作戦に移行するしかないな

「そっか……比企谷君は私の隣で歩くのは嫌なんだね……」

しよぼんとした顔で目をうるうるさせて言う

「嘘泣きするな」

一瞬でばれた

「な、なぜわかった!?!」

「ぼっちの観察力なめんな」

「……比企谷君ってポッチなの?」

「まあな」

彼は自慢げに答えた

なんでこんなに誇らしく思ってるんだろ

「そ、そっか」

「おい、顔引きつってんぞ」

「そ、そんなことないよー」

「それで隠せると思ったの？」

「このあとも談笑をしながら歩いていると目的地に付いた

「( )だよ」

「そう言つて店内に入る

「いらつしやいませ」

「二名です」

「( )こちらへどうぞ」

「そういわれて案内されたのはカウンターの近くにある二人用の席だ

「へえ……」

比企谷君は興味深そうに店内を見渡す

木造を思わせる色合いで落ち着いた雰囲気のカフェ

「どう？ なかなか良いでしょ」

「ああ、もつとリア充(笑)が、来るような店を想像してたからな。落ち着いた雰囲気が良い」

「ああ……あの手の雰囲気のカフェは苦手なんだよね……」

「なんか騒がしいし、見ててイライラするし」

「何考えてんのかな？ 大きな声だすのが格好いいと思つてるの？」

「だよな」

比企谷君は苦い顔をして頷く

彼も同じ考えを持つてるんだうな

「そろそろなんか頼もうぜ。腹減ってきた」

「そうだね！なに食べる？」

うーんつとメニューを見ながら考える

比企谷君つて何が好きなんだろう？

「そうだな。何かおすすすめとかあるか？」

「うーん……私的にはピラフとお勧めかな？」

「ほう……」

「私は決めたよ」

「俺もだ」

「じゃあ頼もうか。すみませーん！」

店員さんがこちらに来てメニューを取る

「私はシラスとツナの明太ピザとアイスコーヒーで」

「俺はパエリアとカプチーノ」

えっ？ピラフじゃないの？

「かしこまりました！」

店員さんが厨房に戻る

決めてんならなんでオススメ聞いてきたのよ

なんだかはめられたみたいで悔しい

ジーっと恨みを込めて比企谷君を睨む

「な、なんだよ？」

「私がオススメ教えてあげたのに無視なんて酷くない？」

「あー。オススメされてご飯系のところ見てたらピラフの横にパエリアがあつてな。美味しそうだったからつい」

「ひどーい！私の事もあそんだんだね？」

「人聞きの悪いことを言うな」

「私のことはめて楽しんで、楽しんでたのは自分だけだよ？」

「そろそろやめろ、やめてくださいお願いします」

「冗談だよ」

私はクスクスと笑い、比企谷君はまったくとあきれれる

そんなやり取りをしていると料理が来た

「おし、じゃあ食うか」

「うん！いただきます」

「いただきます」

比企谷君はしっかりと挨拶をしてパエリアを食べ始める

意外と礼儀正しいんだ

「おっ、旨いな」

「でしょ！パエリアも美味しいんだよね！」

「そうだな・・・この料理は基本的に旨いのか？」

「うん！パスタも美味しいしサンドイッチも！それにピザだって」

そう言ってピザを持ち上げる

「ふうん」

言葉は少ないが興味深そうな顔をして聞いていた

たぶん今、今度一人で来ようとか考えてんだろうな

「一つ食べてみる？」

ピザを一つもって言う

「いや、なんか悪いし良いよ」

「どうせ今回のお会計は私持ちだし気にしなくて平気だよ」

「そ、そういうもんなのか・・・じゃあありがたくいただく」

そう言つてピザを取つてもぐもぐとたべる

すると目を驚いたように見開かせた

「旨いな」

「でしよでしよ!」

「ああ。シラスつて聞いたときどうなんだ? つて思ったけどむしろシラスが良い味だし  
てるな」

「そうなんだよ! 私はここのピザならこれが一番好きなんだ!」

「他のも気になつてきたな」

「また来れば良いじゃん」

「なんだかなあ・・・少しこういう所には入りずらいんだよ」

「へえ・・・はっ!」

「ん?」

「も、もしかして今のつて遠回しにまた一緒に来たいなつて言うことなの!?!」  
「は?」

なにバカな事いつてんだと言う目で見てくる

「比企谷君つて大胆なんだね」

そんな視線なんか気にしないでわざとらしくそっぴい放つ

「そんなこと言っていないだろうが・・・」

「仕方ない！また、今度来ようね！」

良い笑顔でそう言うのと彼は嫌そうな顔に変わる

「また勝手にそんなことを・・・」

「楽しみだね！」

「はあ・・・」

——

「ありがとうございます！」

「ふう」

「結構長い間話しちゃったね」

「そうだな・・・」

あれから下らない話なんかしたりして面白おかしく喋ってた

なんだか思ってたより楽しくお喋りできたな

将来の夢が専業主夫って・・・

思い出しただけで笑いが・・・

「なにニヤついてんだよ」

「なんでもないよ！」



「んだそれ」

そう言つて彼は時計を見る

「もう五時か・・・そろそろ帰ろうぜ」

「そうだね」

テクテクと帰路を二人で歩く

「そう言えばもうすぐ職場見学だねえ」

「あの地獄の行事か・・・」

「まあたそんな事いつて・・・」

「あんなの専業主夫志望の俺には関係ないね」

「そこまで、一貫してると清々しいね」

「だろ」

どや顔でそう言つてきた

私は比企谷君のこういうところは好きだ

「俺ん家こつちだから」

「うん！楽しかったよ！」

「おう」

「比企谷君はどうだった？」

うりうりと肘で腕をつつく

「や、やめろ」

「素直に言っただけえ」

「いや、その・・・悪くなかったぞ」

悪くない・・・か

「これで、勘弁してくれ」

「仕方ないな」

「ふう・・・じゃあ、またな」

「うん！次は比企谷君が企画してね！」

「えっ・・・あれマジだったの？」

「もちろんだよ！」

「・・・まじか」

「まじまじ」

はあつと、嫌そうにため息をはく

「えっ？もしかしてほんとに今日楽しくなかった？」

少し不安になってしまう

楽しくなかったからこんなに嫌そうなのではと

「いや別にそういう訳じゃないんだ」

「ほんと？」

「ああ」

「じゃあ、次もまたあそぼうね！」

「はあ・・・わかったよ」

「よかった！じゃあこんどこそバイバイ！」

手を振ってサヨナラをする

さて！帰りますか！

—————

つつかれたあゝ

お風呂もご飯も済ませてベットにダイブ

ごろごろしながら今日の事を思い出す

比企谷君って歩くときにさりげなく道路側歩くし店出るときとかはドア開けてくれるし・・・しつかりしてる

比企谷君って思ってたよりもずっとしやべりやすく、ずっと面白くて、ずっと紳士的なんだな・・・

今日は比企谷君のこと知れてよかった

次が楽しみだ

「もう眠いや・・・」

そう呟きそつと瞼をとじる

今日の記憶を思い出しながら眠りに付いた

## 7話

どうも！私愛川花菜です！

今私はつまらない古典の授業の真っ最中！

つまらなくて仕方ないので私は一昨日比企谷君が面白かったと言っていた小説を読んでいます。

ふむふむ・・・ここからどうなるのか・・・

キーンコーンカーンコーン

「・・・」

「花菜ちゃん！お弁当たべようぜ」

あまーい声で何か言ってるが頭に入らない。

「・・・」

ペラペラと心地よい音を立てて本の世界に入っているのを感じる。

えっ？ヒロイン死んじゃうの!?

せつかく主人公と結ばれたのに・・・

政府の奴等の人でなし！

「おい！花菜！花菜！！」

「……」

せつかく宿した息子も？

そんな……ひどい！

「花菜ちゃん」

ゆさゆさと揺すつてくる。

なんなのよもう。

「はあ……どうかしたの？」

「どうかしたの？じゃないよまったく」

「もう、授業終わってお昼休みだよ？」

二人が呆れた様子で言う。

なんだそんなことか……って

「ええ!?まじで!？」

「時計見てみな」

「……ほんとだ」

確かに四時間目終了時刻より五分進んでる。

まじかよ気付かなかったわ。

「あんた読書に集中しすぎじゃない？」

「だって・・・面白かったんだもん」

「にしても限度があるでしょうが」

「あはは・・・って言うか花菜ちゃんが読書って珍しいね。何かあったの？」

えっ？私が読書って珍しいですか？

「別にー。ただこれが面白ってオススメされたから読んでみただけだよ」

赤い背表紙の本を掲げて言う

すると二人は目を丸くして驚いたかおをする。

あれ？なんか変なこと言った？

「オススメって・・・誰にされたの？」

「誰って・・・比企谷君だけ？」

「か、花菜比企谷君と休日に出会ったの!？」

「前に話した通りお礼をしたんだけど・・・えっ？何か変？」

「い、いや・・・花菜って意外と大胆なんだね」

「大胆って・・・約束を果たしたただけだよ」

「それでそれで！どんな感じだったの?！」

キラキラとした目で美波が聞いてくる。

「別になにも・・・」

「詳しく聞きたいな」

な、なんでそんなこと・・・

「別に聞いても楽しいことないよ？」

「良いから良いから」

「じゃあね・・・まずは」

———

「つて感じでまた次の機会に遊ぼって約束してきたの」

「・・・」

「あ、あれ？」

なんか二人とも黙り込んでこっち見てくるんですけど・・・

やだ！もしかして私の貞操が狙われてるの!?

「・・・花菜って比企谷君のこと好きなの？」

「そりやもちろん。話してて面白かったし話しやすいし、気を使わなくて済んでるしね」

「また会いたいつて・・・も、基子さんや。これはもうじき花菜ちゃん花落ちるよ」

「そんなまさか。今の所問題はない感じだけど」

「今だけだよ」



「まさか花菜が男なんて・・・」

「？」

二人がヒソヒソと内緒話をしてる。

なんかそんな風に省かれると比企谷君みたいでやだなー。

「私としては良いと・・・」

「でもそれだと」

あー、お弁当美味しいな。

二人がずっと内緒話をしているのでご飯を食べるしかやることがなかった。

そう言えば比企谷君はどこで昼休みをすごしてるんだろ。

――

「本日のロングホームルームはテスト明けの職場見学の班を決めてもらうぞ」

ああ・・・そう言えばそんな行事あったな。

「原則三人一組として班をつくってもらおう。だがそれだと一人余ってしまうので二つ二人一組の班を設ける」

では自由に決めてくれ。

そう先生が言うのとわらわらとみんな散って三人一組を作り出す。

私はもちろんあの二人と一緒だ。

「私は行きたい場所は無いかな・・・ねえどこに行きたい？」

そう言われ職場見学場所の一覧を見る。

「私は小説とかの出版社に行きたいな」

基子がそう言う。

私は断じてそんな退屈そうな所いきたくない。

「私は農学系の研究センターの中の見学が良いな」

「ええ・・・」

基子は嫌そうに顔を歪める。

私だって出版社は嫌だ。

「ここはじゃんけんで決めるか？」

そう思ったとき先生から声が上がった。

「みんな聞いてくれ。全員が三人組を作ってしまった雪ノ下が一人になってしまってる。

どこか三人組をばらしてくれ」

そう言われたが誰一人として声を出さない。

みんな雪ノ下さんと居るのが気まずいのだろうか。

「先生。私は一人でも構いませんが」

え？そんな感じで良いの？良くないでしょ!？」

「そ、そうか？なら」

「待ってください！」

ついつい静止してしまった。

クラス中の視線が私に集まる。

みんな注目しちやつて・・・

私の可愛さに目を奪われたのかな？☆

「愛川、どうかしたか？」

「私雪ノ下さんと行きたいです」

そんな、感じになるなら私は雪ノ下さんと行きたい。

「そうか・・・じゃあ、それで決定だな、あとの時間は自由時間だ。授業が終わる時間では教室を出ないように」

そう言つて先生は出ていった。

「ちよつと、花菜どういうこと？」

「ん？ただ私は純粹に雪ノ下さんと一緒に行つてみたいと思つただげよ？それに二人と行くと出版社に、行かなきゃならなくなるかもしれないしね」

「へえ〜。じゃあ私たちは二人で行くね」

「うん。わるいね〜」

「まあ気にしなくて良いよ」

「じゃあ雪ノ下さんと話してくるね」

「いつてらっしやーい」

テクテクと雪ノ下さんの近くにくる。

雪ノ下さんが、何か疑うような目で見てくるんですが。

私なにもしてないよね？

「あなた・・・どういうつもり？」

「べつに？雪ノ下さんとお喋りとかしてみたいなっと思っただけだよ」

「今まで大した関わりは無かったのに・・・いったいどういう心境の変化なのかしら」

「雪ノ下さんの事比企谷君に聞いて興味が出たつてのがほんとの事。それ以外無いよ？」

「そう・・・」

彼の名前を出すと少し驚いた顔をしてからそれだけ返事をした。

「それで、行く場所なんだけど！第一希望は農学系の研究センター良い!？」

「べつに構わないわ」

「よっしや！ありがとう！」

よし！雪ノ下さんとなら百人力だぜ！

あつ、そう言えば良い忘れてた。

「雪ノ下さん」

「？」

「これからよろしくね」

笑顔で挨拶をする。

やっぱ笑顔と、挨拶は大事だよね！

「ええ・・・よろしく」

彼女は少し微笑みそう言つて来た。

ひゃあ・・・とんでもなく絵になる笑顔だ。

思わず彼女に見とれてしまつていた。

――

日は飛んで職場見学当日！

現在は雪ノ下さんと二人で電車に乗つて移動中です！

「ねえねえ！雪ノ下さんつてさあ」

「愛川さん。ここは公共の場なのよ？ポリウムを落ととして話なさい」

「ごめんごめん・・・それで雪ノ下さんはさ」

「はあ……」

私はずっと話をしていた。

沢山質問したし沢山私の事も話した。

――

「うわあ……すごい」

「ほんとに、すごいわね」

テニスコートが五個くらい収まるであろう空間には沢山のイチゴが埋まっている。

研究センターに付いた私たちは「百聞は一見に如かず」と言われてさっそく施設内を見せてくれている。

「ここにあるイチゴは現在品種改良中なんだ」

「なんでこんなに広いところに植えてるんですか？」

「ここにあるイチゴはそれぞれ仕様が少しずつ異なってるものが埋まっている。それぞれ酸味とか糖度なんか調節されて微妙に異なるんだ。それらを比べるのに同じ環境で育てなければ正確な結果は出ない。50の種類のイチゴを同じ環境で育てるために広い土地を使ってるんだ」

「でもそんなことしなくても小さな空間で同じ土を使い、湿度や温度なんかを一定に保った方が良いのでは無いですか？」

雪ノ下さんが質問する。

さ、さすが！思ったことはずかずか言うね。

「うーん・・・たしかにそうなんだけど僕達は機械の故障なんかを危惧してるんだ」  
「故障？」

「うん。もしも一つの空間で空調が故障してしまったらそのイチゴのデータは正確性が低くなる。それだと効率が悪いよね？」

「はい」

「広い土地で一つの空調を使えば壊れてもみんな同じ環境になる。そうすれば比較も正確性が落ちずにすむってことだよ」

「ほえく。すごいですね」

「なるほど・・・」

雪ノ下さんが納得した顔をする。

私もなるほどと納得してしまった。

「はっはは。こんな話だけだはつまらんだろ？イチゴの試食でもしてみようか」

「良いんですか!？」

「ああ。その代わり感想をしつかり頼むよ？若い女性の味覚を参考にしたいからね」

そう言って係りの人はにっこりと微笑む。

やったあ！

「雪ノ下さん！試食だつて！楽しみだね！」

そう言つて腕に抱きつく。

「そうね、つて近いわ愛川さん」

おお・・・照れてる照れてる。

なんだか楽しい気持ちになつてきたからこのままでいよ！

「島田さんがいるのよ？自重して？」

島田さん？・・・つて係りの人か！

「っ！」

はつとなり腕を話して島田さんを見ると苦笑していた。

は、はずかしい・・・

「じゃあ試食してみようか」

島田さんが先に歩き出すのを私たちもついていく。

どんな感じなのかなあ。

——

「今日は楽しかったね！」

「そうね」



職場体験の帰り道雪ノ下さんと二人で電車に乗る。

「イチゴも美味しかったねえー」

「ええ……でもあなたがあんなにしつかりした感想をするだなんて思わなかったわ  
そう！

私はイチゴの感想をしつかりとしたのだ！

これは甘すぎて逆に変な感じがするとか友達にもこう言うのが好きな人がいるとか  
企業の人が求めていそうな意見を言った。

ちなみに雪ノ下さんに関しては新しいイチゴのデータを提示していた。

さすがって言うかこれはやばいって思った。

にしてもそれが発売されたら品種名は間違いなく雪ノ下だろう。

「えへへ……こう見えて私は理系科目なら学年3位なんだよ！」

私がどや顔で言ううと雪ノ下さんはクスリと笑いこう言った。

「……あなたあの男と同じことを言ってるわよ？」

「比企谷君の事？」

「ええ……現国学年3位だって自慢してきたわ」

学年3位……基子よ。

3位は比企谷君だったぞ。

「3位で満足なのかしら?」

すこし挑発気味にそう言つて来た。

「はっ! なわけないでしょ! 次は一位狙うよ!」

「私に勝てるのかしら?」

「勝てるかじゃなくて勝つ。天才たる私がそう決めたんだから絶対だよ」

「楽しみにしてるわね」

二人で顔を見合わせるとクスリと笑つてしまった。

なんだろう・・・なんか楽しいな。

それにしても雪ノ下さんとも、仲良くなったと思う。

なら・・・

「雪乃ちゃん」

「へ?」

「今日から雪乃ちゃんって呼ぶね!」

「な、なぜ急に」

「私は雪ノ下さんと、もつと仲良くなりたいと思つたからまずは形から入ろうかなつて」

「そう・・・少し照れくさいのだけど」

「気にしない気にしない!」

そう言つて腕に抱きつく。

「あ、暑い……離れてくれないかしら？」

「雪乃ちゃんは……私に抱きつかれるのは嫌？」

涙目でそう訴える。

「別に嫌と言うわけでは」

あつ……雪乃ちゃんチョロい……

てか比企谷君とこう言うのが似てる。

「ありがとう！」

そう言つてさらにべたつく。

雪乃ちゃんは最初こそ嫌がったがそのうち慣れたのか抵抗をしなくなつた。

そうして私たちは行きと同じように談笑をしながら帰路を渡つた。

## 8話

「よしっお疲れさま」

私が後輩の面々にそう言うとお疲れさまです！と挨拶をして来た。

「はぁ・・・今日も疲れた」

テクテクと駐輪場から自転車を取り出す。

すると校舎の方から見知ったあほ毛の男子生徒が歩いてくるのが見えた。  
私に気付かず自転車を取り帰ろうとする。

ほんとに気づいてないのかな？

後ろから声をかけてみる。

「比企谷君！一緒に帰ろ！」

「っ！」

ビクツと反応して振り向かず歩こうとする。

「比企谷君？」

「・・・はあわかったよ」

「じゃあ行こっか！」

———

「そう言えばこの前オススメしてくれた本読んだだけどね！面白かった！」

「だろ？あの本はなかなか考えさせられるよな」

「うん。あっち側の主張も正しいって思っちゃったしね」

以前読んでみた本の話をしている。

あそこのときの主張が——何て話を繰り返してた。

「しかしもう読み終えたのか・・・早いな」

「面白かったからね。またなにか読みたいんだけどさ、他にオススメとかある？」

「そうだな・・・あの本が面白かったなら他にもいくつか候補があるぞ？」

「おおー！それは嬉しいね！」

面白い本を読んでいると私の知らなかった世界を感じ取れてとても楽しい気分になる。

だから嬉しい。

だけど・・・

「嬉しいけどそんなにいっぱい買うほどのお金はないんだよね・・・」

悔しいことに私はそんなにお金を持ってない。

バイトでもしなきゃだめかな・・・

「だったら俺の貸してやろうか?」

「え?」

比企谷君は私の想像してなかった提案をしてきた。

いや、

想像はしていたが比企谷君の方からそんな提案をしてくるなんて思わなかった。

「あー・・・そのなんだ。俺のが嫌なら別に構わないぞ?」

私が驚いた顔をしたら比企谷君がマイナスな事を言っていた。

何かまた勘違いしてんのかな?

「そう言うんじゃないよ!是非貸してほしいな」

「ほんとか?比企谷菌とかついでるぞ?」

「なんだよ比企谷菌って」

「俺に付着してるバリアー無効のスーパーウイルスらしい」

「そんな気にしないから」

「そうか・・・じゃあいつ渡したらいい?」

「うーん・・・」

明日でも良いのだが明日比企谷君と会う可能性は低い。

教室に取りに行っても良いのだがそれはめんどくさいし荷物が増えるしなあ。

「そうだ！」

「じゃあ今から取りに行くよ」

「は？なんで？学校で良いじゃねえか」

心底嫌そうな顔をする。

え？私に家教えるの嫌なの？

「それぞれのクラスに行くものめんどくさいしお互い荷物も増えるしね！今なら帰るだけだし家も同じ中学なら近いでしょ？」

「まあ・・・そうだな」

「だからさーね！今！」

「ええ・・・まじか」

「どんだけ嫌なんだよ！」

ほんとに嫌そうにするね・・・

泣いちゃうよ？

そんなことを考えたら観念したのかため息を吐いてわかったと了承した。

———

「いーだ」

「いーかあ・・・」

これが比企谷君の家か・・・

そこは普通の一軒家。

一般家庭より少し裕福な感じだろうか？

「そ、それじゃあ」

ピンポンとインターホンを押す。

男の子の家のインターホン押すのって少し緊張するなあ・・・

「いや、お前なんで俺ここに居るのにインターホン押すの？」

「え？・・・ああ！押す必要ないのか！」

し、しまった！緊張と興奮でわすれてた！

「は、恥ずかしい」

「はあ・・・たく」

比企谷君は呆れ顔でため息を吐く。

うう・・・そんな目で見ないで。

しゃがんで顔を押しさえていたら中から女の子が出てきた。

「どちら様で・・・ってお兄ちゃんか」

「おう、ただいま」

「チャイムなんか鳴らしてどしたの？」



「いやーそのなんだ」

比企谷君の目が泳いでる。

時おり私をチラチラ見てる。

え？自己申告しろってこと？

「わ、私が間違えて押しちゃった」

てへへと笑いながら手をあげると比企谷君の妹さんの驚いた顔が見えた。

え？めっちゃ可愛い!?

顔立ちは整ってるし目もキラキラとしてる。

そして兄弟である証のあほ毛が可愛いさをプラスしてる。

ほえ……

「そうなんですか！ところでどちら様で？」

「は、はい！比企谷君と同じ学校に通ってる愛川花菜って言います」

「へえ……」

何やら妹さんがじろじろと眺めてくるんですが……

「それでどのようなご用件で!？」

「本を貸す事になったんだよ」

比企谷君が口を挟む。

「へえ！じゃあお茶いただけますからどうぞ上がっていただけますい！」

「え？」

「おいなんでそうなる」

比企谷君の家におじやまする？

凄く興味あるけど・・・なんか恥ずかしい。

「良いじゃん！小町愛川さんとお喋りしたい」

「はあ・・・愛川への迷惑も考えろよ」

「あの！愛川さん！」

「は、はい」

「どうですか？」

比企谷君の家・・・

なんかよくわからないけど入りたい！

「おじやましようかな」

「やったあ！準備してきますね！」

トタトタと足音を立てて小町ちゃんは家に戻る。

「妹がすまん」

———

「お、おじやまします」

どうぞどうぞとリビングに通される。

へえ……ここが……

キョロキョロと周りを伺つてると小町ちゃんに声をかけられた。

「ささっ！こちらに座ってください！」

「あ、ありがとう」

そこにはコーヒード皿に入れられたチョコレートが置いてある。

席につくと向いに小町ちゃん、その隣に比企谷君が座る。

「自己紹介しますね！比企谷小町っつていいいます！中三です！そこにいる目付きの悪い男の妹です」

「小町ちゃん……お兄ちゃんをそんな呼び方してはダメですよ」

「うん。よろしくね」

「え？愛川？今のスルーする方向で行くの？」

「私は愛川花菜です。比企谷君と同じ中学で、今も同じ学校に通ってます」

「へえ！じゃあ小町の先輩なんですね！」

「そう言うことになるね」

「花菜先輩って呼ばせてください！」

「良いよ！私も小町ちゃんって呼ぶからね」

「はいー！」

凄く人懐っこいな・・・

ほんとに比企谷君の妹なんだろうか？

兄弟でこうも違うとは思議だよね。

「それで！お兄ちゃんとはどういう関係なんですか？」

「どういう関係？」

うーん・・・どういう関係なんだ？

前に友達と比企谷君に言ったら違うって否定されたしな・・・

「もしかして恋人ですか？」

キラキラとした目で聞いてくる。

こ、恋人!?

「ち、ちがうよ！恋人じゃない！」

比企谷君の家に来て緊張してるとても重なって凄く恥ずかしい。

比企谷君と恋人か・・・

って私い！比企谷君の家でなんて想像してんのよ！

恥ずかしい・・・

小町ちゃんは嬉しそうな顔をしてる。

顔を真っ赤にして俯くと比企谷君の目がいつもより少し腐ってるのに気付いた

「小町・・・変なこと言うなよ・・・あんな顔真っ赤になるほど愛川が怒ってるだろうが」

「え・・・」

お、怒ってないよ？

恥ずかしいだけだよ？

「はぁ・・・ほんとごみいちやんだなあ」

「え？俺なんか悪いことしたっけ？」

「花菜先輩に本貸すんでしょ？取りに行ってきたら」

「へいへい」

か、家族にごみ扱いされてる・・・

なんだか悲しくなってきたよ。

でも、今の勘違いは確かにごみだな。

そんなことを考えてたら視線を感じた。

小町ちゃんが嬉しそうな顔をして見てくる。

「どうかしたのかな？」

「いやー、小町は義姉ちゃん候補ができて嬉しいなって」

「候補？」

「おっと！間違えた！お姉ちゃんが出来たみたいで嬉しいです！」

「・・・まあ良いけど」

「ところで花菜先輩も奉仕部の一員なんですか？」

「ううん・・・私は違うよ」

「へえ・・・じゃあ一体どこでお兄ちゃんと仲良くなつたんです？」

「出会いか・・・」

「はい！気になります！兄のような人間と本の貸し借りをするくらいですからね！」

「凄い信頼だね」

比企谷君・・・みんなに酷い信頼の仕方されてるよ。

「えへへ♪教えてくださいよ」

「まあ別に良いよ。今年の4月にね・・・」

—————

「つて感じかな」

「へえ！」

あれから出会いだけでなく今までのこと全て話してしまった。

小町ちゃん・・・恐るべし！

「お兄ちゃん・・・やるなあ」

「うるせえ」

比企谷君も途中から戻ってきて話に参加していた。

基本的に嫌な顔をしたり照れたりばかりだけどね。

「花菜先輩！お兄ちゃんはこんななんで遊びに誘ってあげてください！」

「余計なことを言うな」

「お兄ちゃん二人で遊んできた日の夜いつもより機嫌がよかつたんですよ！」

え？楽しんでたって事だよな。

なんだろ・・・すごく嬉しい。

自分で顔がにやにやするのを感じる。

ふと比企谷君の方を見ると照れ臭そうに頭をかきながら目をそらしてる。

「小町・・・」

「はーい」

「んで、愛川」

「は、はい」

「ほら、これが言ってた本だ」

そう言って比企谷君は2冊の本を渡してくる。

そう言えば本を借りに来たんだった!

「ありがとう!」

「おう・・・」

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「もう時間も遅いしな」

今日は楽しかった・・・

下校時間がこんなになんて楽しかったのは初めて・・・

「また一緒に帰りたいな・・・」

「は?」

「い、いやその・・・今日は楽しかったからまた一緒に帰りたいなって思ってた」

もじもじと指をいじりながら言う

顔があつい恥ずかしい上手く喋れない!

何か変だぞ私!

恋する乙女か!

恋する・・・まさかね?

「良いじゃん良いじゃん!もう毎日一緒に帰ってきたら!?!」

「普通に嫌だけど?」



え？嘘？

なんで？比企谷君は楽しくなかった？

何だか悲しい……

うるうると涙ぐんだ目で比企谷君を見ると彼は気まずそう頭をかく。

「私と帰るのは……つままない？」

「そういう訳じゃない……」

「なら一緒に帰ろうよ」

「……はあ。わかった」

「うん！」

観念したように彼は了承した。

やった！毎日一緒に帰れる！

えへへ……つてなんでこんなに喜んでんの！？

なんだかよくわかんないや……

というか疲れた……

「じゃあほんとに帰るね」

「ああ……じゃあな」

「さようならー！」

早く家に帰って本でも読も。

## 9 話

7月下旬。

ジンジンとセミが鳴いているのを聞くと日に日に気温が上昇しているのを感じる。

地面は太陽光により熱を帯びていて二つの太陽に照らされている錯覚に陥る。

そう……つまり……

「あつい」

総武高校も夏休みに入り部活が朝から昼まで行われる。

もう練習が終わろうと言う時間はお昼でめちやくちや暑い。

「なんか楽しいことないかな……」

ボールを片付けながらそう呟く。

夏休みに入って全然遊んでない。

海も山もプールも行っていない……

どこかに行きたいよー。

夏休みの未来に思いを馳せていると天使が近づいてくるのが見えた。

「愛川さくらん」

「どうかした？」

「愛川さんって夏休みの予定とか決まってる？」

「うーん．．．今のところ全然予定ないんだ」

そう言うのと戸塚くんはペアつと顔を明るくした。

え？私が一人寂しくしているとそんなに嬉しい？

もしかして戸塚くんって私のこと好き？

welcomeだぜ？

．．．無いか。

「良かった。実は夏休みにこう言うのがあるんだよ」

そう言っつてケータイの画像を見せてくる。

平塚先生からのメール？

ボランティアの募集か．．．

「僕も行くこうと思うんだけど．．．愛川さんもどうかなって！」

「うーん．．．」

正直めんどくさいな。

私こう言うの苦手なんだよね。

といふかなんで私誘うの？

ま、まさか私のことほんとに好き!?

「ど、どうして私誘つてくれたの？」

ごくりと唾を飲む。

すると天使は思いもしない言葉を返してきた。

「だって愛川さんって雪ノ下さんとか八幡と仲良いんでしょ？」

「そうだけど・・・なんか関係あるの？」

「この企画奉仕部がメインで企画してるからさ、二人とも参加するんだー。だから愛川さんもどうかかって」

な、なんだ・・・やっぱ戸塚くんが私を好きなんてないなって思ってたんだよ！

ていうか比企谷君と雪乃ちゃんとお泊まりか・・・

「行くー！」

断るわけないじゃん！

二人と山、川行きたい！

「わかった！じゃあ片付け終わったら平塚先生のところ行こうか」

「うんー！」

夏休みが急に輝いてる気がするぜい！

楽しみだ！

——

ボランテイヤ当日。

「ちよつと遅れぎみかなー」

戸塚くんと待ち合わせて二人で集合場所に向かっていた。  
軽く走って向かっているとそれらしい人影が見えた。

「八幡っ！」

「比企谷君！」

やっとなついたあー。

今度からもつと早くつくようにしなきゃ……

そう思っていると戸塚くんが挨拶をしていた。

「戸塚さん！花菜先輩もやっはろー！」

「うん。やっはろー」

えつなにその挨拶可愛い……。

というかあの二人が可愛い。

「戸塚も呼ばれてたのか」

「うん、人手が足りないからって。でも……ぼく、行っているのかな？」

「いいに決まってるだろ！」

力強く即答だ。

確実に比企谷君は戸塚くんを信仰してるんだな・・・  
気持ちはわかるけど。

「私も・・・行っても平気なのかな？」

「平塚先生から呼ばれたんなら良いんじゃないやねえの？」

この扱いの差ね。

ほんとに戸塚くんすごいわ。

「全員揃ったんならとにかくいくぞ」

——

「すごい！山だ！」

懐かしい！中学生の時ぶりだ。

考えてみたらあの時も比企谷君と一緒に来てたのかあ。  
そう考えると少し感慨深いな。

「や、ヒキタニくん」

「・・・葉山か」

どうやら私たちと同じようにリア充のキラキラ王子たる葉山くんとその御一行も来

ているようだ。

なんかこのボランティアヤバイ気がする・・・

——

ボランティアの仕事をして夜になった。

なにやら一人の女の子が孤立しているらしい。

それを解決するために比企谷君と葉山君が動くこうとしているって、戸塚くんに聞いた。

どうやって解決するのだろうか。

雪乃ちゃんと話したり比企谷君の過去の事を聞いてきたが今の葉山君のやり方じゃダメだってことはわかる。

でも、どうしたら良いか私には分からない。

だから二人の手腕を見せてもらおうと決めた。

「花菜ちゃん！一緒に風呂呂入る？」

「先に行つてて花菜ちゃん」

それはそうと私は海老名花菜ちゃんと仲良くなった。

彼女なんかリア充って感じじゃなくて話しやすいんだよね。

由比ヶ浜さんとはそれなりに仲良くなった。



ただ三浦さんは少し苦手かな。  
自分勝手すぎるからさ。

「ふう」

姫菜ちゃん待つてるしお風呂に行こつか。

入浴シーンは今回もお・あ・ず・け☆

．．．いつも思うけど私のCカップじゃあんまり色気ないわ。

――

「そろそろ寝ましようか」

「そうだね」

夜も更けてきて寝てもおかしくない時間だ。

かちつと電気を消してみんな寝静まろうとする。

「ねえねえ．．．なにかお話ししようよ」

「由比ヶ浜さん．．．寝なさい」

「でも．．．少しだけダメかな？」

「．．．はあ。仕方ないわね」

「ゆきのん！ありがとう！」

「．．．あつい」

暗くてよく見えないがきつと雪乃ちゃんは照れてるんだろうな。

私の時みたいに！

負けた感じがしたので強調しちやった☆

「じゃあ恋話しよ！」

「ど定番だね〜」

「でしょ！じゃあ優美子から！」

「・・・」

「あ・・・マジで寝てる」

え？もう？

よっぽど疲れてたんだろうな・・・

「じゃあ姫菜は？」

「私？私は特になにも考えてないかな？今は誰とも付き合うつもりは無いよ」

「そうなんだ。姫菜ちゃん位可愛いと引く手数多でしょ？」

「そうだけどね・・・なんだか皆薄いんだよな」

「っ」

なにか・・・何か寒気がするような冷たい感じがした。

これが姫菜ちゃんの本質なのかな？

「そっかあ・・・」

「そういう結衣はどうなの？」

「わ、わたし!？」

「よく、告白とかされるけど断ってるんでしょ？好きな人いるんでしょ？」

「う、うん・・・」

「へえ」

そうなんだ・・・どんな人だろ。

由比ヶ浜さんくらい可愛かったら大抵の男は落ちるんだろうな。

「あ、愛川さんはどうなの？」

「私は恋愛とかよく分からないや」

「ほんとにー?」

姫菜ちゃんがなにやら含みのある言い方をする。

「私が見るに花菜ちゃんのヒキタニ君を見る目はなんだか特別に感じたんだけどな」

「なっ!？」

由比ヶ浜さんが驚いた声を上げる。

そんなに驚かなくても・・・

「別に比企谷君のこと恋愛対象って感じじゃないよ」

「少なくとも今はでしょ？」

「まあそうだね」

「ヒキタニ君って、たぶん出来る男だからね。惚れても良いと思うよ？」

「だからそうじゃないって」

私が比企谷君に抱いてる感情は恐らく友人として好きなんだってことだろう。

一緒に居たいって思うし、お話ししたくなるしメールや電話もしたい。

ほら友達だ。

「最後に雪乃ちゃんは？」

「・・・」

「ゆきのん寝てる」

「順番が遅すぎたのがダメだったね」

「うん・・・ 私たちも寝よっか」

「そうだね。おやすみ」

今度こそ皆寝に入る。

明日もあるんだし私も寝なきや。

比企谷君と葉山君の解決法も知りたいし明日は楽しみだ。

みんなおやすみ。

## 10話

「ふああ．．．」

大きなあくびをして目を擦る。

現在は朝食を食べているわけだが．．．

ね、ねむい．．．

なんだかいつもの布団と違うと寝た感じがしない。

今日の一日はきつそうだ．．．

乗りきるにはこれしかない！

「美味しい．．．」

カシュツつと持つてきたマツカンを開け飲む。

やっぱり朝御飯にはこれが合うよね！

しみじみマツカンを味わっていると遅れていた戸塚くんと比企谷君が来た。

「愛川さん！おはよう！」

「おはよう！」

うん。

今日も戸塚くんは天使。

異常なし。

そう言えばと比企谷君の方を見ると驚愕の顔をしていた。

「お、お前。そのマツカン何処で手に入れた？」

「え？こつちに來たら飲めないかもだから家から持ってきたんだよ？」

「くつ・・・俺も泊まりだと分かってたら・・・」

なにやら比企谷君がぶつぶつと呟いてる。

ふーん・・・マツカン持ってきてないんだ。

「よかつたら一つあげようか？」

「・・・マジ？」

「うん」

「でもわるいし」

「私何本か持つてきてるから一本くらい大丈夫だよ」

「まじか。ならありがたくいただくわ」

「はい」

「ありがとな」

そう言つて比企谷君は美味しそうにマツカンを飲む。

いつもの仏頂面ではなく本当に嬉しそうな顔をしている。

いつも大人らしくクールに振る舞っているのでこういう子供っぽい所を見るのも新鮮だ。

無意識に顔がにやつく。

なんだか胸が温くなるのを感じた。

『私が見るに花菜ちゃんの花キタニ君を見る目はなんだか特別に感じたんだけどな』

「っ」

ち、違う違う！

比企谷君が普段見せない顔をしてるから新鮮に感じただけ！

「友達」が嬉しそうにしてたら胸とかほっこりするのには普通だよな！

普通だよな？

恋じゃない恋じゃない。

「ふう・・・うまかった」

一人悩んでいると比企谷君はすでに飲み終えて何時もの腐った目に戻っていた。

「ささー比企谷君もはやくご飯食べよ？」

「おう」

——

「暑いね・・・」

「でもあと少しだ。頑張れ」

平塚先生が事前に遊べる川があると教えてくれたいた。

そこに今姫菜ちゃんたちと一緒に向かっているのだ。

「おっ。見えてきたぞ」

「おお・・・川だ」

「涼しそうだね」

そこには浅いがとても綺麗な水でキラキラと反射してる川があった。

「雪乃ちゃん達はどこかな？」

「うくん・・・あつー！いた！」

ほんとだ！

うわあ・・・雪乃ちゃんすごく綺麗・・・

名は体を表すって言うけどまさに雪乃ちゃんにぴったりだ。

透き通るように白い肌が惜しみ無く露になっている。

太陽光を反射してる綺麗な川と重なって 女の私でも見とれちゃう美しさを醸し出

してる

しばらく見とれていると何やらアホ毛が二つあることに気が付いた。



あれ？小町ちゃんの他にアホ毛って・・・

「ええ!？」

なんで!?!なんで比企谷君がいるの!?

さつと姫菜ちゃんの背中に隠れる。

『比企谷はこう言うのが苦手だからな。多分参加してこないだろう』

平塚先生・・・嘘だったんですか。

「愛川?どうした?」

比企谷君が近寄ってきて聞いてくる。

こ、来ないで!

昨日の夜ご飯のカレーいっぱい食べちゃったよお。

それに夜も由比ヶ浜さんのおやついっぱい食べちゃったからお腹が・・・

水着だつて一昨年なのだからあんまり可愛くないし!

あああああ!

比企谷君が来るってわかってたなら色々準備したのに!

姫菜ちゃんの後ろに必死に隠れる私を見て比企谷君は何かを悟ったのか離れていった。

ふう・・・助かった。

でもなんで離れるときに目の濁りが増したんだろ？

――

平塚先生が私を見かねて持ってきてきたパークを貸してくれた。そのお陰で大分自由に動ける。

平塚先生・・・ありがとうございます。

「花菜ちゃん！行くよ！」

「冷たい！やったなあ！」

姫菜ちゃんたちとはしゃいで水遊び。

楽しい！

夏休みって感じがして良いよね！

遊んでいるとふと視界の端に一人で地面を眺めている比企谷君を見つけた。  
なにしてんのかな。

「三浦さん！姫菜ちゃん！私ちよつと疲れたから休憩してるね」

「りようかーい」

私は二人の了解を得て比企谷君の方へ歩いていく。

「比企谷君！なにしてんの！」

「うお！愛川か・・・脅かすなよ」

「ごめんごめん……てか、本当になにしてんの？」

「蟻の観察」

「え？」

「蟻の観察」

蟻の観察……

なんだかすごく胸が苦しくなるのを感じるよ。

寂しすぎるでしょそれ。

「……わかったー！」

「なんだよ」

「比企谷君私の水着姿が見れなくて拗ねてるんでしょ？」

比企谷君は何言ってるのこいつって目で見てくる。

え？ 軽い冗談だったのに……

そこはそうだなって乗ってくれる所じゃないの？

「そんなんじゃねえーよ」

「ほんとに？」

「当たり前だ」

頑なに認めないな……

少しからかってみるか。

「比企谷君……」

そう言つてパーカーのチャックに手を掛けてゆつくりと下ろしていく。

比企谷君は一瞬胸元を見てからすぐに目をそらした。

見たね！

一瞬見たね！

よつしやあ！

「やっぱり、気になるんじゃない」

ニヤニヤと笑いながらいう。

私は胸も大きく無いし肌があんなに綺麗でもない。

奉仕部の二人に比べて劣っている。

それでもちやんと私に興味もつてくれてるんだって思うとなんだか嬉しいなあ。

「気になる。気になるからその中途半端に下ろしたチャックを上げてくれ」

「へ？……っ！」

チャック下げてたの思い出した！

うう……中途半端な感じが下着見せてるみたいで逆に恥ずかし。

服の中見られてたのかな？

勢いであんなことするんじゃないかった。

「ごめんごめん……」

「ああ……」

なんだか微妙な空気になっちゃった。

なにを話せば……

「花菜ちゃん！いつまでも休んでないで遊ぼうよ！」

「うん！今いく！」

「じゃあ行ってくるね」

「おう」

た、助かったあ。

——

現在は川から帰ってきて鶴見留美ちゃんのイジメをやめさせる会議中。

「みんながぼっちになれば争いも揉め事も起きないだろ」

「……」

葉山君の案はすべて却下。

そして今比企谷君の案を聞いた。

これは……

「うわー」

由比ヶ浜さんが引いてる。  
気持ちにはわからなくない。  
でも・・・それでも私は。

「・・・すごい」

凄いと思う。

まるで小説のような発想。

決して褒められた素晴らしいアイディアではない。

実行する側もかなり危険。

もしかしたら状況は悪化するかもしれない。

そんなことは分かっている。

それでも私はこのアイディアに感心させられる。

私では絶対に思い付かない。

本当に良く思い付くな。

比企谷君・・・

この瞬間私は心の底から比企谷君を尊敬していた。

――

「私がこれ着るの?」

そこにはピンク色の浴衣と猫耳がセットになつてゐる衣装が置いてあつた。

これつてさあ・・・妖怪じゃない?

「小町とお揃いです!はやく着てお兄ちゃんに見せてあげましょう!」

比企谷君にか・・・

小町ちゃんと並んでたら霞んじやうじゃん。

「わかつたよ」

——

「じゃーん!お兄ちゃん!どうどう?」

「あー可愛いぞ」

「それと花菜先輩!」

「ど、どうも・・・」

はずかかしいい!

猫耳つてなんだよ!?

こんな羞恥プレイ嫌なんだけど!?

しかも比企谷君に!

「・・・」

「あの・・・黙ってないで何か言ってくれと助かるんだけど」

「・・・悪くないんじゃないか？」

「っ」

ドキツと鼓動がはやくなる。

顔がにやつくのを感じる。

いやいやドキツじゃねえよ！

褒められたからなんだってのよ。

私ってそれなりに可愛いし！

似合うのも当たり前って言うか？

「ありがとう！比企谷君もゾンビの衣装完璧だね！」

「・・・俺衣装変えてないしノーメイクなんだが」

これが私に出来る精一杯の抵抗。

ごめんね！比企谷君！

ーーーー

現在みんなで花火をして遊んでる。

「比企谷君！」



「愛川か」

「やったね！」

作戦は成功！

凄い凄い！

まさかあんなにバツチリ作戦通りに行くなんて！

まさに爽快！

比企谷君！すごい！

ほんとに小説みたいだよ！

「褒められた事じゃないがな」

「そうだよね」

自分でも自覚してるんだ。

一般的な常識はあるんだよね。

なのにあのアイディア・・・

たぶん過去の辛い思い出の賜物だと思う。

それは多分良いことじゃない。

でも・・・

「それでも凄いよー！」

そう言つて微笑むと彼は顔を少し赤くしてそつぽを向いた。

あんなに凄いいこと考えられるのにこう言うことはほんとにまだまだ子供なんだ。そう思つたらなんだかおかしくなつてきた。

「なに笑つてるんだよ？」

「なんでもない！それより私たちも花火やろ！」

「おい！引つ張るな！」

二人で手持ち花火をする。

とつても・・・花火つて綺麗・・・

花火を眺めながら千葉村の思い出を思い出す。

姫菜ちゃんたちと仲良くなれた。

比企谷君と一緒に小学生の指導をした。

みんなで夜お話をした。

比企谷君に水着を見られかけた。

比企谷君の作戦に感動した。

比企谷君にコスプレ姿を見られた。

比企谷君と花火をした・・・

このボランティア・・・来れてよかつた！

## 11話

八月に入り夜であつても暑さは収まらない。

「・・・」

ボランテニアから数日がたった夜。

私は比企谷君に貸してもらつていた本を読んでいた。

今回借りたのは映画化までされた私でも知つてるメジャーなタイトルなやつと何だか怖そうなタイトルの本の2冊だ。

「ふう・・・」

面白かつた・・・

この作者の小説は色々考えさせられるから面白い。

今回のも欺瞞で溢れた現代社会を支配しようとする話だった。

これを読むと本当に世の中欺瞞だらけなのではつと思つてしまう。

いや、

実際そうなんだろうな。

「ふう」

それにしても借りた本はもう読んじやった。

また新しいの借りたいなく。

てか借りよう。

「えーつと・・・あつた」

電話を鞆から取り出して電話帳を開いてある名前を探す。

まだ9時だしまだ電話して大丈夫だよね？

比企谷八幡と記された場所を開き電話を掛ける。

プルルルルと数回なったら電話が繋がった。

『どもども花菜先輩！どうかしました？』

小町ちゃんが出てきた。

「比企谷君に用があつたんだけど・・・」

『兄は今お風呂に入ってるんですよ』

「そうなんだ・・・」

また後でかけ直そうかな？

『そだ！花菜先輩！』

「どうかした？」

『実は父親が職場の同僚にプールの無料チケットをもらいましてね』

「そうなんだ。良かったね」

『5日後に小町お兄ちゃんにプールに連れていってもらうんですよ』

「へえ〜」

相変わらず兄妹の仲良いなあ。

『それですね！実はチケット三枚もらいまして！花菜先輩も一緒にどうですか？』

「え!?!」

比企谷君とプール!?!

どうしよう凄く行きたい。

でもそうすると水着見られるのか……。

『用事あるんでしたら無理にとは言いませんが』

「うーん……」

『行けないなら雪乃さんや結衣さんとか誘ってみるんでチケットは消化できますし大丈夫ですよ?』

夫ですよ?』

「!?!」

胸がズキツとする。

いやいや何でだよ。

そんな事気にしてゐる場合じゃない！

折角ののチャンスが！

恥ずかしいなんて理由で無駄にできないよ！

「いい、行く！絶対行くよ！」

『おお！分かりました！楽しみにしてます！』

「うん！私も」

『おつ、お兄ちゃんもちょうど上がってきたので代わりますね』

『おう。愛川か・・・どした』

そう言えば比企谷君に本借りたくて電話したんだったなあ・・・

「借りた本2冊とも読んじやってさ。また新しいの貸してくれない？」

『別に構わないが・・・いつくる？』

「じゃあ5日後の朝に借りてた本持ってくるから。帰りに新しい本貸して」

『了解』

「うん！5日後楽しみにしてゐるね！」

『お、おう・・・わかった』

「じゃあねー」

通話しゅーりよう。

「はあ・・・」

比企谷君とプールかあ・・・

「・・・やばい！」

どうしよ!?

行きたくてつい承諾しちゃったけど。

比企谷君に水着姿見られるう！

「はずかしいいいいいい！」

どどどどどどうする!?

いやいやこう言うときこそ落ち着け落ち着け。

決まってしまったものは仕方ない。

今やれることを。

いや、

やるべき事をするんだ。

とりあえず基子と美波に連絡だ。

無題

———

買い物行きたいから付き合つて  
明日の12時に千葉駅に集合で

———

よし送信。

兎に角まず先に水着を買わなきゃ！  
飛びつきりのを買わなきゃ。

後はお腹回り・・・

今日から食べる量減らそ・・・

———

「あつ！基子！」

「おす！おひさ！」

「や！基子ちゃん」

「おお。美波も来てたか」

現在11時50分

みんな揃つたみたいだね

「じゃあ、いこうか！」



「いやあー買った買った」

「買い物を買ませて現在はカフェで休憩中。」

「しかし可愛いの見つけられて良かったよ」

「花菜ちゃんの買いたい物って水着だったんだ」

「うん」

「わざわざ新しいの買うなんて・・・男か？」

「そ、そんなんじゃないよ」

「ええ・・・」

「なんでそんなの分かるんですか基子さん」

「!?!」

「花菜ちゃん・・・いつの間に?」

「いやいや違うの!今度比企谷君とその妹さんとの三人でプールに行くことになったから」

「ええ!?!家族同伴!?あんたらいつの間に・・・」

「だからそんなんじゃない!」

「花菜ちゃんだったーん」

「意外だよな〜」

ニヤニヤと二人してからかってくる。

くっ！この糞アマどもが！

おつとこんな言葉遣いは乙女失格☆

「お二人さん。そんなゲスな目で見てはいけませんことよ？」

「え？花菜ちゃんどうしたの？」

二人が痛いものを見る目で見ている。

「ちよつと上品に行こうかなって」

「へえ」

「おいこら、聞いといて興味なしかい」

「そんな事よりさーこの前」

もう飽きたのか話題をそらす基子。

まあ私としてもそれで良いんだけどさあ。

なんか寂しくない？

――

「ふう」

水着は持った。

-googleも大丈夫だし、浮き輪もある。

荷物に関してはもう問題ないだろう。

だけど・・・

「着ていく服が決まらない！」

この服だと少し地味かな？

こつちだと派手な気がするし・・・

でも比企谷君は目立つの嫌だろうから地味めなのが良いかな？

でも地味すぎてセンスないとか思われたくないし。

難しいよお・・・

うううう。

ふと時計を見る。

げっもう11時!?

明日は8時に比企谷君の家に集合なのに・・・

ええい！もうこれで良いや！

服は決めた。

荷物も確認した。

後は寝る！

おやすみなさーい。

「・・・」

明日・・・比企谷君とプール。

凄く楽しみ。

ドキドキしてきた。

明日私の水着姿を見て彼はどんな反応をするのかな？

きつと照れて目線をそらす。

それをからかうときつと目の濁りが強くなるはず。

それで私が近寄るときつとまた照れる。

そんな彼を想像するとニヤニヤしてしまう。

『私が見るに花菜ちゃんの比企谷君を見る目は何だか特別に感じたんだけどな』

「・・・」

ボランティアの夜姫菜ちゃんに言われた言葉が頭に浮かぶ。

私は本当に比企谷君を友達としか思っていないのか。

私は今まで恋などしたことないのでわからない。

うーん・・・

そうだ。

最近基子に面白いと勧められた恋愛小説を読んだ。

そこに書いてあったことを参考にしてみよう。

ヒロインは好きな人を想像すると胸がポカポカ温かくなると言った。

比企谷君の事を想像してみよう。

・・・彼はめんどくさそうに頭を掻きながら私を助けてくれた。

私が近寄ると照れてそっぽを向いてしまう。

そんな彼を想像すると胸が温かくなる。

うん、当てはまるな。

次行こう次。

ヒロインはどうやら抱き締められることを想像すると嬉しくなってもがき始める。

・・・比企谷君に抱きしめられる。

「っ！」

は、はずかしい！

なんなのこれ！耐えられないよ！

うああああ！

まって！落ち着いて！

s t a y s t a y

こんなだけで悶えるとか私恋する乙女かよ。

とりあえず抱き締められるのは嫌ではない。

むしろ……

これも当てはまるな。

「あれ?……もしかして」

これって本当に……

いやいや。

まだ最後のとつておきがあつたぜ!

ヒロインは遊園地とか水族館とか楽しいところに行く時誰と一緒にいるのかを想像する。

真つ先に頭をよぎった人を好きなんだとそう言う仮定法を使って自覚した。

それをやってみよう。

私の場合はデステイニールランドかな。

千葉県民だしね!

さーってランドに入ってすぐ走ってパンさんに並ぶでしょ?

その時一緒に走ってる人は……

中肉中背の男の子。

ピンと出たアホ毛。

腐った目をして面倒くさそうに走る。

私はそんな様子を見てくすくすと笑っている。

そんな彼は・・・

「・・・当てはまる」

嘘・・・ではないよね。

私は本当に比企谷君のこと・・・？

正直まだ良くわからないし実感もない。

友達と言われれば多分そうだと納得もする。

だからこそ信じられない。

信じきれない。

「・・・よし」

明日のプールで私の気持ちを確かめよう。

比企谷君と近づいてどうなるか。

私の初恋かもしれない案件。

はつきりさせなきゃね

## 12話

どうも！

すっかりお馴染みになった愛川花菜です！

本日は待ちに待った比企谷兄妹とプールに遊びに行く日です。

それはもうウキウキで待ち合わせ時間に比企谷君の家に着いたのですが。

「ふう……」

インターホン……またこいつを押さなきゃいけないのか。

一回だけ押したとはいえまだ慣れない……

ええい！女は度胸よ！

意を決してボタンを押すとピンポーンと心地よい音になる。

するとドタドタと足音が近づいてくるのを感じた。

「はい……って愛川か」

「おはよう！」

「おう」

「はい！貸してくれてありがとうね！」



「はいよ。小町がまだ準備してるんだが・・・待ってくれないか？」  
「うん」

数分待つと小町ちゃんが慌てた様子で出てきた。

「お待たせしました！」

「よーし！行こうか！」

――

「今日は小町に付き合ってくれてありがとうとな」

三人で並んで駅まで歩いてると比企谷君が不意にお礼を言ってきた。

「ううん。私も遊びに行きたかったし気にしないで」

「すまんな」

「私の方こそチケット貰えるんだしありがとうだよ！」

「ああ」

そう答えると比企谷君は少し微笑んでいた。

それを見ると胸が一瞬ぐつときた。心地よい胸の高鳴り。

それを感じたときに今日のプールの目的をひとつ思い出す。

私の気持ちを確かめる。

――

「えーつと・・・」

「なに探してんだ？」

駅につくなり小町ちゃんは何かを探すようにキョロキョロと回りを見渡す。

なにか買い忘れたのかな？

「あつー！いた！おーい！」

そう言つて小町ちゃんは見覚えのない女の子二人の所に走つていった。

それに続いて私たちも小町ちゃんを追う。

小町ちゃんはきやつきやと楽しそうにお喋りしてる。

「どうかしたのか？」

「あれ？言つてなかったっけ？小町は中学の友達と回るんだあ」

「は？」

え？

それつてつまり・・・

「私と比企谷君の二人で遊ぶつてこと？」

「そうなりますね」

よつしやあああ！

じゃなくて。

ええ!?

そんな聞いてないんだけど!?

さすがにそんな覚悟は決めてきてないよ?

「小町……」

比企谷君が恨めしそうに小町ちゃんを睨む。

「じゃあ先に行くねー」

そんなの気にしないという風で小町ちゃんたちは駅に入ってしまった。

「……」

比企谷君と二人つきり!?

この状況だと少し気まずいんですが……

普段の下校ではこんな雰囲気にならないのに。

比企谷君の方を見ると目が濁っていくのがわかった。

え? 私と二人つきりって嫌?

「愛川」

「ひゃい!」

考え事をしていたときに呼ばれたから変な返事しちゃった……

「小町が行っちゃったし俺たちは帰るか?」

え？帰る？ナニイッテルノ？

「私はここまで来たし、準備もしたから遊びたいな」

「まじか・・・でも俺と二人だけだどつまらんだろ？」

「そんなことないよ」

「だが・・・」

「比企谷君は私と二人だと嫌？」

ほんとに嫌だ思われてるなら・・・

想像するだけで胸が苦しくなる。

「そんなことないぞ」

顔がシヨボン状態になっているであろう私を見て比企谷君はそう告げる。

「じゃあさ・・・一緒に行く？」

「・・・そんなに行きたいのか」

「うん！」

「はあ・・・つまんなくつても知らないからな」

よし！よしよし！

こんなところで帰ったんじゃないのの意味もない。

渋々といった顔だが比企谷君と遊べるのであれば些細な問題。

「ありがとう！」

「ああ・・・とにかく行くこうぜ」

「——」

プールに到着し私たちはそれぞれの更衣室に別れ着替えをしていた。

新しい水着もバッチリ

よし！準備おつけー！

・・・だけど。

「は、恥ずかしい・・・」

どうしよ!?

今回の水着はビキニタイプだし攻め過ぎな気が・・・

お腹回りはなんとかなってるけど。

水着似合ってるかな？

体の準備はオツケーだけど心の準備は整ってない。

「・・・よしー」

行こう。

ここでもじっとしてても仕方ない。

よし・・・よし！

意を決して外に出るとアホ毛が立ってる男性の後ろ姿が見えた。  
濃い緑色のトランクスタイプの海パンを履いている。

「ひっきがーや君」

後ろから声をかけると彼はおせえよと言わんばかりの態度で振り向いてきた。

「お待たせ」

「・・・」

じつと私の事を比企谷君が見つめてくる。

ちよ、ちよつと・・・恥ずかしいんですが。

比企谷君に見られてる・・・やばいやばいやばいやばいやばい。

待てよ？もしかして新しい水着が変なのか？

「私の事じつと見てるけど・・・どこか変かな？」

少し不安になって聞いてみる。

「いや・・・そうじゃない」

頬を少し赤くしてそっぽを向きながら頭を掻いてる。

この反応はもしかして・・・

「ねえねえ・・・水着どうかな？似合ってる？」

「・・・言わなきゃダメ？」

「聞きたいな」

「その・・・なんだ。似合ってるんじゃないか？」

「似合ってる？ほんと？」

「ああ」

やった！うれしいいいい！

自然と口がだらしなくニヤニヤと、崩れてしまつてる。

それにしても褒め方が比企谷君らしいや。

中学の頃、同級生の男子に可愛いと褒めてもらったことはいっぱいあったが今、比企谷君に褒められた時の方が何十倍も嬉しい。

「おい、黙んなよ。恥ずかしいだろうが」

私が心の中でほっこりしていると比企谷君に声をかけられた。

「ごめんごめん！ありがとうね」

「もういいから早く行こうぜ」

「うん！」

——

今回来たプールは広くて流れるプールやウォータースライダーなどなど、多くの遊べるポイントがある。

現在私たちは流れるプールで遊んでいる。

私は持つてきた浮き輪に乗ってプカプカと流れ、比企谷君は私の浮き輪を掴んで流れている。

「比企谷君！すごいよ！ほんとに流れてる！」

「そうだな」

「私流れるプールは初めてだよー」

「俺もだ・・・思ったよりもゆっくり流れるんだな」

「そうだね。浮き輪で浮いてると気持ちいいよ」

「気持ち良さそうだな・・・」

比企谷君が羨ましそうにこちらを眺めてる

「貸してあげようか？」

「良いのか？」

「うん！」

「じゃあ遠慮なく・・・おお。こりやいな」

気持ち良さそうに比企谷君は浮いている。

その表情はとて嬉しそうで珍しくはしゃいでいるのが分かった。

なんだか・・・こういうのいいよね。



「最高だなあ……」

ぐだぐだと力を抜き始めた比企谷君はリラックスモードに入った。

ふふふ……私がいるのを忘れてないかな？

「おりや！」

「おまつ」

バシャーンと大きな音をあげ浮き輪がひっくり返しかえる。

あの比企谷君の驚いた顔……おもしろ！

「やってくれたな……」

「へへーん！油断してる方が悪い」

「はあ……たく」

もう許すの？そんなのつまんないよ

こうなったら。

「くらえ！」

手で比企谷君に水をいっぱいかけまくる。

「ちよ、愛川。やめ……」

「きこえなーい！」

「このー！」

「あはは！怒った怒った」

「まてー！」

怒った比企谷君が追いかけてくる。

楽しい！

ー

あれからそれなりに遊んでなかなか体が重くなってきた。

そろそろ休みたい。

「そろそろ休もうぜ」

「うん」

比企谷君も同じことを感じたのだろう。あちらから休憩を提案してきた。

近くのベンチに腰を下ろし二人でのんびりと過ごす。

さつきみたいに騒ぐのも良いけど・・・こういうのも良いよね。

特に会話をするでもない。だけど不思議と気まずさを感じない。

比企谷君にしか感じない不思議な魅力。

胸がポカポカと暖まる。

今日は何回胸が暖まったのだろうか。

「・・・」

やはりこれは恋なんだろう。

だけど確信が持てない。

ちやんと確かめたい。

これが恋なのだと思いたい。

そう思った時に自然と比企谷君の手を握っていた。

「あ、愛川？ どうした」

「ちよつとの間……このままでいさせて」

彼は照れて振りほどこうとしたがその言葉を聞くと難しい顔をした。

私は今の状況を確認する。

比企谷君と手を繋いでいる。

心臓の、鼓動が早い。

とつても恥ずかしいし今すぐ隠れたい。

でも……それでもこの手は離したくない。

比企谷君を見る。

彼は慌てたような、焦ったような顔をして何かを考えてなにか答えが出たのか声をか  
けきた。

「寒いのか？ それとも何か嫌なことでも思い出したか？」

それは私を心配してかけてきてくれた言葉。

「うん・・・違うの」

やっぱり優しい・・・

心配して言葉をかけてくれる彼・・・

目が泳いで、顔を少し赤くしてる。手汗もかいてきてる。

そんな比企谷君を見ると愛しく感じる。

ああ・・・やっぱり私はこんな彼を。

いや。こういう彼だからこそ・・・

「比企谷君」

「何だ？」

「比企谷君は私の事好き？」

「・・・そういうこと聞く？」

「うん」

「・・・嫌いじゃない」

嫌いじゃない・・・か。

比企谷君らしいや。

「そっか」

「ああ」

私は手を離しベンチに座っている比企谷君の前に立つ。

「私も比企谷君の事嫌いじゃないよ!」

最高の笑顔でそう言い放つ。

今はこれで良い。

でもいつの日かしっかりと言いたい。

彼に”好き”だと。

「そうだ!今日の記念に写真撮ろうよ!」

「ええ・・・良いよ」

「撮るの!すみませーん!写真撮ってください」

「まじでか」

「ほら!ピースピース!」

「いきますよー!はいチーズ!」

「ありがとうございます!」

「お前・・・急に元気だな」

「えへへ。まあね!」

「たくっ」

「はい！休憩終わり！次はウォータースライダーに行こう！」

「お、おい」

そう言つて比企谷君の手を引つ張る。

今日は来れて本当に良かった。

私の初めての恋を実感できたのだから。

――

プールからの帰り道。

見事今回の目的である私が恋をしている事が分かったのだが。

「・・・」

気、気まずい！

二人つきりて！二人つきりてええええ！

体動かしてる時は何ともなかったのに、落ち着いたらどうしようも無いくらい恥ずかしい

しい

比企谷君の顔見れないよ・・・

「なあ、愛川」

「な、なに？」

「俺これから晩飯外で食うんだが・・・一緒に食うか？」

「っ！」

比企谷君からのお誘い！

顔がにやける。

すごく嬉しい。

やった！

・・・というかご飯誘われただけでこんなに喜んで。

私ってかなり乙女だな。

「行かないのか？」

「行く！行くよ！」

「お、おう・・・」

「それでどこで食べようか」

「どこでも良い」

「比企谷君はどこに行きたい？」

「サイゼとか？」

「っ！・・・サイゼ」

思わずぶつと吹き出す。

女の子と初めての晩御飯に行くのにサイゼって・・・さすが比企谷君！

そういうところも大好きだぜ！

「サイゼをバカにするのか？」

「しないしない。千葉県民ならサイゼだよね！」

「愛川。マツカンの時といいわかってるじゃねえか」

「じゃあサイゼに決定ね！」

もうさつきに比べて緊張もしてないし気まづくもない。

馴れるの早いな私。

———

「ふう・・・」

ご飯を食べて家に帰宅してきた。

お風呂も済ませいつものように部屋でのんびりモード。

ベットに横たわり今日の出来事を思い出す。

『比企谷君は私の事好き？』

「うわああああ！」

はずかしっ！

なにそのセリフ!?

バカじゃない!?アホじゃない!?



いやああああ！

バタバタと布団の上で悶える。

最近こんなのばかり。

あんなこと何で言っちゃうかな。

ほんとあの時の空気に当てられてたよ．．．

「．．．はあ」

でも今日は自分の気持ちを確認できたんだし良いか。

「やっ」と」

携帯を取りだし比企谷君に今日は楽しかったとメールを送る。

もちろんあの時に撮ったツーショットの添付は忘れない。

送信っと。

この写真、家できつと小町ちゃんに見つかって面倒なことになるんだろうな。

まあ別にどうでも良いか。

それにしても。

「比企谷君とのツーショットか．．．」

それを眺めるとついつい顔がにやける。

「えへへ．．．」

これ現像して写真立てに飾ろっかな♪

・ ・ ・ 私も恋をすると乙女になるんだな。

「ふああああ」

やっぱ今日は疲れた。

なんだか眠くなってきたよ比企谷君。

心の中で写真の比企谷君に話しかける。

そして徐々に夢の世界に入っていった。

## 13話

九月上旬。

九月になったとはいえまだまだ夏の暑さが色濃く残っている。

そんな中私、愛川花菜は自分の教室に向かつて歩いていった。

そう。夏休みが終了したのだ。

ガラガラと、扉を開けるとすでに雪乃ちゃんや基子、美波は到着していた。

「雪乃ちゃん！おはよう！」

「愛川さん。おはよう」

久しぶりに聞く雪乃ちゃんの声。やっぱ綺麗だ・・・

次はあの二人に挨拶に行く。

「お二人さん。おはよう」

「おう！久しぶり！」

「おはよう」

この二人とも会うのは久しぶりに感じる。

最後にあつたのは水着を買ったときだろうか。

た  
そしてお互いの部活がどうだった、などと雑談をしていると先生が扉から入ってきた

「みんな！席に着くように」

「もう、先生きたのか」

「じゃあまた後でね」

――

「〜であるから、明日からしつかり取り組むように。では終わりだ」

「おわったあ〜」

今日は始業式とホームルームだけなので午前中で学校は終わる。

帰宅部の人たちは帰り、午後に部活のある人は各々お弁当を食べ始めていた。

私たち、3人共午後に部活があるので教室で昼食を摂っている。

「花菜、そういえばどうだった？」

「何が？」

「比企谷君との夏休みだよ」

「まだ、聞いてなかったもんねー」

比企谷君との夏休み。

何かあったなんてもんじゃない。

私の人生初の恋を自覚したのだから。

でもそんな事喋るとこの二人はきつと調子に乗るからな・・・

ここは私の巧みな話術と女優並みの演技力で誤魔化すか。

「な、なんにもなかったよ〜」

「嘘だね」

一瞬でばれました・・・てか何でばれた!?

「な、ななな何で嘘だと思うの?」

「あまりにも挙動不審だからだよ」

「何かあったの見え見えだよ〜」

ふっ・・・どうやらこの二人には私の演技は通用しないみたいだ。

「何があつたんだよ? 良いから教えろ〜」

うりうりと肘で突つついてくる

はあ・・・まあこの二人になら良いか

「仕方ない。話すよ」

「うんうん! 楽しみ♪」

「夏休みに千葉村に行つてね。そこで・・・」

――

「……って感じかな」

千葉村の事、プールの事を喋った。  
もちろん私の恋についても。

「……」

二人は驚いた顔をしたまま固まっていた。

ちよつと……黙られると恥ずかしいんですが。

「な、なんとか言いなさいよ」

「いや……その、本当に惚れるとはな」

「ビックリだよ」

「うっ」

やっぱ恥ずかしい……

「一応確認するけどさ。比企谷君の事LOVEの意味で好きってこと？」

「……うん」

恥ずかしさで消え入るような小さい声しか出ない。

顔が熱い。頬が強ばる。恥ずかしすぎて涙が出そう。

顔を上げられないよ……

「か、花菜ちゃん可愛い……」

「なんだよその表情！乙女すぎる！！可愛い！」

そう言つて両脇から抱き締めてくる

止める恥ずかしい暑苦しい

「そ、そんなこと言われても嬉しくなんてない」

「きゃー！花菜ちゃん可愛い！」

「や、やめてよお！」

「怒つても怖くないぞ〜」

く、くそおー！こくなるなら言わなきや良かった

――

「はあ……」

あれから部活が始まるまで二人に絡まれていた。

そして部活を終え比企谷君を駐輪場で待っている。

本当に今日はとんだ厄日だ。

疲れたよ。

「よっ。待たせたな」

「っ！比企谷君！お疲れ！」

比企谷君だ！

彼の顔を見ると疲れを忘れ、自然と笑みが出てしまう

「おう。特に何も依頼なんて無いけどな」

「私は普通に半日部活で疲れたよお〜」

「うへえ・・・大変だな」

やっぱりこれだ・・・この下校の時間は最高だ。

夏休み前よりも楽しい。

ああ・・・この時間を励みに頑張っていこう。

私ほんとに惚れすぎだなあ。

――

数週間後の授業

「本日のホームルームでは文化祭について色々決めるぞ」

今日のホームルームでは文化祭について決めるらしい。

各学年のJ組はクラス替えが無いためクラスメイト間での連携が良い。

そのため普通科のクラスより僅かだがクオリティが高い出し物ができる事がある。

クオリティが高い出し物を出さなくてはと私たちのモチベーションも高く実際にか

なりての凝った事をするのだろうか。

今年はどんな事やるのだろうか。



せつかくの文化祭だから良い出し物を作りたい。

「最初に実行委員とクラス代表を2名ずつ決めるぞ。まずは実行委員からだ。やりた  
いやつは居るか？」

先生がそう言うとかラスには静寂が訪れる

実行委員は仕事が多いのでかなり面倒くさい。その上クラスの出し物にはあまり関  
われないのでクラスでの思い出作りが出来ない。

皆がやりたくないのは分かる気がするよ・・・

そんな事を考えていたら一人だけ手を上げる人がいることに気が付いた。

綺麗な姿勢で細くて白い手を上げるその姿に目を奪われる。

ただ挙手をしているだけなのに魅了されてしまいそうになうた。

「一人目は雪ノ下で良いな」

な、なんで雪乃ちゃんが実行委員に？

こういう行事に積極的に参加するタイプじゃないはずなんだけどなあ・・・

「他には誰かいないのか？」

雪乃ちゃんが実行委員をする文化祭か・・・

きつと凄いならうな。私も一緒にやってみたいかも。

でもな・・・女子の枠はこれで埋まっちゃったんだよなあ。

「なあ・・・花菜」

基子が肩をちよんちよんと突つついてきた

「なに？」

「実行委員さ・・・あんたやってみたら？」

「え？女子が二人でも良いの？」

「なんでもJ組だけは男女の比率が悪いから女子が二人でも良いんだってさ」

「まじ!?!」

それを聞いて私の心は大きく傾いた。

私は実行委員をやってみたい・・・っと

「それにもしも雪ノ下さんが部活の一環としてやるんならさ・・・実行委員に比企谷君も居るかもよ？」

「先生！私やります！」

ぱつと手を上げた私を見て基子は何やら笑っているが気にしない。

「おつ。これで二人だな。じゃあ決定だ。次はクラスの代表決めるぞ」

比企谷君や雪乃ちゃんと一緒に実行委員・・・すごく楽しみ！

—————

「え？部活の一環じゃないの？」

「ええ」

それは初の実行委員の集会に向かう途中に聞かされた衝撃の事実。そ、それじゃあ働くのが嫌いな比企谷君は絶対に居ないじゃん！

基子めえく！変な期待持たせやがって！

「愛川さん？」

「っ！何でもないよ！気にしないで！」

ま、まあ！比企谷君が居なくても雪乃ちゃんが居たらそれだけでも楽しみだし！

別に良いもんね。

ただやっぱり残念かなあ・・・

はあ。諦めよう。

「着いたわよ」

「うん」

ガラガラと扉を開けて入ると一瞬教室の空気が凍りつくのを感じた。

みんな雪乃ちゃんの事見てる・・・やっぱり驚くよね。

そう思つて雪乃ちゃんの方を見ると一瞬ある方向を見て動きが止まったのが分かった。その視線の先にいたのは・・・

「比企谷君!？」

駆け寄って聞いてみる。

「何で?!何でいるの!?!」

「何でって・・・実行委員だからに決まってるだろ」

「え?本当に?」

「ああ・・・残念な事に本当だ」

彼は嫌そうな顔でそう漏らした。

ほんとに比企谷君と実行委員やれるの?

やったあ!

一回諦めた夢が叶った気分だ・・・とっても嬉しい!

雪乃ちゃんと比企谷君・・・二人のすごい人と作る文化祭。

とっても楽しみだ!

私も頑張ろう!

## 14話

どうも！すっかりお馴染みの愛川花菜です！

私は文化祭の実行委員の会議をしています！

そして今やっているのは実行委員長を選出するための話し合いです！

ですが・・・

「・・・」

誰もやろうとしない・・・

まあ私もやりたくないから他人の事は責められないけど・・・ヤバイでしょ。

推薦とか出来たらな・・・雪乃ちゃんにやつてもらいたいのに。

雪乃ちゃんならきつと凄い文化祭を作れるはずだよ！

私たちをきつと正しく導いてくれるはず！

そう言う期待込めて雪乃ちゃんを見つめていると、彼女は諦めたようにため息を吐いた。

あれ？もしかして押しきれぬ？

「・・・あの」

よしやつと心の中でガッツポーズをしていると自信が無さそうな声を出す人がいた。  
「みんなやりたがらないなら、うち、やってもいいですけど」

えつと・・・どちら様ですかね？

全く知らない人が立候補してきた。

外見は可愛い方の部類ではないだろうか。基子とか美波の方が可愛いけどね。

あの人はどんな人なんだろう・・・仕事ができる人なら別に誰でも良いけど。

「相模さん。ここからよろしくっ」

「え、うちですか？」

「うん、ここからはもう委員長さんの仕事だと思っし」

「はい・・・」

なんと言うか・・・頼りないなあ。

城廻先輩に助けられながら役割を決めていく。

私？私はもちろん比企谷君と一緒に☆

—————

「はあ・・・」

「どうしたの？ため息なんてついて」

「俺の未来に仕事があるなんて考えただけでもう憂鬱だよ」

「ほんと比企谷君は仕方ないよね・・・」

一通り役割分担を終え、比企谷君と下校をしている。

「でもあの委員長見ると、ため息したくなるのも少し分かるかな」

「だろ？」

「あの人絶対に向いてないと思う・・・」

「それは分らんが何故俺がやつスキルアップの手伝いなんか・・・」

「まあ頼まれた訳じゃないし良いんじゃない？てか比企谷君自分のリーダーとしてのスキル微塵も無いのに手伝い出来るの？」

「そんなの知るかよ。あれじゃね？中学の時のリア充（笑）みたいに俺を省いて笑いで済むことで俺以外のやつ仲が良くなる、みたいな事なら自然と貢献できるな」

「またしようもない事言って・・・って中学の時そんな事されたの？」

「ああ、でも愛川が知らんのも無理無いかもな」

「ふん」

たまに聞く比企谷君の自虐ネタ・・・同じ中学にいた私にとってあまり良い思いをしない話ではない。

「じゃあな」

気が付くといつももの分かれ道に差し掛かろうとしていた。

「比企谷君！」

「うおっ、なんだよ」

「私は比企谷君から離れたりしないからね！」

それを聞いた比企谷君は照れて頭を掻きながら視線を逸らす。

その顔を見ると胸がポカポカする・・・幸せ。

しかしその幸せは一瞬で無くなる。

彼の目の濁りを増え、真面目な顔になったのだ。

「・・・愛川」

「な、なに？」

「っ」

「??？」

「カバンのチャック空いてるぞ」

「ええ!?!・・・ほんとだ」

「そんだけだ・・・じゃあな」

「う、うん!また明日ね」

そう言つて彼は自転車に股がり走つていった。

あの時・・・私の胸の温かさが消えたとき嫌な感じがした。



それに何か言いそうになつてたな・・・  
なんの話なんだろう。

きつといつか話してくれるか・・・そうだよね。

「うん！私も帰ろ！」

———

「私たちのクラスの出し物を決めたいと思います！」

今現在J組ではクラスの出し物を決める会議を始めた。

我がクラスの代表を勤めるのはなんと基子！

いったい何をするつもりなんだろうか・・・

「何かやりたいものがある人〜」

「無難にカフェとかやりたい！」

「カフェな」

そう言つて黒板に文字を書き出す。

「ほかは？」

「はい！お化け屋敷！」

「ほか！」

「コスプレ撮影所!!」

「ふう．．．こんなもんかな」

ある程度意見が出揃った感じだなあ。この後どうするんだらう。

「とりあえずお化け屋敷はたぶん他のクラスがやるし変化を付け難いから却下。射的をやるにしても銃とか調達が大変だし景品とかも用意するのにお金がかかるからなく。利益を出すととなると厳しいから却下。次の焼きそばだけ．．．」

お、おお．．．基子凄いな。

こんなにリーダーシップ有ったっけ？

「って事で残ったのは「カフェ」と「コスプレ撮影所」「グステイニー風な雰囲気のアトラクション」だな」

仕分けるのもはやっ！

十個以上あった候補を3つまで絞った．．．

「私はこれらの3つの中から多数決しようと思うんだけど．．．良い？」

「待って！」

「何かあるのか？」

「否定から入ってしまうのは良くない。皆の意見をくっ付ける事をしてみないか？」

「うん．．．確かにこの三つなら．．．」

藤塚君と基子の二人で何やら語り合い始めた。  
なんか・・・一人一人のスペック高いなこのクラス。

ーーーー

ホームルームが終わり部活中。

とりあえずクラスの出し物が決定した。

絵本の中のような装飾や衣装を着た店員によるカフェ。

装飾と衣装をメインに頑張るそうさ。

この出し物なら完成度次第で大きく評価が変わってしまう。

クオリティが高い物ならとても評価が高くなるだろう。

みんなのモチベーションも高いしなんとかなりそうさ。

私も手伝い頑張らなきゃ！

「愛川さん！」

「っ！」

ビックリした・・・誰だよもう。

振り替えるとそこにはこの汚れた現世に舞い降りた天使がいた

「ボーツとしてどうしたの？」

「な、なんでもないんだ」

「そう？なら良いんだけど」

「そうだ。戸塚くん、私文化祭実行委員になってさ……もしかしたらちよくちよく部活遅れたり休んだりするかも」

「そうなんだ……わかった！」

「うん！」

「じゃあ練習に戻って！サーブ練習だよ！」

「はい！」

——

凄いことになった。

なんと雪乃ちゃんが副委員長になったのだ！

その手腕は本当に凄くてもうみんな恐縮しちゃってる。

相模さんなんか縮こまっちゃって……なんというかお気の毒だ。

その雪乃ちゃんの手腕を発揮した翌日、私は今日も頑張るかぞつと会議室に向かっていった。すると見慣れたアホ毛の男の子を廊下で発見した。

「比企谷君！」

「うおつ、愛川か」

「うん！一緒に行く」

にっこりと微笑みながら言うと、比企谷君の隣に少し驚いた顔をしたイケメンさんがいた。

葉山くん？なんでリア充KINGが比企谷君と一緒に？

「やあ、愛川さんも実行委員なんだね」

「うん。葉山くんはどうしたの？」

「俺は有志団体の申し込みの書類を取りに来たんだ」

「へえ・・・」

有志団体の数が足りない。なのでそれなら私たちにとつても良いことだ。

「頑張つてね！」

「ありがとう」

「たくつ・・・よく有志なんぞやるよな」

「ねえねえ比企谷君。私たちもバンドやる？」

「え？今の俺の言葉聞いてやると思った？」

「楽しそうじゃん！」

「俺は大人数の行動を好まない。バンドとなると四人くらいはほしいんだろ？嫌だよ」

「うーん・・・じゃあさ！私と二人でやろうよ！」

「二人でどうするんだよ」

「ピアノとギター！あとは二人で歌うの！」

「嫌だ。俺は人前なんかに出たくない」

「ちえー。つまんないの」

そんな話をしていると会議室に着くとなにやら教室の前に女子が群がっていた。何かあったのか？

中に入ってみると見慣れない美人さんが居た。

え？どちら様でしょうか？

「姉さん・・・何しに来たの？」

姉さん？雪乃ちゃんのお姉さんなの？

確かに言われてみたら似ているような・・・

そのお姉さんはこつちを見て明るい表情をして挨拶してきた。

「あれ、比企谷君だ、ひやつはろー！」

ええ!?!比企谷君と知り合いなの!?

なんで？なんで比企谷君が雪乃ちゃんの家族と知り合い？

も、もしかして・・・そう言う関係？

「あら？こつちの娘は誰？」

「あ、愛川花菜です。雪乃ちゃんと同じクラスです」

「ふうん・・・」

じつと見つめてくる。まるで私の価値を見定めているようだ。背筋に嫌な悪寒が・・・この人はきつと怖い人だ・・・逆らってはならない。

「ヨロシクね」

「は、はい」

「ところで比企谷君とはどういう関係？ずいぶん親しげだけど」

「ど、どういう関係って・・・」

そう聞かれると何だか恥ずかしくなってしまう。

カツプルに見えました!?だと嬉しいなあ。

でも恥ずかしい！

緊張で青くなっていた顔が赤くなっていくのを感じる。

それを見ていたお姉さんはふと言葉を漏らした

「・・・可愛い！」

「へ!?!」

「君可愛いね。お姉さん少し気に入っちゃった♪」

「ええ!?!」

ど、どういう事ですか？まさかこの人百合!?

いやああああ！私には心に決めた人がいるんです！

「私の事は陽乃ちゃんって呼んでね。花菜ちゃん」

「え？え？でも……」

「お願い」

「は、はい……陽乃ちゃん」

ついつい押しきられてしまった。

なんというか美人なお姉さんを名前前で呼ぶの恥ずかしいな……

陽乃ちゃんと聞いて満足したのか雪乃ちゃんの所に戻っていった。

「ひ、比企谷君……」

「あの人に気に入られたら大変だぞ……ソースは俺」

「そんなぁ……」

うう……もつと平和に楽しく過ごしたいよお……

「はぁ取り合えず仕事するか……したくないけど」

「うん……」

私たちは自分の仕事を始める。

後から来た相模さんと陽乃ちゃんは何やら楽しそうにお喋りしている。あの人たち自分の仕事しなよ……あつ次は比企谷君の所に行った。陽乃ちゃん自由すぎるよ。



「みなさん、ちよつといいですかー？」

そんな事を思っていたら委員長がいきなり声をあげた。

「文化祭を最大限、楽しむには、クラスの方も大事だと思います。予定も順調にクリアしてるし、少し仕事のペースを落とす、って言うのはどうですか？」

「相模さん、それは少し考え違いだわ。バッファをもたせるための前倒し進行で……」  
それにたいして陽乃ちゃんが邪魔をする。それを見た委員長が前例があるのだと雪乃ちゃんの意見を打ち消す。

その時の相模さんの顔が雪乃ちゃんに勝ち誇った顔をしていた。なんだかその顔腹が立つな……よし！

「あの」

「ええつと……愛川さん？どうかしたの？」

「前例があるって言ってもその時の委員長はその陽乃ちゃんです。彼女の仕事量は聞いた話によるとめちやくちや凄いらしいじゃないですか。だから皆がクラスに顔を出す時間が出来た。雪乃ちゃんならともかく委員長は陽乃ちゃんと同じだけの仕事をこなせますか？それができないと言うのならこの案は少し無謀じゃないかな？」

「うっ」

相模さんの意見を否定した上であなたは陽乃ちゃんや雪乃ちゃんに激しく劣ると示

す。

ふふん、どうよ？なんと言ってみなさい！

「副委員長は雪乃ちゃんだし、私もちよくちよく顔を出すし大丈夫なんじゃない？」

「う、うん！それなら大丈夫！」

「つ……分かりました」

くつ、陽乃ちゃん……邪魔しないでよ。

恨めしく陽乃ちゃんを見ると彼女も私の事を見ていた。

『へえ……意外とやり手だね。楽しめそう』

彼女の目はそう物語っている。それを感じると背筋に嫌な汗が出てくる。

もうやだあの人！怖いよ！

「じゃあこの案は成立で良い？」

相模さんがそう言うパラパラと拍手が起こった。本当に可決してしまったようだ。

はあ……この先どうなるんだろ……

最初の頃抱いていた期待とは逆の感情を感じつつ私は仕事に取りかかるのだった。

## 15話

相模さんの案が通つて変化は表れた。

ちらほらと休む人や遅刻する人が出始めたのだ。

その事によつて一人あたりの仕事の量が増えて大変になつてきている。記録雑務と  
いうだけあつて私はあらゆる雑務の仕事をごなしていく。

ちらつと比企谷君を見ると怠そうに仕事をしていた。見た感じやる気が無さそうだがその仕事をする速さは記録雑務の中で一番だつたりする。

実は比企谷君つて仕事ができる男なのだ。

やだ、なにそれますます惚れちゃう。

本当に大好きなんですがお付き合いしてもらえませんかね。

「ふう」

一通り自分の仕事は終わったかな・・・比企谷君はどんな感じかな？

「比企谷君！調子はどう？」

「ああ？・・・終わらない」

「え？比企谷君私より仕事するの早いのに？」

「何やら他の所から仕事が割り振られてな……なぜか俺だけ」

彼の目がどんどん腐っていく。

能力があるのに本人の性格が仕事嫌いだからな……勿体ない

「私は自分の分終わったしき！手伝うよ！」

「……良いのか？」

「うん！」

「悪いな……まじで助かるわ」

「うん。元々は比企谷君の仕事じゃないんだし比企谷君がお礼なんか言うのはおかしいよ」

比企谷君って根は真面目なんだよね。こういう風にお礼を言える所とかさ。でも表面上があまりにも卑屈だからなあ……

「じゃあこれ頼む」

「うん！」

よーし！じゃあ比企谷君の為に頑張りますか！

――

あはは……シゴトツテタノシイ

雑務の仕事をしていたら頭がおかしくなりそうになる。

おかしくなる前に休まなくてはと今自販機まで逃げてきたところだ。

私は元々書き仕事は得意じゃないんだよね・・・計算は得意なんだけどな。

はあ・・・私もパソコン使わせてもらおうかな・・・

「さて・・・」

自販機で買ったマツカンを手にして会議室に帰る。

「比企谷君。お疲れさま！これ差し入れ」

そう言つてマツカンを渡す。

「愛川か・・・さんきゅ」

比企谷君はマツカンを受け取つてすぐに飲む。

「・・・うめえ」

「疲れた時にはこれだよね」

「まつたくだ」

「・・・ねえ。比企谷君」

「ん？」

「このままじゃ・・・やばいよね」

「・・・そうだな」

今は雪乃ちゃんが奮闘してるからなんとか回っている。しかしいつ雪乃ちゃんの限

界が来るか分からない。

「でも俺たちに出来ることは仕事をこなす事だけだろ」

「うん。私に出来ることはそれだけかな・・・でも比企谷君なら何か出来るんじゃない？」

「過大評価するな。俺はそんなに凄いやつじゃない」

「ううん。比企谷君は凄いやつだよ」

にっこりと微笑んでそう言うのと彼は何時ものように顔を赤くして目を逸らした。

「無駄口ばかり叩いてないで仕事するぞ。氷の女王様のお叱りを受ける前にな」

「ふふふ。そうだね・・・期待してるよ」

ぼそつと最後に呟いた言葉は彼に聞こえただろうか。

きつと比企谷君ならこの状況を打破してくれる。そう信じてまた仕事を再開した。

———

「はあ・・・」

朝教室に入ってきて最初にため息が出てしまう。就職したらこんな毎日が待つてい  
るのかと思うと比企谷君の将来の夢に賛同してしまう。

専業主婦か・・・比企谷君のお嫁さんならなりたくないなあ・・・

「不気味な笑い方してるけど大丈夫？頭でも打った？」

美波が心配して声をかけてきた。でも、さすがに今の言葉は酷くね？

「実行委員が本当に大変で．．．さすがに疲れたよ．．．」

最近の仕事の量がさらに増えて辛くなってきた。比企谷君が居なかつたら私もどうなつてたか．．．

「そんなんで今夜大丈夫か？」

「え？今夜？」

「うん。バンドの練習する予定じゃん。言つてなかつたっけ？」

「そもそもバンドやる約束なんてしたっけ？」

「覚えてないの？去年の文化祭終わりに約束したじゃん。来年もやろうつて」

「去年は楽しかつたしね」

そう。私たちは実は去年、一年生ながらバンドを結成して出場した。三人ともそれに可愛いので評判は良かつたし、私たちも楽しくやれた。でも．．．

「覚えてない．．．」

そんな約束覚えてないよ．．．

「まじで？もう有志の申し込みは済んじやつてるし嫌でもやつてもらおうよ」

「ええ．．．」

「良いじゃん良いじゃん！楽しいんだしさ」

「まあ楽しいのは認めるけど．．．」

うーん……仕事の後に練習か……  
辛いものがあるよな。

「愛しの比企谷君にラブソングとかさ！贈るとかしたらなんか良いじゃん！」  
比企谷君にラブソングを？

・・・良い。すごく良い。

やりたい……

「わかった……やるよ」

「やったあ！」

「恋する乙女は扱いやすいね……」

「うっさい」

「じゃあ決定！今日の放課後に駅前の児童館に集合ね。楽器は私が部のやつ借りておくから二人とも用事終わったら音楽室に取りに来て」

「了解！」

放課後か……今日から更にハードになりそうだな……

でもやっぱり良いよね。青春って感じで！

「お前から席につけ」

先生が朝のホームルームをしに教室に来た。そういえばまだ朝だったな。



いつもと変わり無くどんどんホームルームは進んでいく。

「ええ。本日は雪ノ下が体調を崩して欠席だ」

え？雪ノ下って言った？

どうして・・・

「っ」

たぶん頑張りすぎで疲れちゃったんだ。あれだけの仕事量を一人こなすのは無茶だった。

私をもっと手伝ってれば。

私の心にその後悔が確かに刻まれた。

――

「よう」

「おはよう」

「もうすでに仕事はじめてんだな」

「いっぱい残ってるからね！頑張らなきゃ。」

放課後、いつものように仕事に取り掛かっていたところ比企谷君に声をかけられた。

「そういえば雪ノ下はどうした？」

「雪乃ちゃんは・・・体調を崩して休みなんだって」

「は？まじで？」

「うん……」

「へえ……あいつが体調管理を怠るなんてな」

「ほんとだよ。後でお説教しなきゃだね」

「……お前も無理はするなよ」

「え？私？私は全然大丈夫！」

「なんか最近忙しいし、さつきも元気は無いのに張り切ってる感じだったろ？」

「ううん……私なんか頑張りが全然足りなくらいだよ」

「そんなことないだろ」

「ううん。そんなことある。私があいつと仕事頑張ってれば雪乃ちゃんの負担を減らせたのに……そうしたらこんな事にはっ！」

「はあ……あいつが体調を崩したのは、自分で自分の体調をコントロール出来なかったあいつの責任だろ」

「でも」

「それとも何か？愛川は雪ノ下の立場になったとき、部下が無能だったから体調を崩したって思うのか？」

「……ううん」

「そう言うことだ。それにお前が無理して仕事して体調崩すなんて事になるかもしれないだろ」

「そうだよね・・・」

「おう。そんな事考えたくないでさつさと仕事終わらせようぜ。俺は早く帰りたいんだ」  
比企谷君はやつぱり・・・優しいな。

よし！

「頑張るぞ！」

「頑張れー」

「比企谷君もだよ？」

「ええ・・・」

嫌そうな顔を彼はする。

そんな嫌そうな顔がやつぱり、愛しく思えた。

そんな、やり取りをしてると城廻先輩がみんなに聞いた

「雪ノ下さん、今日はどうしたの？」

「体調を崩して休んでるそうです」

「雪ノ下さん、一人暮らしだから誰か様子を見に行つたほうが」

雪乃ちゃんって一人暮らしなんだ・・・それだとやつぱり心配だよな。

「そうなんだ・・・じゃあ誰か雪ノ下さんの様子、見に行つてあげてくれない？こっちは任せてくれて良いから」

葉山くんと比企谷君の二人を見て城廻先輩は言った。

そのあと二人で何やら話し合いを始める。

「つかさ、愛川は行けないのか？」

「実はこのあと用事があつてね」

素子や美波と約束がある。それをサボると文化祭まで時間がないので本当にヤバイことに・・・

「・・・俺がいくよ。」

話し合いの末比企谷君が雪乃ちゃんの家に行くことになった。比企谷君なら安心だ  
なつと、ホツとした。

だけど雪乃ちゃんの家には比企谷君が行くことに胸がモヤモヤしていることに気付く。

一人暮らしの家で雪乃ちゃんと比企谷君が二人きり・・・

「っ！」

なんか・・・なんかもうっ！

雪乃ちゃんは心配だけど比企谷君には行つてほしくない。でもそれは完全に私の私情丸出しの発想。

こんな緊急事態なのに・・・やっぱり私つて。

「行つてくる」

「行つてらつしやい」

自己嫌悪に教われながら比企谷君を笑顔で比企谷君を送り出す。

はあ・・・虚しいな。

さてと、比企谷君も居ないし、いつもより仕事頑張らなきや。

――

文化祭のスローガンにいちやもんがついた。

どうやら今使つてるのが何かのパクリだとか何とか・・・

「相模さん、雪ノ下さん。みんな揃つたけど」

そう城廻先輩に言われて全員の視線が雪乃ちゃんに向く。

ここで相模さんに向かないつて所がこの実行委員が歪んでいる現状を表してる。

雪乃ちゃんはそんな状況で議事録をぼーっと見つめたままだ。今朝、大丈夫だと言つていたがやはり疲労の色を隠しきれていない。

やっぱり心配だな・・・

「雪ノ下さん？」

「え？」

僅かな時間があったが、雪乃ちゃんは現状を把握して進行を始める。

一人一人スローガンを紙に書いて提出するそうだ。

うーん・・・こう言うの得意じゃないんだよな・・・

あれかこれかと悩んでるうちにタイムリミット。紙を回収される。どんどん板書を進める。

one for allかあ・・・

なんだか今の状況ってまさにそれだね。頑張ってる一部が他のみんなの為にとって感じ。

「じゃあ最後。うちらの方から『絆　くともに助け合う文化祭』って言うのを・・・」

うわあ・・・こんな状況にした張本人が何を。

「うわあ・・・」

比企谷君も、同じことを感じたのかそう漏らした。

てか比企谷君と、考えてることが被った！うれしく！

小さな幸せに浸っていると何やら比企谷君と相模さんが駆け引きを始めた。

「・・・なにかな？なんか変だった？」

「いや、別に・・・」

「なにか言いたいことがあるんじゃないの？」

「いや、まあ別に」

比企谷君・・・めっちゃムカつく！

それ私やられたらぶん殴るわ、たぶん。

でもナイス！もつとやれえ！

プルプルと笑いそうになるのを堪えてると、どんどん話を進めていく。

「ふーん、そう。嫌なら何か案だしてね」

『人々よく見たら片方楽しってる文化祭』とか

「っー」

や、やばい・・・吹き出しそう。比企谷君・・・最高！

もう我慢できない・・・！

「ぷっ」

「あっははははっ！」

私が吹き出した音を陽乃ちゃんの笑い声が飲み込む。ナイス陽乃ちゃん！

それにしても比企谷君・・・ほんとにさいっこう。

いやあー。あの時の相模さんの顔・・・爽快だね。

「比企谷。説明を」

そこから彼は自分が犠牲だと、そう主張しながら説明をする。

それを聞いた雪乃ちゃんはとっても楽しそうだ。やっぱりこの前の夜、何かあったのかな？

「比企谷くん・・・却つ下」

そうして今日の会議は明日に持ち越しになり解散。帰り際に口々に比企谷君を悪く言う人がいた。その人たちはサボりが目立つ人たちばかり・・・

そうだよ。君達には嫌味に聞こえたよね。でもそれが現実だから。

ふと比企谷君を見ると帰り支度を始めていた。

「比企谷君！お疲れさま」

「・・・おう」

「今日は最高だったよ。爽快って感じ」

「ああ・・・これで明日から仕事に来るやつが増えるだろ」

「そこまで・・・」

自分を悪役にして仕事をやらせる・・・やっぱりすごい。

「このあとバンドの練習だろ？頑張れよ」

「うん！ありがとう」

「じゃあ」



「またね」

彼は足早に会議室を出ていった。

比企谷君・・・かつこいいなあ・・・

今なら抱かれても良いって言うくらい惚れ直した。

いやまあただの例えだけだね。

—————

翌日、比企谷君の発言により変化は表れた。今まで来なかった人たちは軒並み揃い、仕事を熱心に取り組んでいた。

比企谷君まじですごいなあ・・・

そう思い口元を緩めているとすべての元凶が近付いてきた。

「ひやつはろー！花菜ちゃんも相変わらず頑張ってるね〜」

「まあ頑張らなきや間に合わないですからね」

「大変そうですねえ」

「誰のせいですか誰の」

「ええー！花菜ちゃん私のせいにするの？酷い！」

オロロとわざとらしく泣き真似をする陽乃ちゃん。まったく気にしてないな・・・

「それはそうとき、花菜ちゃんは昨日の比企谷君どう思った？」

「やっぱ最高ですね。ほんと比企谷君は凄い人ですよ」

「おおう。さすが花菜ちゃん！わかってるう」

「当たり前ですよ。私と比企谷君の仲ですよ？」

ふふんと、どや顔で威張る。比企谷君の事なら私にお任せですよ！

「お姉さんも比企谷君の事欲しくなっちゃった」

「え？」

「花菜ちゃんも比企谷君狙いでしょ？敵は意外と多いよねえ。お互いに頑張ろ？」

「じよ、冗談ですよね？」

比企谷君を陽乃ちゃんが狙ってる？

戦ったって自力で負ける。見た目も学力も運動神経も私に勝てる要素はない。

どうしよ。

「さあね・・・じゃあ私は比企谷君に構ってもらいに行くね」

そう言つて絶世の美女は目の腐った私の思い人の元に歩いていった。

まさか本当に？

私のアドバンテージ、同じ中学出身と言う事実がある。

でも・・・中学での彼との記憶がほとんどない。実質私にアドバンテージはない。

頑張つて中学の時の事を思い出すんだ！

くっ・・・思い出せない。

「愛川さん。手が止まってるわよ？」

「は、っ、ごめん！」

今は仕事だ仕事！

もう色々考えないために仕事に集中した。

## 16話

文化祭初日。わが総武高校の文化祭は初日は学校内のみでの開催となる。

記録雑務は二日目に仕事が集まる。そのため一日目には時間に余裕がある。その事を基子に言ったら・・・

『だったら初日にいっぱい働いてもらおうよ！』

だってさ。まあ良いんだけどね。

「花菜ちゃん！はいこれ衣装！」

美波がはいつと紙袋を渡してくる。

「ありがと・・・てか美波凄く似合ってるよ！」

「えへへえ・・・ありがと！」

美波の衣装は水色のスカートに白いエプロン。不思議な国に迷い込んでしまった少女をモチーフにしているんだと思う。

悔しいけど・・・本当に可愛いなあ

「・・・擬ってるな」

衣装だけでなくクラスの装飾も凄く。全体的な配色を紺と水色で統一し青色や赤色

などのLEDを使い、良い雰囲気を出している。とても高校生が作ったものとは思えないほどの出来だ。

「当たり前でしょ！今年は本気だからね」

「基子か・・・」

基子がどうだと自慢げに歩いてきた。

「凄いよ。それに基子も似合ってる」

基子の衣装はT H E人魚の姫って感じだ。流石は水泳部だな。

それにしてもこれも凄いぞ。

下半身の魚の部分なんかどうやって作ったんだろうか？それに露出も多いな。胸に

二つ装備した貝殻の下には何か着けているんだろうか。

「サンキュー！あんたも早く着なよ。取って置きの用意したからさ」

「とっておき？」

「うん！ほらこつちこつち」

「ちよつ、押さないでよ」

—————

「・・・」

「お・・・」

私の衣装は青いドレスに白い髪飾り、そしてガラスの靴。女の子なら誰でも憧れてしまふあのお話のお姫様の衣装だ。

「ど、どうっ？」

やっぱりこういう格好するのは少し恥ずかしいよ……  
気のせいとかクラスの男子の視線をたくさん感じて痛い。  
やっぱりめて！これ以上精神的に攻撃しないで！

「なんとというか……想像以上？」

「花菜ちゃんってやっぱり可愛いなああって実感した感じ」

「あれ？それって誉められてます？」

「誉めてるよ。まじであんた可愛いよ」

「そ、そうかなあ」

可愛いか……やっぱりそう言われると嬉しいな。

「これなら比企谷君もメロメロだね」

「っ！」

ひ、比企谷君がメロメロ？

『愛川……いや花菜。可愛いよ』

きやー！ー！ありがとう比企谷くーん！

あまりの嬉しさに頬が緩むの感じる。

「花菜……しまりの無い顔をしないの」

「流石に今のは無いよ」

「う、うっさい！」

想像だけでこれとは……比企谷君への愛恐るべし。

比企谷君との妄想に恐れをなしていると文化祭の開始を合図する校内放送が流れた。

「よーし！お前ら！やるぞお！」

「おおー……！」

さてと。仕事しますか。

—————

「（注）注文は以上ですか？」

現在時刻は14時。

12時頃店は予想を上回るほど繁盛していた。今日だけで黒字になるんじゃないだろうか？

しかし今はかなり落ち着いていて余裕が出始めた。

「おーい！オレンジジュース二個とホットケーキ二個ね！」

「はーいー！」

「ふう・・・」

つ、疲れた・・・やっと一息つける。

客席から見えない裏方に行きマツカンを啜る。

ああ・・・美味しいなあ。

「よお花菜」

「基子か。お疲れ」

「うん。お前最初はめっちゃ恥ずかしがってたのに後半とかお構いなしだったな」

「流石に馴れたよ。あんだだけ長い間着てたしね。もう微塵も恥ずかしくないよ」

「ほーん。なら明日の私たちのバンドこの格好で出ようよ！」

「良いよー」

「じゃあ決定ね」

「明日はこの格好で歌うのか・・・思ったけど衣装と曲があつてないのあるけど大丈夫？」

「うーん。まあなんとかなるでしょ」

めっちゃや良い笑顔を作つて言う。基子つて時々無計画に行動するんだよねえ・・・

「花菜ちゃん！」

「美波か。どうした？」



美波が裏方にいそいそと入ってきた。美波は外で客引きをしてたはずなんだけどもう戻ってきたのか……

「お客さん連れてきたよー！花菜ちゃんお相手して」

「ええ……今休憩入ったばかりなの？」

「良いから早く！」

「分かったよ」

はあ……もう少し休みたかったな。

よいしよつと立ち上がり店に戻る。

えーつと……あの席か。

他にお客が居ない中男子生徒が一人で座っている後ろ姿が見えた。

うわあ……文化祭なのにこの店に一人で来るとは……勇者だな。

「ゴ注文はお決まりですか？」

後ろから声をかけるとびくつと跳ねた。

あれ？よく見ると見覚えのあるアホ毛が……

「つー比企谷君!？」

「……よう」

ななな何で比企谷君が!？」

そんな事を思った今の私の状況を思い出した。

お姫様のコスプレ中。

いやああああああ！

「は、恥ずかしいよ」

手に持っていたお盆で顔を隠して、その場にしゃがみこんでしまった。

顔が！顔があついよお！恥ずかしい！

「ちよ、俺がなんかしたみたいじゃん。もしも誰か入ってきたら誤解されるだろ。やめろやめてくださいお願いします」

「うう・・・わかった」

私は力を振り絞り立ち上がりお盆を体の前で抱える。

そうすると比企谷君が私の事をじーつと見ていることに気がついた。

な、何で見てるんですか恥ずかしいんですけど。

「ど、どうかな？」

「その・・・なんだ。似合ってると思うぞ」

「ほんと!?!」

「ああ・・・」

比企谷君は何時ものように頬を赤らめそっぽを向く。

そっか・・・似合ってるか・・・

彼の言葉を聞くと頬が赤くなりだらしなく緩んでいった。

やっぱり・・・嬉しいな。

「比企谷君」

「ん？」

「ありがとう！嬉しい！」

まだ頬が赤くなっていたが飛びつきりの笑顔でそう伝えた。

そうすると彼は頬の赤みを濃くし、こつちに目を向け見開いたまま動きが止まってしまっている。

「あれ？どうかしたの？」

「っ・・・なんでもない」

そうしてまたそっぽを向いてしまった。頬の赤みがどんどん増しているのは気のせいだろうか？

もしかして私の事を女の子として意識しちゃってた？

「ほんとの本当に？」

「本当だ」

「ええー！でも」

「注文はコーヒーだ」

「・・・かしこまりました」

お客という立場をうまく利用されてしまったか・・・ちつ本音を聞きたかったな。

裏方に行くともコーヒーは既にできていて後は運ぶだけだった。

ちよつと仕事早すぎやしませんかねえ。もしかして聞いてたのか？

ジトーツとした目で二人を見るとニヤニヤして見返してきた。

こいつら・・・

文句のひとつでも言おうと思つてたら美波がにこりと笑いコーヒーと私をつれて比企谷君の元へ歩いてく。

「お待たせしました。コーヒーです。」

「ども」

「それとサービスでこのガラスの靴のお姫様とツーショットを撮れます!」

「はあ!」

そ、そんなの聞いてないよ?

「ちよつと美波。聞いてないんだけど」

ひそひそ話で美波に文句を言う。

「比企谷君限定サービスだよ」

「でも……」

「花菜ちゃんとは比企谷君とツーショット撮りたくないの？」

「……撮りたい」

そんなの決まってる。こんなに好きなんだから思い出の写真はもつとほしいもん。

「じゃあ決まり！比企谷君！立って立って！」

「え？まじでやるの？」

「ほらほら並んで並んで！」

「愛川……」

「私は撮りたいな……嫌？」

「嫌ではないが……」

「お願い」

上目使いで涙ぐみながら頼む。文化祭の雰囲気やこの格好もあつてか比企谷君はあつさりと折れた。

「じゃあいくよー！はいチーズ！」

パシャと良い音がなつた。ちなみに比企谷君のスマホで撮っている。後で送つてもらわなきや。

「もう一枚撮るよ！次は比企谷君は花菜ちゃんをお姫様だっこして！」

「っ！」

お、お姫様だっこ!?比企谷君にしてもらえる!?

『姫、あなたの八幡が来ましたよ』

きやー！この人誰ですかってレベル。

でも実際されたら嬉しくて鼻血が出る気がする・・・

「さすがにそれは無理だよ」

「俺も流石にな・・・」

「ええ・・・じゃあ肩抱く位で良いよ」

「まあそれなら」

「おい愛川騙されるな。あれはわざと最初に凄いことを言っておきながら後から妥協案を出し妥協させる手口だ」

「は！」

た、確かに今そのくらいならって妥協してた・・・美波って意外に恐ろしいなあ。

「ふう・・・分かったか」

「うん！とりあえず写真は撮りたいから肩抱いて」

「・・・説得の意味無かったか」

「残念だね」

「まったくだ。てかお前は俺にそんなのされるの嫌なんじゃないか？」

「全然嫌じゃない。むしろ．．．ちよつとしてほしいかな」  
いきなり何言つてんの私？

恥ずかしすぎますよもう！もう顔の血液が沸騰してるんじゃないかってくらい熱い。

比企谷君に、何言ってるんだ私は。死ぬのか？恥ずかしさで死んじゃうのか？

ああ．．．また今夜も思い出して悶え眠れない夜になるのか．．．

「．．．」

今の言葉聞いた比企谷君は何やら眩いている。

何て言ってるのかな？

「もういい？早く撮ろうよ！」

「おっけえー！ほら比企谷君早く！」

「ええ．．．」

「もう！男らしくないよ！」

「本当に良いんだな？」

「うん」

「じゃあ．．．お邪魔します」

そう言つて彼は肩を抱き寄せてくる

ひやあ・・・

なんか。なんかもうすごい！

思つていたよりも大きな手が私の肩を掴む。

体も固くて女の子とは全然違う。

比企谷君つてやつぱり男の子だなあ・・・

そう思つたらドキドキがさらに大きくなる。

私どうにかなりそう！

「はい撮つたよ！」

「ふう・・・終わつたか」

比企谷君がすぐさま肩を離す。

ええ・・・もう終わりなの？あと少しだけやってほしかったなあ。

「はい。」

「さんきゅ」

彼はスマホを美波から受けとり中をちらつと見た。

「やべ」

「どうかした？」



「長居しすぎた。俺のクラスの係りの仕事やる時間になりそうだ。もう行くわ」  
「え？」

「じゃあな」

ガラガラつと出てく。はやいなあ・・・

でも比企谷君とツーショット撮れたなあ・・・えへへ。

顔をだらしなくして喜んでいたが、二つの視線に気付きすぐさますつといつも通りに戻す。

「やあ花菜。ずいぶんと楽しそうだったな」

「なんの事かな」

「花菜ちゃんの、デレデレモード始めて見たけど可愛かったよ」

「う、うるさい！」

やっぱりこいつらずつと見てやがったな・・・くそう。

「愛川さん！あの人好きな人なの？」

「誰よ誰よ！教えなさいよ！」

他にも店番をしていた女子三人も見てたのか・・・

「他のやつには絶対言うなよ？」

「わかってるよ基子」

「ほんとにお願いだからね？」

「まかせて！」

はあ・・・言いふらさないでほしいなあ。

――

この後滞りなくクラスの出し物は進み、初日は終了した。

明日からは実行委員の仕事にバンドだ・・・

頑張らなきゃな。

## 17話

文化祭の二日目。

本日は一般公開されるため多くの人で賑わうだろう。そのため俺たち文実は朝からフルメンバーで仕事をしなくてはならない。

俺の仕事は記録雑務。朝の仕事は体育館の2階の脇にある狭い道に有志の団体の撮影をするためのカメラやら演出をするための照明やらを設置する事だ。ちなみにこの2階の道の事をキャットウォークと言うらしい。ほんとかは知らんが。

照明とカメラを取り付け、撮影者が座るための椅子を用意すると後ろから不意に声をかけられた。

「比企谷君」

振り替えるとそこにはかつて同じ中学に通っていた愛川が立っていた。

「よう」

「頑張ってるねえ」

「本当は仕事なんぞしたくないんだけどな……」

「言うと思った」

そう言つてクスクスと笑い出す。

「じゃあ比企谷君が少しでも楽をするために何か手伝うことある?」

「あー、じゃあ椅子出しといてくれ。俺はカメラの位置を調節しとくから」

「おっけー!」

生徒会の備品であるカメラの画面を開き三脚に乗せる。

カメラの高さはこれくらいで良いか・・・後はズームか・・・

うーん・・・こんなもんだろう。

「完了したよ」

「こつちもちようど終わった」

「お疲れさま」

「まだまだ今日はこれからだろうが・・・」

「そうだね。なんだか今日は大変な1日になる気がするよ」

「まったくだ」

ここまで散々問題を起こしてきたからな・・・また最終日に問題とか起こるんじゃないかな。  
いだらうか。

はあ・・・頼むから俺の削り取られた精神をこれ以上削るのはやめてほしいなあ。

「休憩しよ!休憩!座つて座つて」

そう言つて愛川は椅子をパンパンと叩く。

「だな」

腰を下ろすと愛川はにこにこしながら照明のやつが座る椅子を持つてきて隣に置き、座った。

え？隣に座るの？

このキャットウオークはご存知の通り横幅が狭いため椅子で隣り合わせに座ると結構狭い。

近い近い近い。

肩とか触れてるし柑橘系の良い匂いするしもうなんと言うかヤバイです。

「あれ？比企谷君もしかして距離が近いから緊張してる？」

ばれてましたか。ばれるのは分かってましたとも。

最近愛川と居るとどうも調子が狂う。何回勘違いしかけたか分からん。中学校の俺なら間違いなく告白して振られるまでやってたな。

・・・中学か。

やっぱり愛川を見ると中学で一番最初に出来た負の記憶が頭にちらつく。

その事に關しては愛川は悪くないわけだし・・・その事を責めることも出来ない。悩んでも結局毎回なにも思い付かずに終わる。

「こんだけで緊張しちやつて、比企谷君かわいい〜」

「うるせえな。ボッチは誰かと近づくと落ち着かないんだよ」

「そうなんだ」

めつちやてきとー！聞く気ないなら言わないでよもう！八幡はおこだよ？

・・・きもいな

「まだ少し時間あるしお喋りでもしてようよー」

にっこりと笑つてこつちを見る。

こうやつて見るとやつぱりこいつ見た目は良いんだよな。

雪ノ下よりも子供らしくて由比ヶ浜よりも大人っぽいと言ったところか。

「そんなに悠長にやつてる余裕ないだろ」

「そう？折角これ持ってきたのに」

愛川はマツカンをポケットから出し差し出してきた。

「それを早く言え」

「たんじゅーん」

ふふふと微笑みながらマツカンを渡してくる。

ま、マツカンだ・・・！こいつさえいれば30分は頑張れる！

・・・短いな。

「千葉県民のソウルドリンクを差し出されたら断るわけにはいかないだろうが」  
「それに関しては同意かな」

こいつは数少ないマツカン愛を持つ同土だ。

基本的に毎日一緒に帰ってるが一週間マツカンについて語り合ったことがある。あんなに有意味な会話はなかなか無いな。

マツカンを二人で啜っていると愛川がそうだと手を叩いた。

「ねえねえ！今日の私たちのライブは見に来てね！」

「・・・時間が合えばな」

「それ絶対見に来ないやつじゃん！」

ちっ、ばれたか。適当にやり過ぎそうと思ってたのに。

「お願いだよお・・・私たち三人の時だけ誰もいなかったら辛いじゃん。せめて比企谷君だけでも見に来て？」

誰もいないライブとかどこのラブライブだよ。もしラブライブだとするなら俺はかよちんポジションか・・・ごはんたけたよおおー！

・・・きもいな。

「流石に誰もいないなんてことないだろ」

「比企谷君に来てほしいの・・・お願い」

目をうるうるさせながら上目遣いで言ってきた。

「なんでそんなに来てほしいんだよ」

「比企谷君に聞いてほしい歌があるんだ」

え？俺に歌を捧げてくれんの？愛川さんマジイケメンなんですけど。

てかなんで俺なんだよ。そんなこと言われるともしかして俺のこと好きなんじやつて思っちゃやうだろうが。

「お願い！」

・・・これは折れないな。仕方ない。

はあ。愛川って意外と頑固だ。

「分かった。きつと聞きに来るよ」

「ほんと!?絶対だからね！」

「ああ」

「ありがとう！」

そう言つて愛川は手を握ってきた。

ちよつと・・・そういう行為がだね、多くの男子を勘違いさせてしまふんですよ。これからは俺が間違えて告白しないように控えなさい控えてくださいお願いします。



「わかったから・・・手離してくれ」

「っ！ごめんごめん。嬉しかったからつい」

顔を赤くして、てへへと笑う。たぶんこのあざときは天然物なんだと思う。

癒し効果の薄いめぐり先輩って感じかな。

「おーい！もうすぐ文化祭始まるぞー！」

下でパイプ椅子を並べてた係りのやつが全員に大声で知らせた。もうそんな時間なのか。

「もうそんな時間か・・・じゃあ私たちも仕事しようか。この後は各クラスの様子を写真に撮るんだよね？」

「ああ。役割だがお前が1年のクラスを、俺が2年生と三年生のクラスを撮ってくる」

「え？全然平等じゃないよ？」

「お前バンドなるのに準備とか時間必要だろ。そのくらいの配慮はするさ」

「・・・ありがとう」

ええ・・・なんで愛川顔を赤くしてるんですか。本当に勘違いしてしまうよお・・・

「じゃあ行こうか」

二人で椅子を元の位置に戻し下に降りていく。

「また後でね！」

「おう」

愛川はカメラを持って駆け出して行った。

その後ろ姿を見ると毎回考えてしまうことがある。

「・・・」

昨日の行動と、さっきの顔が赤くなる態度。やっぱり愛川は俺のことを・・・？

いや、そんなはずはない。騙されるな。彼女はきつと色んな人に優しくして良い笑顔をする人なんだ。俺にたいしてバンド見て欲しいと言ったのはたぶん帰るときの話題作りか何かだろう。

それで決まりだ。

「・・・はあ」

それにしても我ながらひどい結論だな。

さすが自他共に認める捻くれ者なだけある。

「さてと」

ぼちぼち仕事にでも行くか。

クラス撮影用のカメラを持ち校舎へと向かった。

## 18話

文化祭の二日目目。

本日は記録雑務の仕事の内容は文化祭の様子を写真に納めること。ちなみに私は一年生のクラスと二年生のクラスのAからC、計6組の担当だった。比企谷君は他の所を行くそうだ。

1年も2年もC組は強烈なキャラの人が居たなー

1年C組のクラスの代表として出てきた女の子。彼女は亜麻色の髪、長さは私と同じくらいかな・・・

その女の子だがとにかく凄かった。クラスの男子をジャグラーのごとく手玉にとり、出し物をめちやくちや効率よく回していた。

騙される方も騙される方だけどあの娘の将来を考えると恐ろしい。たぶんキャバ嬢とかになつたらトップになりそうだな。

2年C組にいたのはコートを着た太めの眼鏡をかけた男子。

彼は・・・うん。

なかなか面白い人でした・・・何を言っていたかわからないけど。

とにかく自分の仕事を終えた私は基子たちの待つ教室へと向う。

「お待たせえ！」

「やっと来たな。さっさと昨日の衣装に着替えてこい」

「りようかい」

昨日同様に水色のドレスを着てる。

やっぱりこのドレス可愛いなあ・・・着るの大変だけどね。

「おつ、着替えてきたか」

「やっぱり可愛い！」

「二人も可愛いよ」

「さんきゅー」

「この格好でバンドか・・・私たちはともかく基子やれる？」

私と美波はドレスなのでスカートだからなんとかなるが基子はどうなってるのか分からない下半身が魚の状態。そんな格好でバンドなんかやれるんだろうか。

「まっかせなさいい！大丈夫だ！」

「ほんとかい？」

「おうよ！」

「じゃあ最後の確認しにいこうよ。音楽室はもう借りてあるからさ」  
「おっ！さすが美波！じゃあ行こうぜえ」

——

「この格好で廊下歩くと目立つねえ」

「そりやそうでしょ。ギター背負ったお姫様とかあり得ないっての」

「うっさいわ。ベース背負ってる人魚の方が変だっつーの。てかあんたその下半身でどうやって歩いてんのよ」

「それは内緒」

ふふふつとイタズラっぽく笑うその顔は今の格好と相まって絵になるほど美しかった。

私からしたらそれが逆にイラツと来るんですけどね。

「あつ！花菜ちゃん花菜ちゃん！あれ見て！」

「ん？どれ？」

「あれあれ！」

美波が指差した先には見知ったアホ毛の男子生徒と綺麗な長い黒髪の女子生徒が二人で歩いている。

あれは……比企谷君と雪乃ちゃんだ！

「ゆき……」

あれ……?よく見たら雪乃ちゃん比企谷君の制服の袖つかんでない?  
な、なんで?

声をかけようとしたが声が出なくなっていた。

今まで体験したことのない気持ち膨れ上がっていく。

比企谷君は勿論だけど私は雪乃ちゃんも大好き。その二人が仲良くしていたら私も嬉しい!

そのはずなのに……嬉しいのに。

胸が苦しい。

「……ちゃん?花菜ちゃん!」

「っ!美波?」

「花菜ちゃん……凄い顔してたよ」

「え?」

「……早く、音楽室行くぞ」

「うん……」

凄い顔か……きつと酷かったんだろうな。

———

音楽室。ここは机とピアノ、そして防音機能のある壁で出来ている教室だ。

私は基子と美波にまるで取り調べを受けるような形で座らされてる。

「・・・花菜。少し聞きたいことがある」

「なに？」

「あんた・・・比企谷君の事好きなんだよね？」

「なっ！なんでいきなり!？」

「良いから・・・真剣に答えて」

そう言う基子と美波の目は真剣そのものだった。

はあ・・・真剣には真剣で答えなくちやね。

「うん、好きだよ。もちろん男の人として」

「そうか・・・別の質問をする」

「なに？」

「前から思ってたんだけど花菜は・・・本気で比企谷君と付き合いたいと思ってるのか

？」

「え？」

そんなのは当たり前だよ。好きなんだし・・・

基子は何を言ってるんだ。

「花菜ちゃんには比企谷君に恋する事だけで満足してたんじゃない？」

「っ！」

美波の言葉が私の胸に深く突き刺さった。

そんな訳無い！私がどれだけ彼を好きなのか！

何か言い返したい。だけど・・・確かに私は・・・

「・・・」

「花菜ちゃんにはさ・・・比企谷君と付き合ってる自分を想像したことある？」

「そんなの・・・」

今まで私が比企谷君を家で想っていた時の事を思い出す。

写真を見てたり、下校の時に話すのか考えたり、どこに遊びに行くか考えたり・・・

「・・・あれ？」

今まで想像してたのはどれも今の現状を楽しんでるものばかり。その先に繋がるものは果たして考えていたのか？

その答えはno。

「・・・私は二人が言うように比企谷君と付き合おうって本気で思ったことなかった。自分が比企谷君を好きだって事実には満足してた」

「だよな・・・次で最後の質問だ」



「花菜ちゃんは比企谷君と本気で付き合いたいって思ってる？」  
「うん」

この質問に対しては迷うことなど一切無い。私は比企谷君の彼女になりたい。

「ならよし。じゃあバンドの練習始めるか」

「そうだねえ」

この二人は比企谷君が好きってだけで立ち止まってた私に進むべき道を教えてくれた。もしも私は現状に満足をしてなにもせず、比企谷君が雪乃ちゃんや由比ヶ浜さんと付き合ってしまったら私は何を思うだろうか。

たぶんそこには後悔しか残らないだろう。

「花菜ちゃん！早く準備するよ！」

「もたもたすんな！」

「ねえ！二人とも」

「ん？」

「ありがとう！」

二人は私にとって代わりなど居ない大切な存在。

「おうよ！気にすんな！」

「お礼期待してるかねえ」

やっぱり私はこの二人が居なきやだめなんだな・・・

そう思ったらなんだか楽しくなってきたて笑みがこぼれる。

「まっかせとけーい！」

「そう言えば花菜！あんたさつき雪ノ下さんに嫉妬してたでしょ？」

「なっ！そんなのどうでも良いでしょ!?!」

「やっぱりしてたんだ！」

「花菜ちゃんかわい〜」

クスクスと二人でおちよくつてくる。この・・・

「うるさいな！もう！」

「なんだよ、大親友に対して冷たいな〜」

「誰が大親友だ！」

「花菜ちゃん最近可愛くなったけど怖くもなってきたよ〜」

「私をからかうからだろ!?!」

「きやー！こわいー！」

ちくしょう、この女ども・・・

「ほらもう終わり。そろそろバンドやるよ？」

「はーい」

「たくつ、仕方ないな」

私たちはそれぞれの楽器を調整し、一通りの流れを確認した。その間私から笑顔が絶えることは無かった。

――

「なんか緊張してきた……」

有志のステージが陽乃ちゃんの団体から始まり、現在は3組くらい終わっていた。私たちは今やつてる団体の次にやることになっている。

ちなみにクオリティがヤバイ。

陽乃ちゃんと言わずもがな圧倒的クオリティだったがその後の人たちも負けじと奮起して皆を盛り上げてる。

どどどどうしよう。やばいつて……

そ、そうだ！こういう時こそ基子に頼ろう！

基子の方に視線をやると冷や汗を出している人魚姫が見えた。

ちよつと……嘘でしょ？

『次で最後の曲です！』

え？もうすぐ私たちの出番じゃん！

どうしよどうしよどうしよ……

「二人とも緊張しすぎだよ。もっと私たちは有志なんだから楽しも！ね？」

「み、美波い」

さすが私たちの美波！いざというときに頼もしいぜ！

「次の3人の方！もう入場の準備をしてください！」

「はい！ほら！行くよ！」

「うん！」

私はギターを、基子はベースを、美波はドラムのスティックを手に持ちステージの脇にたつ。

よし．．．大丈夫。去年は出来たんだ。今年だつて．．．

「そうだ、花菜」

「ん？」

「ちゃんと気持ちを込めて比企谷君に捧げる歌やれよ？」

「そんなの分かってるよ！任せなさい！」

「頼もしいねえ」

そう、今回文実があるのに気合いを入れてやって来たのはこれが目的なんだ。今日二人のお陰で芽生えた想いも重なり私の比企谷君へのラブパワーはもう全開だぜ！

『C組のみなさん！ありがとうございます！では次にいきましょう！お次は2年G組か

らきたおとぎ話のプリンセスたちのライブです！どうぞー！』

「いくぞー！」

「うんー！」

ステージにたつとギャラリー達の熱気が凄かった。

この中で演奏するのか・・・緊張するな・・・

私と基子が圧倒されてると美波が、マイクを取り挨拶を始めた。

『どうもー！不可思議な国から迷い混んできちゃった上溝美波でーす！』

『わあー！かわいいー！』などの声援が上がる。すごいな。

『今日は頑張るんで応援お願いします♪じゃあ次は花菜ちゃん！』

・・・よし！私も覚悟を決めたぞ！

『どうも！魔法使いのおばさんに素敵なドレスを貰った愛川花菜です！せっかくドレス貰ったので文化祭来ちゃった』

『かわいいー』

という声援が圧倒的に上がる。おお・・・掴みはオツケーだな。

『文化祭が終わったら魔法が解けるかもだけどそれまでは楽しみたいと思います！よろしくお願いします！』

『いいぞー！かわいいー！』

『ラストは基子!』

『どうも!海の世界の歌姫こと橋本基子です!』

『セクシー!つきあつてくれー!おもしろいぞー』

『今日は2曲やりたいと思います!一曲目が私、後2曲目をガラスの靴のお姫様が歌います!じゃあ一曲目行きますよー!』

【おおー!】

『一曲目は“Century Lovers”』

カッカカッカと美波が合図をして演奏を始める

♪♪

歌い始めた!よし!指は動く!リズムも合つてる!行けるぞ!

このまま終わってくれ・・・

私はこの歌が結構気に入ってる。こんかいバンドで基子が絶対にやりたいと持ってきたのだが聞いたら思ったよりもはまってしまった。

一番は無事に終わったか・・・ふう・・・

その後も順調に進み二番のサビに入る。

あれ?基子こっち見てる?

・・・なるほど。この部分は私に言ってるのね。

最初からハッピーエンドなんてあり得ないよね・・・

そうだよな・・・分かってるよ。

それが恋愛だよね。

私にやつと笑いかけると、基子もにやつと笑う。

すると急にドラムが強く存在を主張するよう音を奏でた。

(まだ残ってるんだから集中！)

(わかってるよ)

(いくぜえー！)

今アドレナリンがどぼどぼ出てるのを感じる。

テンションはhighだ！

『ー！』

【わああー！】

『ありがとうございます！』

やりきったー！一曲目は無事終了！

あとは・・・

「ほらよ」

「おっと・・・」

マイクを投げてくる基子。

「あぶないな！落としたらどうすんだ！」

「別に良いじゃん。あんたらしくて」

「なんだとおー！」

「二人とも！良いからやるよ！」

「わかつてるよ」

『みなさーん！後一曲だけ付き合ってください！二曲目に歌うのは皆さんもご存知”小さな恋のうた”です！行きます！』

ふうつと一回深呼吸をすると体育館の中は聞こえなくなった。

集中できてる。

基子と美波を見て確認する。

(花菜・・・)

(花菜ちゃん・・・)

ああ・・・二人とも、大丈夫だよ

この歌を彼に・・・！

「わんつー！わんつーすりーふおー！」



『♪』

きつと届くと信じて私はギターを鳴らし、歌を歌う。

歌つてる彼にとの事を歌詞に合わせて思い出す。

もうメールはどれだけしたんだろう。そのすべてがいつか私の思い出となるんだろう。いつも私からばつかりだったけど……

基子も美波も私を際立たせるための演奏をしてきている。本当にありがとう。二人とも！

『♪♪』

二番のサビも終わりだった。この短い歌では全部は伝えきれないかも。それでも……すこしでも伝わるように。

比企谷君……どこにいるかは分からないけどきつと居るよね……ちゃんと見ててね！

『♪』

そう言えば最初の頃は好きだって自覚無かったんだっけ……

でもい今はあなたのことが大好きです。

あなたにこの気持ちが届いて欲しい！

いつだってあなたを想ってる。だから……

届け……響け……私の!

『恋の歌!』

ジャン!と3人で同時に音をならし演奏を終わる。

【わあああああ!】

『ありがとうございました!』

スカートを摘まみお辞儀をして退散をする。

「おつかれ!」

「おつかれさまあ〜」

「中々良かったよな!? 私も花菜も歌詞間違えなかったし演奏もばつたり!」

「よかったよねえ」

「何より観客が凄いテンションでさ! もう最高だな!」

「うん!」

本当に楽しかった。興奮がまだ収まらない。

このあとしばらく私たちは3人でこの興奮を共感しあつてた

――

「花菜。満足できたか?」

「……まだまだ伝えきれてないけど、スッキリはしたね!」

「そか。良かったな」

「うん！ありがとう！」

「これで、花菜ちゃんも比企谷君に猛アピール始めるんだね？」

「だな」

「うん。まあその前にやることあるんだけどね」

「やること？」

「うん。今からするから見ててよ」

私が比企谷君を口説くうえでできつとその存在は問題になる。だから今のうちから向き合わなきゃ。

・・・やっぱり二人出揃っていた

「雪乃ちゃん、由比ヶ浜さん」

都合がいいことに二人だけで周りに人は居ない。

「なにかしら？」

この二人は私のライバルになりうる。比企谷君の心はもしかしたら私よりもこつちの二人に向いてるかもしれない。それでも私は彼のことを諦めたくない。だから・・・

「わたしは比企谷八幡君の事が男性として好きです」

「「え？」」

二人は鳩が豆鉄砲くらったみたいな顔をした。

二人とも、可愛いなあ・・・ちくしょう！

「愛川さん。あなた正気？」

「うん・・・間違いないよ」

「比企谷君の事をなんて・・・どうかしてるわ」

「そ、そうだよ！」

「この二人は素直じゃないのかな？それともライバルを蹴落とそうとしてる？」

「おかしくない。彼は魅力的だよ」

「・・・なぜそんな事を私たちに話にきたのかしら」

「それはね、宣戦布告をしに来たんだよ」

「え？」

「私は二人とも比企谷君に気がある思ってる。それなのに二人がなにもしないで私が付き合うことになるのはなんだから嫌なんだ。私は正々堂々と比企谷君を勝ち取りたい」

「・・・そう」

「雪乃ちゃん・・・喧嘩したい訳じゃないんだよ？仲良くしたい」

「分かってるわ。同等の立場のものなら堂々と戦いたいって事でしょ？」

「うん。夏目漱石の”こころ”みたいな展開はごめんだからね」

「ふふふ．．．私もよ」

「??」

「由比ヶ浜さん．．．あなたここくらいは知っておきましょうよ」

「．．．うん」

「とにかく！私は勝つ！よろしくね！じゃあ！」

「ちよっ！」

「このままの格好で仕事するから！基子たちに挨拶したら戻ってくるよ！」

———

「あんた．．．ばか正直ね」

「良いじゃん！私こころのKみたいに雪乃ちゃんになってほしくないもん！」

「花菜ちゃんかつこいー！」

「えへへええ。ありがとう！」

「さてと、私たちは教室に戻るよ。じゃあ仕事がんばれ」

「うん！ありがとう！」

「じゃあねえー！」

「ふう．．．」

さてと！仕事しますか。

有志の発表はほとんど終わり残すはエンディングセレモニーだけだ。しかし……

「愛川さん」

「なに？」

「相模さん知らない？」

「うーん……わかんないや」

委員長殿が見当たらないらしい。

「雪ノ下……相模は来たか？」

体育館の別のところで仕事をしていた比企谷君まで駆けつけてきた。

「これ結構ヤバイよね……」

今時間は葉山君達が稼いでくれてるけどそう長くは持たない。どうしよう……

「比企谷君」

「なんだ？」

「あと10分時間を稼げたら見つけられる？」

「どうだろうな……わからん、としか言いようがない」

「そう、不可能とは言わないのね。それで充分だわ」

「姉さん？今すぐ舞台袖まで来て」

どうやって雪乃ちゃん時間稼ぐのかな？

――

「おい雪ノ下、本気か？」

「はぁーん。楽しいこと考えるね。で、曲は？」

「昔、姉さんが文化祭でやった曲。今でもできる？」

雪乃ちゃんがそう言うのと陽乃ちゃんは鼻唄を始めた。

あぁ〜これか・・・

「静ちゃん」

「仕方ない・・・」

「めぐり、サポートキーボード行けるね？」

「はい！任せてください！」

「あとはヴォーカルだけかな？」

「・・・由比ヶ浜さん」

「うえ!?!」

うわぁ・・・凄い美女軍団だ・・・すげえ・・・

「で、でもあたし、歌詞とかうる覚えだからね!?!その辺期待しないでね!?!」

「正しくはうろ覚えよ。今の言い間違いで少し不安になってきたわ・・・」

「ゆきのんちよつとひどいよ!」

「冗談よ。危ないと思つたら私も歌うわ。それに・・・」

何やら雪乃ちゃんがこつちを見てるな。何か用かな?

「もか一人ヴォーカルを付けるし大丈夫よ。ね? 愛川さん」

「え?」

・・・今愛川さんつて言つた?

「・・・ええ!?!わたし!?!」

「そうよ。あなたまさか先程ライブル宣言したばかりなのに出来ないとか言わないわよね?」

「ぐぬぬ・・・やるわ! できますとも!」

「そう来なくちゃね・・・二人とも、ありがとう」

「っ」

普通に頼めば良いのに。不器用だな。

「比企谷君・・・よろしくね」

出口をみると比企谷君の後ろ姿が見えた。いつのまに!?

「比企谷君! 絶対見つけてね!」

「ひつきー! がんばれ!」



私たちも声をかけ激励をする。

さてと、私たちも仕事をしますか！

ーーーーー

比企谷君は相模さんを見つけ、エンディングセレモニーは何とか行われた。ただ  
ど……

「あいつサイテーだよね！ひきたに！」

「女の子泣かせるとかひどい！」

この有り様だ……

聞いた話によると比企谷君は中々動こうとしない構ってちゃん状態の相模さんを動かすために悪役になったんだろう。

そんなの彼を知らなきゃたぶん思い付かないよね。

良いやり方じゃないけど成果は上げたし他の人に散々悪口言われてるから私は優しくするかな。

「比企谷君！おつかれ！」

そう言つてマツカンを彼に渡す。

すると彼は驚いた顔をして目を見開いた。

「愛川……話聞いてないのか？」

「相模さん泣かせたこと？」

「ああ」

「聞いたけど・・・それがどうかした？」

「いや、俺校内一の嫌われものだし・・・まさか話しかけてくるとは」

「はあ・・・なんで比企谷君があんな事したのかさすがに分かってるからね？」

「・・・そうか」

「比企谷君」

「ん？」

「あなたは頑張りました。成果も一番あげました。なのに報酬が無いのは辛いよね？」

「マツカンでもくれるのか？」

「ふふふ・・・今度の土曜日に二人でデートしようよ！」

「え？ご褒美だよな？」

「なによ？こんなかわいい女の子とデートでんのかなよ？ご褒美でしょ！」

「・・・なんかお前変わったよな」

「そう？」

「ああ・・・」

「それはきつと比企谷君のお陰だよ」

「?それってどういう」

「じゃあ、私は戻るね!」

たたたつと走って教室に戻る。まだ今は時じゃないしね。  
てかガラスの靴走りずらいよー。

――

「駅前の店でしょ?楽しみだね!」

私たち三人はクラスの打ち上げをしに駅前のレストランに集まる事になっていた。  
少し楽しみだ。

「あつ!基子!美波!」

校門を出たところで、違う制服の女子に話しかけられた。えーつと・・・海浜総合かな?

「千佳ちゃん!来てたんだ!」

「声かけようと思っただけど教室に居なくてき!探したよ!」

「ごめんごめん!」

また元中トークか・・・良いもん!今の私には比企谷君がいるから!

でも彼との思いでないなあ・・・くそお!結局元中トークできないじゃん!

「あれ?愛川?」

話しかけてきたのはどこか見覚えのある……って!

「折本!」

「やっぱりそつか! あんた総武なんだ! 頭よかったもんね! うける」

「うけないから。久しぶりだね! 春先以来?」

「そうだね」

「最近どう? そつちは? 同じ中学で変わった人いる?」

「あんまり居ないな……そう言えば総武には愛川以外に同じ中学の人いるの?」

「私と比企谷君の二人だね」

「ぶっ! 比企谷とか……めっちゃなついわあ!」

「え? 覚えてるの?」

「まあね」

「へえ……ねえねえ! 比企谷君の中学の時の事教えてよ!」

「うーん……そういえば告られた」

「……えっ!?! 誰に?」

「比企谷に。うける」

ええー!?! うそおーん! そんなずるいよ! それとうけないからあ!

「……知らなかった。そんなに行動力あったんだね」

「そうだね。てか愛川も中一の時アプローチされてたんでしょ？」  
「え？」

「なんか比企谷が俺の好きな愛川にアタックしやがった！人でなしだ！って言ってるやつが居たんだよね。誰か忘れたけど」

「私が比企谷君に？アタックされてた？嘘でしょそれ今すぐ再現してよ、お願いします。」

「花菜ちゃん！そろそろ時間なっちゃうよ！行こ！」

「う、うん！」

「じゃあね」

「またね！」

そう言つて手を振り基子たちと合流する。

「驚いたな……アプローチされてたのか」

「らしいね……」

「私が比企谷に？いったいどういう事なの？」

「はあ……最初の時みたいに寝れない夜が続くのかな？」

## 19話

どうも！愛川花菜です！

土曜と日曜の2日にわたって行われた文化祭が終わり、また月曜からこれまでの日常が始まる。

いつものように授業をして、いつものように部活に行き、いつものように比企谷君と帰る。

しかし文化祭が終わってからその日常に少し変化が表れた。

それは……

「好きです！付き合ってください！」

「ごめんなさい」

そう。めっちゃモテるようになった。

まだ木曜日だったのに4日間で五人目だよ？凄くね？

それにしても毎日毎日毎日体育館裏に呼び出してくるのにも飽きた。相手には悪いけどうんざりだよ……

？  
と云うか話したことないのに告白とかおかしいよね？私相手の名前すら知らないよ

呆れながら自転車を押して校門から少し出たところまで歩く。すると自転車に股が  
りボーツとしてゐるアホ毛の男子生徒がいた。

彼を見るとさつきまでの陰気な感情が吹っ飛ぶ。

最近の私って単純だな。

「比企谷君！おまたせ！」

「おう。行くか」

「うん！」

そう言つて二人で自転車を漕ぎ始める。

ああ。この時間が一日で一番幸せ。

「そう言えば土曜日、本当にどこか行くのか？」

「もちろん！文化祭のご褒美だからね！」

「まじか・・・」

「もちろんだよ！場所も決めてるんだ！」

「・・・ちなみにどこに行くんだ？」

「それはね・・・」

「動物園！」

———

「本日は土曜日！お日柄もよく絶好のデート日和！駅前では比企谷君を待ってます！  
でも……」

「眠い」

例によつて前日は服選びに時間をかけ、布団では胸がドキドキ。お陰で睡眠不足この上無い。

「ふあゝ」



「凄い欠伸だな」

「っ！比企谷君!？」

「よう」

み、見られた!?!あの大きくびを？

いやあああ！片想い中の人に欠伸見られるとか乙女失格だ！

しかもデートの頭にだよ!?!こんなの百年の恋も覚めちゃうでしょ!?!

「お、おい。大丈夫か？」

「う、うん！大丈夫！」

「なら良いんだが・・・じゃあ行くか」

「・・・」

あの比企谷君が先導してる？嘘でしょ？

何回か一緒に出掛けたりしたけど何時も私の隣か少し後ろを歩いてた。こうやって私の前を歩いたのは初めてだ。

もしかして比企谷君も少しは楽しみにしてくれてたのかな？

そうだと・・・嬉しいな

「おい、何ニヤついてんだよ」

「な、なんでもない」

「行くならさっさと行こうぜ」

「・・・そうだね。行こう」

そう言つて彼の手を握る。顔は赤くなり、心臓は激しく動く。

勇気を出してやつてみたけど、やっぱり緊張するなあ・・・

「あの・・・なんで腕を絡めてくるんですかね？」

「何でか分からない？」

「ああ」

「じゃあ教えてあげない」

頬を赤く染めたままで基子のように悪戯つぽく微笑む。

すると比企谷君の目が見るからに泳いでいた。

基子・・・あなたの笑みってこんなに効果あるんだね。

「と、とりあえず離せ」

「嫌だ」

「恥ずかしいだろうが」

「私だつて恥ずかしいよ」

「だつたら」

「ああもう！腕組んで歩くの！」

「ええ・・・理不尽だ」

「そんなに嫌？」

「嫌だ」

うつ、そんなにきつぱり言わなくても良いのに・・・泣いちやうよ？

でも私はめげません！比企谷君と付き合いたいから頑張らなきや！

「ええー、仕方ないな。じゃあ手を繋ぐだけで許してあげる」

「それも恥ずかしい・・・」

「はいしゅっぱーっ！」

「無視かよ・・・」

比企谷君は諦めたように横に並んで歩く。

こ、これって他の人が見たらカップルに見られるよね？

比企谷君とカップル・・・嬉しいなあ・・・

「えへへ」

世界で一番幸せだと言わんばかりの顔をした私と、まだ馴れないのかソワソワした様子の比企谷君は手を繋いだまま電車で揺られていた。

—————

移動すること30分。動物園に到着した私たちは手を繋いだまま園内を歩いてい

た。

「わあ！見て見て比企谷君！ゾウ！ゾウだよ！」

「そうだな」

「あっ！餌もらってる！かわいい！」

「ただ何をするでもなくこの一定の空間で過ごすだけで飯にありつけるのか・・・羨ましい」

「まったく、何下らないこといつてんのよ」

「考えてみたら俺の考える理想像は動物園の動物なのかもしれない」

「それだと比企谷君見世物にされるよ？毎日多くの人に見られるなんて耐えられるの？」

「・・・やっぱり専業主夫だな」

「専業主夫は・・・困るかな」

「は？なんでお前が困るんだよ？」

「そ、それは・・・知らない！ほら次に行くよ！」

「ええ・・・」

鈍感すぎるよ！もしかしてわざとなのかな？女の子の事の恥ずかしがる姿見て楽しんでる？

だつたらそれを私以外にする事は許しません。

「っ！お、おい見ろ。レッサーパンダだ！」

「ん？本当だ！」

「何あの生き物可愛い。写真撮ろ」

え？比企谷君めっちゃはしゃいでない？

私的には比企谷君も可愛い。

「帰つたら小町に自慢しよ」

「レッサーパンダと撮ってあげようか？」

「え？まじで？良いの？」

「うん！じゃあ撮るよー。はいチーズ！」

「さんきゅ」

「うん！私も写真撮りたいんだけど・・・良い？」

「別に良いんじゃないか？」

「じゃあ・・・はいチーズ！」

「え？」

私は顔を比企谷君の顔に近づけ写真をインカメラで撮る。

やっぱあ、顔近い近い近い・・・

「はい終わりー！」

にっこりと微笑む。

いつまで経つても接近するのには馴れないな・・・

比企谷君もまた顔が赤くなってるし・・・可愛いなちくしょう。

「おい・・・またお前は勝手に」

「良いじゃん良いじゃん！思い出作りだよ！」

「はあ・・・たくつ」

「次行こうぜえ」

「ああ・・・」

—————

あのまま普通のデート？を楽しんで帰りの電車道。

「今日は楽しかったね！」

「・・・そうだな」

そう言つてふつと微笑む。

比企谷君も最初と比べて変わった・・・前だったらこんな風には笑わなかったよ。それなのに今はこんな風に笑ってくれる。

「最後にご飯食べてから帰ろうよ」

「そうだな。じゃあサイズで良いか？」

「うん！じゃあ駅からの帰り道にあるサイズで良いよね？」

「ああ・・・あそこか。わかった」

――

「また比企谷君ドリア？」

「んだよ。お前もそうだろうが」

「サイズっていったらそうだよね」

「流石愛川だ。わかってるな」

「晚御飯を食べながら、雑談をする。この当たり前の時間が私にとっては大切に大好き。」

「・・・」

『中一のとときアプローチされてたんでしょ？』

「ねえ、比企谷君」

「なんだ？」

「中学のととき・・・」

「・・・」

「っーなんでもない!」

聞いちや駄目だ。教えてくれないのは教えたくないから。聞かれたくないものを聞くのは良くない。

でも気になる。

あああああお!

「・・・中学のときか」

「う、うん」

「聞きたいのか?」

「気になるし、知りたい」

「そうか・・・でも今は駄目だ」

「え?」

そんなに大きな出来事か?

いや、そんな凄い事ならいくらなんでも私が知らないのはおかしい。

「いつか話しても平気だと思つたときに話すから・・・それまで待つててくれないか?」

「・・・比企谷君、分かつたよ」

比企谷君ならきつと話してくれる。

時間はかかるかもしれない。もしかしたら卒業まで話してくれないかも・・・



でも私は待ってるから．．．いつか。  
「じゃあ、ご飯食べよっか！」

## 20話

10月。季節は変わりあれだけ私を苦しめた熱風は少し寒いと感じるくらいの風に変化していた。

文化祭が終わり、体育祭も色々とおつたが無事終了した。今年の体育祭は決して忘れることは無いだろう。

あんな負けかたしたら流石に忘れないよね・・・

比企谷君・・・あれは無いよ・・・

とりあえず数多くの学校行事を終わらせ、今学期に残る行事はあと一つ。

高校生活において最大の行事、修学旅行だけだ。

どうしよう凄く楽しみ。

みんなと色々回ったり、夜は寝ないでお喋りしたり・・・

それに出来れば比企谷君とも回れたら楽しいだろうな・・・

比企谷君は文系科目に強いから神社とかがどんな神社なのかとか教えてくれながら回れそう。もちろん一緒に回るときは手を繋いだままでね！

それでそんで・・・最後の夜には告白とかしちやったり!?

なんだそれなんだそれ!

「なあ花菜、気持ち悪い顔になってるぞ」

「え!? な、なにが?」

「たく・・・何考えてたんだか」

「どうせ比企谷君との事でしょ」

「ち、違うよ! 修学旅行の事を考えてたの!」

「修学旅行? そう言えばもうすぐだな」

「修学旅行と言えばさ、班はどうする?」

「え? 班? 私たちで行けば良いじゃん」

基子の疑問に私も同意する。

「二人は知らないの? 班編成は四人一班。私たちとあと一人が必要な」

「つまり一人足りないって事か・・・」

「うん! それであと一人誰が良い?」

うーんつと唸りながら基子と考えてみる。

この場合、私たち三人と行っても問題なく楽しめる人。尚且つ私たちも楽しい人か・・・

うーん・・・

「っ！ねえ」

居た。私と仲が良くて、私の好きな人の事に詳しい。

「ん？」

「私、誘いたい人が居るんだ！」

彼女がどれ程、彼と進んだ仲なのか夜の部屋で聞けるし……今回は良い情報を得られそう。

—————

時は流れて修学旅行当日！今は新幹線に乗るために東京に向かっています！

え？一人？

ふふふ……そんなわけ無いじゃないですか！

「楽しみだね！比企谷君！」

「俺は先の事考えると憂鬱なんだが……」

勿論マイダーリンこと比企谷君と来てますよ！

一緒に行こうって誘った時はめちゃくちゃ渋られたけど根気よく誘ったら何とか陥落させる事ができました！

誘ったからってあの比企谷君が二人で東京駅まで来るとは……もうこれって私に惚れてんじゃないかな？

浮かれた気分になっていたが比企谷君がどこかを見てることに気付く。その視線の先に居たのは・・・青みがかった髪をポニーテールにしてる美女が居た。

総武高校の制服を着ているところをみると、比企谷君と知り合いなのかな？

まあそんなことはどうでも良いか。

「・・・」

私のちよつとした自信が砕けました・・・

二人で居るのに比企谷君はずつとあつち気にしてるし・・・なんならもうポニーテール美女しか見てないレベル。

はぁ・・・負けた。

「愛川？どうかしたのか？」

「え？な、なにが？」

「なんか急激に元気が無くなったから・・・酔ったか？」

ちゃんと私も見ててくれたのか・・・しかも気を使ってくれてるし。

「ううん！全然大丈夫！」

「修学旅行だからって体調悪いのに無理するなよ？」

「うん！本当に平気だから！」

優しいな・・・好きな人に言われるこういう言葉ってかなり嬉しいよね。

だからって、さっきの事が無くなるわけじゃないけどね！

よーし！気持ちをもた盛り返すために仕掛けるぜ！

「比企谷君」

「ん？」

「三日目の自由時間さ・・・良かったら私と二人で回らない？」

「なっ」

彼は目を見開き顔を赤くした。もう比企谷君私の気持ちに気付いてんじゃないかな？

ふふふ・・・今は比企谷君の目に写ってるのは私だけだ。

あれ？もしかして私って独占欲強いのかな？

・・・重い女って思われないように気を付けよう。

「今のところ一緒に回れるか分からないな・・・」

「え？どういう事？」

「実はこの修学旅行の間にやらなきゃならん依頼が来てな・・・それが片付かない事には三日目の自由が無いんだ」

「ああ・・・そう言うことか」

修学旅行に来てまで依頼か・・・あんなに仕事したくないって普段から言ってるのに、

本当に真面目だよね・・・

「そっか・・・分かった！仕方ないね！」

「悪いな」

「気にしなくて良いよ！」

「ああ・・・さんきゅ」

「うん！」

元氣よく返事をする。

そうは言ってもやっぱり一緒に回れないのはショックだな・・・

――

新幹線に乗り二時間ほど経って京都に到着。そこからバスに乗り清水寺まで向かった。

ここが京都か・・・これから私たちの高校最大の行事が始まる！

最初は清水寺か・・・

「見て見て！凄なおつきい門だね！」

「これは仁王門ね」

「へえ・・・」

「はやく本堂に行こうぜ！」

「ええ」

本堂まで人がたくさん居たがなんとかたどり着いた。

ちなみに雪乃ちゃんは既にお疲れ気味です。

「ここが清水の舞台よ」

「綺麗・・・」

「うん。紅葉がばつちり見えるね」

清水の舞台に着くとそれはビックリだ。思わず言葉が漏れてしまった。今まで見たこと無いのでは？と思うほどの紅葉がる。この時気の京都はやつぱり最高だね！

「にしてもやつぱり高いね！」

「ほんとだなあ・・・清水の舞台から飛び降りるって言うのはここから飛び降りるって事だろ？！無謀すぎる・・・」

「ここで自殺しようとした人が何人も居たそうよ。それでも死ねずに足の骨折だけで済んだ人が居たとも言われてるわね」

「へえ・・・雪乃さん詳しいね」

「事前学習はしっかりしたのだからこれ位は当然よ」

口ではそう言うが美波に誉められてかなり嬉しそうにしている。雪乃ちゃんも基子や美波との距離がかなり縮まって来てると思う。



やっぱりそう言うのは嬉しいよね。

「と、とりあえず次に行こうぜ。人の波に乗るぞ」

「四人で固まっておこうね。離れるとはぐれるかも」

「うん！雪乃ちゃん！行くよ」

「え、ええ……」

雪乃ちゃんの手を握り人の波に乗る。雪乃ちゃんは体力面で不安が残るからしっかりと握っておかなきゃね……

「愛川さん？手を握る意味はあるのかしら？」

「勿論！はぐれないための最善の策です！」

「でも……」

「それと私が雪乃ちゃんと手を繋ぎたいからかな」

「そ、そう」

顔を赤くして快く私に手を握られる雪乃ちゃん。

あれ？もしかして比企谷君よりチョロいんじゃないや……

「おっ！音羽の滝それなりに並んでるな」

「まあ清水寺の名所だからね。仕方ないし並ぶか」

「そうね」

並んで少したったら中学生の団体が一気に押し寄せてきた。

「あの団体が来る前に並んでよかったねえ〜」

「そうね。流石にこれを並ぶのは骨が折れそうだね」

それだけは本当に勘弁してほしい。流石に京都で殆どの時間並んでましたーなんて嫌だしね。

「基子ちゃんはなに飲むの？」

「学問成就かな。美波は？」

「私もそうしようかな。二人は？」

「私？私は勿論恋愛成就だよ」

雪乃ちゃんを見ながら挑発的に言ってみる。

今の雪乃ちゃんは比企谷君に何もしてないっぽいからね。これくらい煽り入れなきゃ駄目だと思う。

「私も、学生なのだし学問成就」

「そっか・・・だよね」

「雪ノ下さんらしいね」

雪ノ下さんらしい。確かにその通りだ。

雪乃ちゃんが急に恋愛成就とか言ったら笑っちゃうかも。いや、笑うな、うん。

「あつ、やつと私たちの番だな」

「うん！じゃあさつそく・・・」

水を手に汲んで啜る。

おお・・・美味しい。思つてたよりも良い水だな。これでコーヒ―淹れたら美味しいかも？

「思つてたよりも美味しかったね〜」

「だな！ビックリした」

「そうね。私も初めて飲んだけど良かったわ。」

皆も同様の感想を抱いたようだ。

「そろそろ集合場所に行きましようか」

「その前にお土産屋とか覗こうぜ！時間はあるんだしさ」

「そうだね！そうしよ。雪ノ下さんも良いよね？」

「ええ。問題ないわ」

「じゃあ行つてみるか」

あれえ？私には聞かないですかね？

ちよつと比企谷君の気持ちになつてしまつたじゃないですか。

「じゃあ、また人の波に乗るか」

「うん」

「愛川さん」

「ん？どうかした？」

「え？・・・さっきのはもう良いの？」

少し頬を赤くして雪乃ちゃんは聞いてくる。

えっと・・・さっきの？

「・・・もしかして手を繋ぐこと？」

「・・・」

顔真っ赤にして黙っちゃった。

かわいいな畜生。告白しちゃうぞ〜！

じゃないや。雪乃ちゃん拗ねちゃう前に行動しなげや！

「繋ぐに決まってるじゃん！」

「そう」

雪乃ちゃん本当に可愛いな・・・うかうかしてたら負けちゃうよ・・・

—————

1日目の見学はほぼ終わり、既に宿屋の自室にいる。

荷物も整理して明日の行動も確認は終了してる。

・・・さて

「雪乃ちゃん！実際比企谷君とどうなの？」

「そうだそうだ！どうなんだ実際！」

「・・・特に彼とは何かあるなんて事は無いわ」

「ええ！文化祭での私のライバル宣言に受けたじゃん！」

「それは・・・」

「文化祭で二人で回ってたしね」

「あれは彼がサボらないか監視するためよ」

「またまた！なんか比企谷君の袖掴んでたじゃん！」

「あ、あれは・・・そう言えば貴方達あの時見てたの？」

「まあな。あの時の花菜の顔ったら凄かったぜ？めちゃくちゃ崩れた顔になって折角し

た化粧台無しにしてやがんの！」

けらけらと笑いながらこつちを見てくる。

あれ？なんで私にも攻撃が来るの？

「そ、そんなことはどうでもいいの！実際雪乃ちゃんは比企谷君をどう思ってるの？」

「・・・わからないわ」

「え？」

「ごめんなさい。本当に分からないの」

「そっか・・・」

「ただ彼は私には出来ないことが出来る。そう言うところは尊敬できると思ってるわ  
「え？」

「おいおい・・・かなり好感度は高いってことだよな？」

「・・・そうね。でもこんなこと本人には絶対には言えないわ」

「あはは・・・雪ノ下さんって意外と奥手なんだね」

「だから・・・」

　　そういいかけて雪乃ちゃんは何か言いやめる。

「どんなエピソードあるか教えてよ！雪ノ下さんと比企谷君の素敵な思い出！」

「ちよつと下に飲み物買いに行ってくるわ」

「あっ！逃げた！」

　　雪乃ちゃんはそそくさと財布を取り出ていった。

　　は、はや・・・

「逃げられたか。まっ！そのうち帰ってくるだろ」

「だね」

「にしても花菜は大変だな。ライバルは強力だぞ？」

そうなんだよなあ……最近私もモテるとは言え雪乃ちゃんや由比ヶ浜さんは強敵。私よりも格上なのだ。どうしたものか……

「取り敢えず頑張るよ」

それしかないね。私にはそれしかできないし

「ねえねえ。雪ノ下さん来るまで暇だしトランプでもやるよ」

「だな。やるか」

———

「おっ！帰ってきたな！」

「遅かったねえ」

「平塚先生の話に付き合わされたの」

「お疲れ」

「雪乃ちゃんもトランプやろうよ」

「遠慮しておくわ」

「そう言わずにお願い！3人だけだと面白さが半分なんだよー！」

「……はあ、少しだけね？」

「やった！じゃあ、大富豪ね！いくよー！」

こんな感じで最初は和気あいあいと大富豪をやる予定でした。でも一時間後には……

「8切りで7渡し!上がり!はい雪乃」

「橋本さん・・・こんなカード要らないわ。だから・・・7のダブル。上溝さん」

「そのまま渡された!雪乃ちゃん酷い!」

「勝負なのだから仕方ないわ。世の中は残酷なのよ?」

「くうく!悔しいく!」

「私は貧民・・・愛川さんと橋本さんに負けた・・・」

雪乃ちゃんは負けるときつと睨んでくる。

なんだか回数を重ねるごとにみんな本気度が増してくるんですよねえ・・・

まあ私も負けたの嫌だし絶対に勝つけど?

こんなに白熱してるのは実力も近いからってのもあるのかな?

それにいつからか、基子も美波も雪乃ちゃんの事下の名前で呼んでるし・・・

「じゃあ始めるよ!5のダブル!」

こうして私たちの修学旅行一日目の夜は更けていった。

というか私、比企谷君とぜんぜん絡めてない・・・



## 21話

修学旅行二日目。本日は各班で自由行動をする日。

「わぁー！すごい！」

「本当に金色だな」

私たちは京都と言えばこれ！と言うほどの名所の金閣寺に来ている。

これがあの金閣寺か・・・初めて見たけどすごいな。派手だよ現実。

「これ作つたのは・・・北条なんとかって人だよね？」

「違うから。室町幕府3代目将軍足利義満だよ。誰だよ北条。小田原城かよ」

「ちよ、ちよつと間違えただけじゃん！」

「花菜ちゃん事前学習サボつたでしょ」

「したもん！正式名は鹿苑寺って言うんだよね!？」

「おお！それだけは覚えてたか」

「日本史なのに・・・花菜ちゃん！凄い進歩だね！」

「うう・・・雪乃ちゃん！二人が意地悪する！」

「愛川さん。文系科目も頑張りましょう」

「そんなあ!」

「数学と理科ができるなら文系科目もできるはずよ。暗記が多いのだし」

なんか雪乃ちゃんの熱が入っちゃってるんですけど……これは長くなるな。

「あつ!見てみてよ!池に金閣寺が写ってるよ!」

「ほ、ほんとだー!雪乃ちゃんも見てみなよ!」

「ちよ、愛川?」

「良いから良いから!」

た、助かった……ナイスだ美波!

「他の寺院も良いけどやっぱり見た目だけなら名所が良いよな」

「そうね」

「せっかくだから記念撮影しよ!すみませくん。写真撮って貰ってもいいですか?」

美波が通りかかった男子学生にカメラを持ち頼みに行く。

あの子達凄いい鼻のした伸ばしてる……

美波の毒牙にやられて可哀想に。

「おい見ろよ。友達も可愛いぞ」

「なんだよあのロングの娘。めちやくちや可愛いじゃねえか」

何か言ってる気がするけどスルーで。

「撮りますよー。はいチーズ！．．．おっけいです！」

「ありがとうございます！」

「い、いえ。あのこの後は．．．」

「さっ！みんな！次に行こう！」

「え？ちよ．．．」

うわあ．．．バツサリ切ったよ。残酷だなあ．．．

「あとで皆にも写真渡すね！」

「う、うん」

基子も何とも言えない顔をしてる。雪乃ちゃんは気にしてないようだけどね。

「次は．．．龍安寺だよね？」

「ええ」

「じゃあ行こっか！」

――

龍安寺。ここでは石庭が有名である。

「石庭．．．」

「美波？どうかしたの？」

「今日一番楽しみだったのがここなんだ。前にテレビでこのことやって、その時か

「らずつと生でみたいなーって思ってたんだ」

「へえ・・・そんなにすごいんだ」

「うん！」

「そりや楽しみだな・・・つと見えてきたな」

中に入ると石庭が広がっていた。

「じゃあ暫く眺めてようか」

「うん」

みんなで一列に並んで正座をして石庭を眺める。

ほわあ・・・本当に凄いな・・・何と言うか雰囲気すごい。

正に『静』って感じの雰囲気だ。そこをじつと見ているだけで飲まれてしまいそうな  
感覚。

これが石庭か・・・

「あら、奇遇ね」

雪乃ちゃん？どうかしたの？ここだと私語厳禁ですよ。

いったいどうしたの？

「ああ、お前もこっちに來てたの」

「ええ」

え!?ひ、比企谷君!?

「ど、どうしているの?」

「え?普通に修学旅行だけど」

「そうじゃなくて!」

「愛川さん。しずかにしなさい」

「ご、ごめん」

「まあ普通に偶然一緒になっただけだ」

「そ、そっか・・・」

「こんなに広い京都で偶然出会うだなんて・・・これはきつと運命だね!この理論は雪乃ちゃんにも適用されちゃうけど・・・」

「ごめんなさい。少し外すわ。先に行ってくれて構わないから」

雪乃ちゃんは由比ヶ浜さんと比企谷君と何処かへ行こうとする。

「依頼の事?」

「ええ」

「そっか・・・わかった!でも先に行かないでここで石庭見て待つてるから」  
「わかったわ」

そう言うとう雪乃ちゃんは少し離れた所で何やら話し合いを始めた。

「・・・」

比企谷君に由比ヶ浜さん、そして雪乃ちゃん。あの人たちは3人で居るのが凄く似合う。

「花菜? どうした?」

「あの3人を見てさ、思ったんだ。悔しいけど・・・あそこに私の入る余地はないって・・・そう感じたんだ」

「花菜ちゃん・・・」

「でもさ、それで諦めるって訳じゃないんだろ?」

「・・・もちろん」

「さすが花菜だ」

基子に言われるまでもない。そもそも奉仕部の二人は強力だなんて最初から分かってたんだしね。ガチンコでやりあっても勝てるかなんて分からない事なんて分かった。

「お待ちませ」

「もうすんだのか?」

「ええ」

「じゃあ出発〜!」

「次は二条城とかだっけ？」

「楽しみだな」

「うん！」

「—————」

「ちくしょう……」

本日二日目の夜。昨晚に続き全身全霊の大富豪に興じてた私たち。

『次に大貧民になったやつ罰ゲームな！』

基子のその一声で私は宿の近くのコンビニに行かなくてはならなくなった。罰ゲームの内容は夜のコンビニでデザートを買ってくること。

くそう……あの時の雪乃ちゃんが革命返しなんかしなかったら勝てたのにつ！本当についてないな、最悪。

帰ったらリベンジしてやるぜえ……

あつ、コンビニが見えた。

「さつっ」

さつさと注文の品でも買うか……

雪乃ちゃんがシュークリームで、基子はわらび餅か……

「愛川？」

え？なにこの声。マイダーリン八幡の声が聞こえる？修学旅行で全然一緒にいないからついに幻聴が聞こえたのかな？

・・・ええ!?

「比企谷君!？」

「よう」

「な、なんで!？」

「晩飯。リア充（笑）が俺の分まで食っちゃったからよ」

「なるほど・・・」

そう言うことか・・・あの騒いでたオラオラ系の人たちご飯山盛りにしてたからね・・・ん？あれ？もしかして今比企谷君と知らない土地で二人つきり・・・

「っ!」

き、きたあ！私はこのチャンスを待ってたんだ！

うへへ・・・比企谷君と修学旅行・・・

「お前はもうした？」

「罰ゲームだよ。負けたからデザート奢り兼パシリ」

「うわあ・・・最悪だな」

「まあね」



私もついさつきまでそう思っていました。だがしかし！現在は最高ですよ！  
雪乃ちゃん！あの時の革命返しお見事でした！ありがとうございます！

「じゃ、俺戻るわ」

「ちよ、ちよつと待ってよー！」

比企谷君は買い物袋を持ち先に宿に帰ろうとする。

うそーん！待っててくれないの!?

急いで買い物済まし比企谷君を追う。

「待ってってばー！」

「・・・どうした？」

「いや、少しお喋りしたくて」

「ええ・・・めんどくさい」

「良いじゃん！減るもんじゃないし！」

「はやく寝たい」

「小町ちゃんにこの写真送るよ？」

文化祭の時に撮った私のお宝。目の腐った男の子に肩を抱かれるお姫様の写真を比企谷君に見せびらかす。

「・・・良い性格してるな」

「ありがとう！」

「はぁ・・・少しだけだぞ？」

「うん！」

自販機で缶コーヒーを買い、近くのベンチに腰かける。

「なんでマツカンが売ってないんだ・・・」

「本当だよ。なんでコカ・コーラの自販機あるのにマツカンが無いのか不思議でしかない」

「仕方ないんだろうけどよ、こんなマツカンのパチモンじゃやっぱりな・・・」

「・・・」

比企谷君の顔・・・なんだか疲れてるな・・・修学旅行だけではここまでにはならないはず。手抜きなら総武高校一番の比企谷君が修学旅行くらいなら軽くこなせるだろうからね。つてことは・・・今回の依頼、こじれてるのかな？

「・・・ねえ」

「どうした？」

「今回の依頼つてさ、忙しいの？」

「忙しいと言うよりは面倒って感じかな」

「面倒って事は解決は出来そうなんだよね」

「まあな。一応考えはある。考えはあるんだが・・・はあ」

「なにか問題があるの？」

「きつとまた平塚先生にお説教される気がする・・・」

「また酷い解決策なの？」

「・・・どうだろうな」

「比企谷君」

「なんだ？」

「比企谷君の作戦は凄いや？本当に小説みたいで奇抜なアイデア。私は良いと思う。でも・・・それでも比企谷君が傷付く方法は取らないでほしいな・・・もう陰で比企谷君が笑われるのもバカにされるのも嫌だよ。なにより傷ついた比企谷君を見るのは一番辛いから」

「はあ・・・愛川までお説教か？」

「もう！真面目に言ってるのに！」

「まあでも俺の策は最終手段だ。今のところ、どうしようもなくなるまで使うつもりはねえよ。できれば働きたくいしな」

「・・・そっか」

きつと比企谷君はまた、なにかやらかす気がする。こうは言ってもきつちりと仕事を

しようとするからな・・・

「比企谷君」

「あ？」

「もしも比企谷君がまた変なこととして皆に嫌われることになったとしても私だけは味方  
でいるよ」

「・・・そうか」

「じゃあ、そろそろ戻ろっか！」

「そうだな」

「じゃ！おやすみ！」

「おやすみ」

比企谷君はコンビニ袋を持って男子の部屋に戻っていく。

「さてと、私も戻るか」

この後部屋に戻ってからまた大富豪三昧だったのは言うまでもないよね。

――

「私は今日は別行動させてもらうわね」

修学旅行三日目。雪乃ちゃんは朝起きるや否や本日は別行動をすると言って出て

いってしまった。

やっぱり依頼の事だね・・・と言うかどんな依頼なんだろ。二人に聞いてもクライアントの情報は漏らせないとか何とかで教えてくれないからな・・・

「じゃ、私たち3人で行くか」

「そうだねえ」

——

「おお・・・」

「やっぱりすごいっ」

凄いやつばり鳥居が連なり、まるで赤色のトンネルの様な道が続いている。

私たち三人の本日のメインは言わずと知れた名所“伏見稻荷大社”である。

こここの名所と言えば“千本鳥居”だろう。ちなみに今私たちは入口に立っている。

「すっげえ！」

「京都つてやっぱり雰囲気すごいよね・・・やっぱ飲まれる」

紅葉と千本鳥居の組み合わせは凄く神秘的で本当に神様が要るんじゃないかって思わされてしまう。

「早く行ってみようよ！」

「そうだな」

「思ってたよりも長いね．．．」

「噂によると千本じゃなくて一万くらいあるらしい」

「確かにそのくらいに感じるね」

結構歩いたのに全然終わらない。本当に長いなこれ．．．

最初こそ雰囲気を楽しんではいしたが、だんだん馴れてきて今はそんな感じではなくなってきた。

「ん？あれは．．．」

「基子？なんか見つけたの？」

「ほら、前の方に見えるあの太った人。あれつてもしかして．．．」

あー、あの人か。ん？どこかで見たことあるよな．．．

「やっぱりだ！おーい！剣豪將軍！」

「えっ!？」

「ぬ？我をその名で呼ぶとは何者だ!?!．．．っ！お主は相模の國の将か!」

あつ、思い出した。文化祭で見かけたC組の騒がしい眼鏡コートのポツチャリさん。

「あはは！相変わらず意味わかんね！」

「何を言うか！」

え？二人つて知り合いなの？なんで？なんの接点が？

「えーつと・・・二人は知り合いなの？」

美波が控えめに手をあげ質問する。

ナイス！私も聞きたかった！

「ちよつとな。体育祭で知り合つたんだがこいつ意味が分かんなくて面白いんだ」

「へ、へえ・・・」

「ところでなんで相模の國の将なの？」

「むっ・・・そ、それは・・・」

「あー、こいつは女子が苦手らしくてな。上手く喋れないんだと」

なにそれメンドクサー。中学生男子でももう少しまともなんじゃない？

「なんで基子は平気なの？」

「私も最初は喋れなかつただけどな・・・気がついたらなんか平気になられてた」

「へえ〜」

み、美波が心底興味なさそうだな・・・

「そうだ、劍豪將軍。私たちの写真撮つてくれよ」

「なぜ我がそんなことを・・・」

「撮ってくれたら後で私とツーショット撮つてやるよ」

「合点承知。ではゆくぞ！チーズ！」

このあと剣豪將軍さんは基子とツーショットを撮ったがキヨドリ方があまりにもキモかった・・・基子はそのキヨドつてるところを見て楽しんでたみたいだけど。もしかしてあいつDS？

――

本日の自由行動は終わり自分達の部屋に到着。私たちは他の班よりも大分早い方だ。

ああ・・・ツガレダああ。

「なんだか疲れたね・・・」

「そりや普通に京都歩いたし、二日間も夜遅くまで大富豪してたつてのが効いたんだろ」

「だよね・・・てか雪乃ちゃんは？」

「まだ着いてないみたいだね」

「まっ、そのうち来るだろ」

「そうだね」

私はもう疲れ果てベットにダイブ。

ああ・・・きもちいよお・・・

「花菜・・・荷物の整理はしろよ」

「わかってるよ。わかってけどお布団が私を離してくれないの！」



「何いつてんだよ。早くしろ」

「ふええ・・・意地悪う」

仕方ない、やるか。

とりあえず買ったお守りをしまつて・・・パンフレットはこつちの大きなバッグに入れて・・・

「ねえねえ！この近くになんか夜になると綺麗にライトアップされる竹林があるんだつて！行つてみようよ」

竹林か・・・千本鳥居があれだけ凄かつたんだから期待はできるよね。

「そうだね・・・良いんじゃない？」

「時間はあるし・・・行くか」

さっそく貴重品を持ち外に向かつて移動を開始する。すると担任の先生が私を見ると駆け寄つてきた。

「愛川。ちよつと良いか？」

「なんですか？」

「各部屋の班長にやつてもらふことがある。着いてきてくれ」

「え？もしかして時間掛かります？」

「ああ。それなりにはな」

うへえ……まじかい……

「私たちは二人でいくわ。じゃ、頑張れよ！」

「フアイトだよ！花菜ちゃん！」

「……はいよ」

くっ！二人の裏切り者！

はあ……仕方ないか。さっさと終わらせてしまおう。

――

「いやあ！良かったよ！」

「綺麗だったね！」

部屋に戻るや否やこの二人は竹林の事を語り合ってた。

く、くそお……本当に泣いちゃうぞ？

「なにシヨボくれてんだよ。お前もいけば良いじゃん」

「一人でいくのは嫌だな……」

流星に一人は嫌だ。何が悲しくて一人で竹林見に行かなきゃならんのだ。

「はあ、仕方ないな。私も一緒にいくよ」

「え？まじ？」

「おう！美波はどうする？」

「私は吹奏楽の娘たちとお話してくる」

「おっけえ。じゃあ行こうか」

私たちがロビーに行くのと今度は別の先生が駆け寄ってきた。

あつ、これヤバイやつだ。

「橋本、どこいくんだ？」

「ちよつと散歩にですけど？」

「お前……このあと水泳部で集まりあるんだろが……」

「あつ！忘れてた！すみせん！」

「基子……？」

「わりのい。そういう訳だから行けないわ。じゃあ！」

ああ……行つてしまった……

良いもん！もうこうなつたら一人でいくもん！

「はあ……虚しい」

——

竹林つてここか……へえ……確かに良い雰囲気だな……つてあれ？

道のど真ん中にはうちの高校の制服を着た男女が二人つきりで居た。こ、これはまさ

か……

こ、告白!?

うひあ〜!はじめて他の人が告白してるところ見たよ。されることはいっぱいあったけどね(ドヤツ)

ってあれってもしかして姫菜ちゃん?

相手は・・・だれか分からないや。わからないからカチューシャ男子で。

「俺さ、その・・・」

おっおっ!告白か!?!しちゃうのか!?

「あ、あのさ・・・」

じれったい!はやく好きって言っちゃえ言っちゃえ!

今だに踏み切れないカチューシャの男子にむず痒さを感じつつニヤニヤしながら眺めていたら予想してなかった出来事が起こる。一人の男子生徒が二人の間に入ってきたのだ。

なんで?なんでなんでなんで?

なんであの人・・・私の片想いの彼がそこに現れるの?なにをするつもりなの?

私の心が揺れ動いているのなんて関係ないと言わんばかりに物語は進んでいく。

「ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください!」

「っー!」

小説や漫画なんかでよくある頭を鈍器で殴られたような感覚が襲う。足が勝手に動く。宿に向かって全力で走っていた。

『ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください!』

いつの間にそんなことになってたの!?! どうして!?

頭が回らない。冷静でいられない。比企谷君は姫菜ちゃんが好きなんだと本気で思った。

苦しい……比企谷君は姫菜ちゃんが好きだなんて……

「おっ、花菜。戻ってきて……ってどうしたんだ!?!」

「凄い顔だよ?」

顔か……かなり酷いだろうな。涙は滝のように出てくる。目は真っ赤。薄くだけどしていた化粧もたぶんぐちゃぐちゃ。肩で息をしていて完全にグロッキー。

でも……今はそんなのどうだって良い、なんにも考えたくない、したくない。

「ごめん……今日はもう寝るね」

「ちよっ!花菜!?!」

布団を被り完全に外の光景を遮断する。

だめだ……これはだめなやつだ。

こういうときはすぐ寝ちやうのが良いんだよね。

『ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください』

「っ！」

寝れない・・・悔しくて、悲しくて辛い。

あれだけ涙を流したがまだまだ出てくる。

ああ・・・つらいつらいつらい！

「雪乃・・・おかえり」

「聞いて、花菜ちゃんが・・・」

「ごめんなさい。今日は疲れてしまったの。もう休ませてもらうわね」

「ゆ、雪乃までも・・・なにがあつたんだ・・・」

雪乃ちゃんも帰ってきたんだ・・・雪乃ちゃんもあの事知ってるんだろうか。

話を聞きたいけど今はだめだ。私が無理・・・

涙を流し続ける夜は眠れないまま過ぎていった。

## 22話

修学旅行最終日。駅でお土産を買い新幹線に乗り私たちは千葉へと帰っていった。

「花菜ちゃん・・・昨日から元気ないけど大丈夫?」

「うん。もう元気だよ!・・・でも少し一人にさせてほしいかな」

「わかった」

私がそう言うと二人は別の場所に移動していった。

ありがとう二人とも。今度ちゃんと話すからね。

「ふう・・・」

比企谷君の行動だけど、頭が冷静になると昨日分からなかったことが分かるようになってきた。彼の行動の裏には隠された事実がきつとある。

私は・・・その事実が知りたい。どうしてあんなったのか気になって仕方がない。そう思うと色々頭に浮かんできた。

私の考えた仮説だけど、たぶんあの告白は嘘の告白だと思う。きつと部活の依頼の流れであんなったんだと思う。二日目の夜に比企谷君が言つて最終手段つてたぶんあれだったんだ。状況や比企谷君の性格を考えたら意外と簡単に分かることだったよね・・・

情けない。

とにかく後はその仮説を確信に変えるだけ。そのためには奉仕部が受けた依頼を知ることから始めなきゃ。

でも比企谷君も雪乃ちゃんも何も教えてくれないだろう。だったら誰に聞くのか……その候補は決めてる。

よしつ、早速聞きに行こうかな。

私たちのクラスの車両から別のクラスの車両に移動する。

「姫菜ちゃん……ちよつと聞きたいことがあるんだけど良い？」

「花菜ちゃん……わかった」

海老名姫菜ちゃん。比企谷君に告白された彼女ならきつとなにか知ってるはず。

「ここなら良いよね。さつそく聞きたいんだけど」

「昨日の比企谷君のことだよね？」

「……うん。なんであんな流れになったか教えてほしいの」

「……」

「もしかして奉仕部に、ううん。比企谷君個人に依頼したの？私に告白してって」

「少し……違うかな。私から告白してなんて言っていないよ」

「ならどうなつてたの？教えてよ」



「私の主観でしか分からないけど・・・それで良いなら教えられる」

「お願い」

「わかった・・・私が奉仕部に言ったのは・・・」

「――」

「・・・こんな感じかな」

「なるほど・・・」

それで比企谷君は姫菜ちゃんに告白したのか・・・やつぱり依頼だったんだ。

良かった・・・私の仮説は正しかった。

ん？さてよ？これってよく考えたら私が一人で勝手に勘違いして勝手に落ち込んで

たっただけなんじゃない？

それって・・・めっちゃ恥ずかしくない!?

いやああ！馬鹿みたい！ばっかみたい!!

完全に私の一人相撲じゃん！はっずかし！

こんな・・・あまりにも惨め！私最低！

「うう・・・」

「花菜ちゃん？」

「な、なんでもない！教えてくれてありがとう！」

「ううん。そんなの良いよ。私もちよつと罪悪感を感じてるから」

「罪悪感?」

「うん……もう噂が出来上がっちゃってるんだよ。戸部君の告白をヒキタニが邪魔した、文化祭の時といい本当に最低だ……ってね」

「えっ、もう?」

またそんな事になつてるの?こんどの噂はきつとすぐに広がる。そしてそれは以前の噂よりも大きく。陰で悪意に満ちた笑いを受け続けるのは傷付く。比企谷君だって例外じゃない。彼が受ける傷は以前よりも大きくなるかもしれない。

「うん……」

「そっか……まあ比企谷君の自業自得だし気にしなくて良いんじゃない?」

「えっ?」

「あんな手段取った比企谷君の自業自得だつて言ったの。比企谷君ならそんなことやつたら、どうなるかなんて分かるでしょうに……まったく」

そのせいで私が恥ずかしい勘違いしちやつたんじゃん!本当に自業自得!

え?私の勘違いの事に関しちや八つ当たり?

わかつてるよそんなのお!

「か、花菜ちゃん?なんだか冷たくない?」

「そう？比企谷君ってそういう人だつて分かつてる事だしね。それに私事前にそういうのやめといた方が良いよつて言つたじゃん。それなのにまったくもう・・・」

また自分だけ傷付いて・・・

「そうは言うけどさ・・・やっぱりヒキタニ君のそういうところは魅力だよね？」  
「え？」

そう言う姫菜ちゃんの顔は申し訳なさそうであつたがどこか嬉しそうな顔をして  
いた。

「もう聞きたいことはないよね？じゃあまたね」

「う、うん。ありがとう」

姫菜ちゃん・・・まさかね？

そんな伏兵予想してないよ・・・

「・・・戻るか」

新幹線の席に戻ると基子と美波がすでに戻つていた。

「花菜、もう良いのか？」

「うん！二人ともありがと！」

「うん！じゃあ何があつたか教えて？」

「え？それはその・・・」

くつ、私の勝手な勘違いで号泣してたなんて言いたくない。

恥ずかしいし笑われる気がする。

「良いから話せよ。約束だろ？」

「・・・話したくない」

「花菜ちゃんに黙秘権はありません」

「そんな！人権侵害だ！」

「良いからさつさと話せ」

「はあ・・・わかったよ」

この後昨日の事を話すと二人は大爆笑。私は軽く死にたくなりました。

くそお・・・傷口に塩塗りやがって・・・許さん！

でも後で心配をかけるなど怒られたのは少し嬉しかったりしたかな・・・

――

新幹線を降りて私は今最寄り駅に帰ってきた。私はここでとある人物を待っている。

その人は私と同じ最寄り駅で降りてくる。そして彼は寄り道なんかする性格じゃ無いから真つ直ぐ家に帰るだろう。

その私の思惑はバツチリの中。駅から出てきた猫背にアホ毛の男子生徒の姿を発見

した。

「比企谷君！一緒に帰ろ！」

「・・・愛川か」

少し暗くなった自宅までの帰路を二人で横に並びながら歩いていった。

比企谷君の顔は駅に居るときからずっと暗いままだ。

「そういえば比企谷君！また今回もやったんだって？」

「まあな」

「まったく・・・せっかく事前にそういうのやめといた方が良くよって忠告してあげたのに」

「最終手段が必要だったんだよ」

「そんなこと言つて・・・また学校で皆に嫌われちゃったじゃん！」

「別にそんなの気にする必要は無いだろ。俺としては存在を認識されて少し嬉しいくらいあるぞ」

「はあ・・・本当にどうしようもないな」

「それが俺だからな」

「まあそうだよな。今回の告白作戦とかは比企谷君の自業自得だもんね」

「なあ・・・愛川は俺に失望しないのか？」

「え？なんで？」

「いや・・・なんでもない」

「・・・失望なんてしないよ」

「・・・」

「だって比企谷君がそんな事する人だってわかってたし！それに他に作戦が思い付かなかつたら仕方ないじゃん！まあそれでも褒められたものでは無いけどね！」

「そうか・・・」

「それに前に言ったじゃん。皆に嫌われちゃっても私だけは比企谷君の味方だって！」

「そうだったな」

少し話したら比企谷君の表情は少し曇りが取れたように感じたがまだまだ暗いままだった。

「比企谷君。何か悩みあるでしょ？」

「別に悩みなんぞ無い」

「・・・そっか。比企谷君ならそう言うよね」

「・・・」

「これだけは言わせて！もしも比企谷君の悩みで辛くて、苦しくて・・・大きくて自分だけじゃどうしようもなくなったら私に相談してね！きつと力になるならさー！」

「・・・考えとく」

たぶん比企谷君はずっと悩みを自分の中だけで溜め込むかもしれない。それでも比企谷君は私の事を頼らないだろう。それでもこれだけは言いたかった。まあ頼られなくても私から助けに行くかもしれないけどね。

「考えといて！じゃあ私こっちだから！」

「送っていくぞ？」

「まだ七時前だし平気だよ！じゃあね！」

「そうか。またな」

まだ表情の晴れない比企谷君に別れを告げ私は自宅に向かう。

言いたかったことは言えた。なんだかスッキリしたよ。私も疲れたしはやく帰ろおー。

それにしても比企谷君の悩みってなんなんだろう・・・

『ごめんなさい。今日は疲れてしまったの。もう休ませてもらうわね』  
「っ！」

私と同じで昨日の夜から元気が無い雪乃ちゃんの顔が私の頭を過った。

なんで雪乃ちゃんはあるな表情をしていたの？姫菜ちゃんと戸部？って人の依頼の板挟み状態ならあの作戦は仕方ないって思うはず。なら・・・なんであんな元気が無い

の？もしかして・・・奉仕部の人間関係に何か問題が生じた？  
私は嫌な予感を感じつつ自宅に帰っていった。



## 23 話

修学旅行が終わり次の月曜日。私、愛川花菜は何時もと変わらぬ日常を送り、放課後の部活も終わらせ、帰り支度をして駐輪場に向かっていた。

「あっ！愛川さん！お疲れさま！」

くっ！相変わらず眩しくてキラキラしてやがる。こんなかわいい男の子が居ると自信無くしちやうよね・・・

「お疲れさまです！戸塚くんも帰り？」

「ううん。僕はこれからテニススクールに行くんだ」

「へえ・・・戸塚くん最近すごいよね。すっごく強くなった」

「そんな事無いよ〜」

最近戸塚くんはテニスが強くなってきた。夏休み入る前なら私もなんとか相手が務まる位だったのだが、最近だともう練習相手にもならない。コースを打ち分けることが上手い、サーブは早すぎてとれない、ストロークは回転も威力も強くて手首が痛くなる。技術面だけでなく肉体面でも最近は随分と差をつけられた。やっぱり戸塚くんは男の子なんだと思い知らされてしまう。

それに部長として皆を引っ張ってきたからリーダーシップもかなり上がってきてる。部員に練習メニューを指示するときなんか少しかっこいい。

正直それでも男の子として見るにはまだ抵抗が残るけどね……

「そっか……頑張り屋さんなんだね」

「うん！認めてほしい人もいるしね！」

「え？認めてほしい人？誰？」

「それは内緒かな」

そういつて人差し指を唇につけて、しーつとポーズをとる。

かわいいなあちくしょー！なんであんなに似合うんだよ！私がやってもあんなに可愛くはならないよ？

「じゃあもう行くね！またね！」

「うん。お疲れさま！」

そういつて我らが天使は駆けて部室に向かっていった。

はあ……可愛いなあ。私も帰ろ。

自転車置き場に行き、いつもの比企谷君との待ち合わせ場所に向かっていった。

—————

あれからいつも一緒に帰ってる彼を待つているがなかなか姿を現さない。何時もな  
らもうとつくに出てきてるのになあ・・・どうしたんだらうか？

もしかして奉仕部でついに揉め事が起きてしまったのだらうか。比企谷君と雪乃  
ちゃんと由比ヶ浜さんが衝突したとか。

まつさか。そんなはず無いよね！

・・・無いよね？

き、きつと依頼が来たんだ！だからこんなに遅くなってるんだよねきつと！

色々考えたけどきつと大丈夫！私は次に借りる小説の事でも考えてようかな！

「よう」

「遅い」

「悪い」

結論をつけたところで彼が到着。さてと・・・詳しい話でも聞かせてもらいますかね。

「愛川、待つてて貰つて悪いが先に帰つててくれ」

「えっ？なつなんで？」

「ちよつと行きたいところがあるんだ」

「へえ・・・なるほど！じゃあ行こつか！」

「は？」

なんでそうなる?と目で訴えかけてくるのが分かる。

そんな目で見られたって怯まないもん!私は比企谷君と少しでも多く居たいの!

「それで行きたいところって何処なの?」

「ちよつと千葉の方にな・・・てか本当に来んの?」

「千葉か!じゃあレッツゴー!」

ペダルを踏み込み国道を走り始めると比企谷君は諦めたように後に付いてきた。

「完全に無視かよ・・・はあ・・・一人がいいのに な」

「良いじゃん良いじゃん!一人でなんていつでもできるんだからさ!」

「いつも一人が良い」

「そんなに私と居たくないの?」

「愛川がどうかじゃなくて俺は基本的には一人の時間が好きなんだ」

「ええー!私は比企谷君といる時間好きだけどなー!」

「そうかよ」

「うん!そうだ」

ちよつと照れてるのかそれとも自転車を漕いで熱くなって来たからなのか比企谷君の顔が赤くなっている。たぶん私もなってるのかな?

「ところでさ、千葉で何をするの?」

「そうだな・・・本屋でも巡って気になる映画があったら見る予定かな」  
「へえ！楽しそう！」

「なんだかデートみたい！放課後デート！そういうのがしたかったよ！」

「・・・そうだな」

「・・・比企谷君」

比企谷君の顔はやっぱり曇ったまま。何があったの？どうしてそんな顔をしてるの

？

聞いても教えてはくれないよね。仕方ないか。

「早く映画見よう！見たいのあるの！」

「あっおい」

ギアを上げて立ちながらペダルを踏み込む。

今は少しでも比企谷君の気が紛れるように私は頑張ろう！

—————

「見たかった映画ってあれだったんだな」

「そうだよ！貸してもらった小説の実写化したやつ！」

「確かに興味深いな。あのシーンとかどうやって再現するんだ・・・おお。なんだか楽しみになってきた」

比企谷君楽しそうだな・・・よし！このまま頑張るぞ！

「映画まで一時間くらいあるしあっちのドーナツ屋さんで時間潰してよ！」  
「そうだな」

映画の下にはスタバがあつたが、なんとというかあの雰囲気は苦手だったりする。きつと比企谷君もそうだと思うしドーナツで良いよね。

店内に入り、ポンデダブルシヨコラとオールドファッション、飲み物にカフェオレを買つて2階の席に向かう。

ああ・・・私のポンデダブルシヨコラ。あなたは何故そんなに、もちもちなの？はやく食べたいよお・・・

「おや、珍しい顔だ」

その声に私と比企谷君はビクツと体を反応させた。

声が出た方を見ると、ドーナツ屋よりもさっきのスタバの方が似合うであろう美女がそこには座っていた。

雪ノ下陽乃。あの雪乃ちゃんの姉にして完璧人間。まさかこんなところで出会うなんて・・・

「どうも！お久しぶりです！」

「花菜ちゃん！久しぶり！それに比企谷君も」

「ども」

そう言うとは彼は離れた席の座り、自分のドーナッツをがぶつと食べ始めた。きつとあれだな・・・はやく食べて出たいんだな。

私も比企谷君の向かいの席に座りオールドファッションを一口食べる。美味い。

「別に逃げることはないじゃない。失礼だなー、もう」

「あ、いや、お邪魔するのも悪いと思ひまして」

ここでカフェオレを一回飲んでもう一口ドーナツ。これが最高なんだよね。

「もしかして花菜ちゃんと二人でいるところ私に邪魔するなって遠回しに言ってるの？比企谷君・・・それはお義姉さんのポイント低いぞ？」

オールドファッション美味しいな・・・

「色々言いたいことはありますが、とりあえず別に俺たちはそんな関係じゃありません」  
「だよねえ、正直あり得ないと思ってた」

「なら聞かないでくださいよ・・・俺は無駄な労力は使いたくないんです。それと愛川、お前も少しはこの人の相手、手伝ってくれよ」

「そうだよ！花菜ちゃんも久しぶりなんだしなにか無いの？」

「え？な、何かって言われても・・・」

「そう言えばなんで二人はこんなところに居るの？」

「・・・映画までの暇潰しを」

「ほー、じゃあ私と似たようなもんだね」

「映画見るんですか？」

うわあ・・・嫌そうに言うなあ・・・あんな顔されても表情一つ変えない陽乃ちゃん  
は凄い。

「んー？違う違う。友達とご飯行くまでの時間潰し。」

「へえ・・・そうなんですか」

「お友だちとですか。じゃあお邪魔にならないうちにこれで。いくぞ愛川」

「まだ先の話だよ。いいじゃん、一緒に暇潰そうぜ」

椅子をずらしてぐいぐいと比企谷君に寄っていく。

って・・・

「ちよ！なに比企谷君によつてるんですか！」

それと比企谷君もなに鼻の下伸ばして！くそお・・・やっぱり胸の力は絶大なんですよ  
うか・・・

「あらら？妬いちやった？」

「や、妬いたとかではなくて！」



「あはは、可愛いなあもう！でもでも比企谷君は雪乃ちゃんのだからあんまりちよっかい出さないでよっ。」

「俺は誰のものでもないですし、戸塚以外の誰かのものになるつもりはありません」  
「と、戸塚くんは良いんだ……」

その気持ちはわかるけどね！

って言うかもしかして最大のライバルって戸塚くんだったりするのかな……？

こんなに美人でスタイルの良いお姉さんに詰め寄られてるのにぶれない比企谷君まじアイアンウオール。

まったりとした時間が流れる。三人で読書に勤しんでいるのでとても静かだ。

ドーナッツを食べながらカフェオレを啜り、本を読む。ちらっと視線を前に向けると比企谷君がいる。なんだかこんな時間が幸せだな……

ひしひしと幸せを感じていると陽乃ちゃんは飽きてしまったのか何やら比企谷君と話はじめていた。

「雪乃ちゃんは元気？」

「……まあ普段と変わらずですかね」

「……でも」

「愛川」

「っー」

比企谷君に無駄なことは言うなと視線で言われたような気がした。

「ふーん。つまんないの。じゃあ修学旅行でも何も進展は無し？」

「・・・そうですね」

「・・・ふふふ。そうなんだ」

何だか含みのある笑いをして比企谷君をじつと見つめる。陽乃ちゃんは本当に何者なんだ。底が全く見えない。

何て言つてその底を探つてみようかなーつと考えていると、別の方向から声がした。

「あれ？比企谷？それに愛川も！」

「あつー折本！」

文化祭の時以来だろうか。正直あんまり久しぶりではない。

「・・・折本」

比企谷君は苦い顔をしてそう呟いた。

『告られた』

苦々しい顔をするのも分かるな。振られた相手に会ったら気まずいもんね。

「うわ超ナツいんだけど！レアキャラじゃない？」

まあ比企谷君は必要最低限の外出しかしないからレアだね。私も誘わなかったら

比企谷君に遭遇なんてまずしないだろうしね。

「あつ！コイバナ！お姉さん比企谷君の恋ばな聞きたいな！」

「あー、そういえば私、比企谷に告られたりしたんですよー」

あつさりと一つの事実を口にした。

それ比企谷君のいる前で言うとか相変わらず図太い神経してるわ。ましてやあの陽

乃ちゃんの前で・・・

「それ気になるなー」

ちらつと比企谷君の様子を伺うと見るからに冷や汗が出ていて、目が泳いでるのが見てとれた。

「折本。もうそんな話は良いじゃん」

「もう過ぎたことだし良いじゃん」

「ちよつと花菜ちゃん。お姉さんは比企谷君のコイバナ聞きたいの！邪魔しないでよ！」

「でも・・・」

「そういえば愛川はどうなのよ。前に言った愛川にちよつかい出してた男子とはどうなの？」

今度は私に話振るの・・・そこまでして、コイバナしたいのかね折本さんや。ていう

か・・・

「本当にそんな人いたの？」

「いたよ！野球部でさ！えーつと・・・名前はなんだったかな・・・」

「菅原だろ」

比企谷君が隣から一言添えてきた。

え？菅原？

「そうそう菅原！」

「菅原君・・・」

菅原将太くん。私と同じ小学校から中学に上がった野球部の男の子だ。昔は家が近いこともありよく一緒に遊んでたなあ・・・まあ今じゃ菅原君は隣の市に引っ越しちゃったけどね。

嘘だあ・・・菅原君はそんなんじゃないでしょ。

「え！あの野球部の菅原君!？」

折本の隣で驚いた表情をした仲町さんが声をあげる。

そういえば菅原君も海浜高校だったよね・・・知ってるのは当然か。

「そうそう、あの菅原。しかもまだ諦めてないっぽいよ」

「うそおー！ちよつと狙つてたのにシヨックー！ていうか同じ高校の人の名前ならすぐに思い出せ！」

二人が盛り上がつてゐる横で比企谷君にこつそりと疑問をぶつけみる。

「菅原君が私にちよつかいって・・・そんなの嘘でしょ？」

「いや、本当だよ。少なくとも俺が1年の時にはちよつかいだしてたな」

うつそおん！気付かなかつたよ・・・

でも思い返してみればそうだったのかな？メールも月に一回くらいに、元気にしてるかつて来るし。

正直に言ううちよつと、めんどくさいかな・・・比企谷君とのメールならいつでも welcome だけだね。

「てか菅原って、お前に告白したんじゃないやねえの？」

「えっ!?!してないしてない！」

「・・・そうなのか」

あれ？なんか心なしか比企谷君の表情が・・・

「あのさ。比企谷くんは」

「もういい！菅原君なんて諦める！ねえねえ！比企谷君ってさ！総武高なら葉山って人知ってる？」

「葉山……」

「そう！葉山くん！サッカー部の人！」

「一応は知ってるな」

「じゃあ紹介してよ！」

「いや、知り合いじゃないし」

「だよー」

何だか引つ掛かりのある言い方だな。比企谷くんをバカにしてるのがあからさまに分かった。

何言ってるの！比企谷君は葉山くんと知り合いでそれなりに話す仲じゃない！

そう言いたかったけどきつと彼はそんなこと望まない。なら私が出るところじゃない。

「じゃあ、愛川はどう？」

「知り合いではあるけど仲は良くないかな」

「そっか……残念」

「……ふーん、面白そう」

「え？」

暫く黙って私たちを観察？していた陽乃ちゃんが眩き、目を光らせていた。その目は

イタズラなんてかわいいものじゃなく、確かに悪意が籠っていた。

あつ、これやばいやつだ。

「はい！お姉さんが紹介しちゃうぞー」

「は？」

「あつ、隼人？今すぐ来てね。早くしなきゃ時間が来ちゃうから。じゃあよろしくー」

「は、陽乃ちゃん・・・」

「あんだ、なにしてんすか・・・」

私と比企谷君の気持ちも知らずに・・・いや、きっと知っててやってるんだろうなこの人。

「んふふ♪」

なんか超絶楽しそうにしてるし・・・

—————

少しの時間が経過した頃、我が校のリア充キングこと葉山くんが到着した。

「陽乃さん。これは？」

「隼人を紹介してほしいって娘たちがいたから」

「・・・そう」

そう言うで一瞬いつもとは違う表情を見せた。比企谷君がよく見せる表情と似てい

る。だが少し違う。

最近葉山くんについて思ってたことがある。呑気なリア充だという認識だった彼だが、それは多分本当の彼じゃない。その奥底には黒い何か、それは比企谷君よりも陽乃ちゃんに近いもの、そんなものを感じる。あくまで直感だけど。

「初めまして。葉山隼人です」

まるで休憩を終えた、ホテルマンの様な笑顔を一瞬で表面に出してきた。葉山くんはきつとヒーローを演じてるんだな・・・比企谷君が悪役を演じてるのと同じように。

全然違うようで、二人は似てるのかもしれない。

「あつ！今度どっか遊びにいかない！」

「それいい！葉山くん行こうよ！」

「うんうん、遊びにいくってのは良いね。みんなでいくと良い」

「ですよね！愛川もいこうよ」

「え？私は・・・」

「ほらほら、菅原君も、呼ぶしき！行こ行こ！」

「花菜ちゃん行つてきなよ」

折本に仲町さん、最後には陽乃ちゃんまで・・・

菅原君が来るのはめんどくさいなあ・・・それに比企谷君に誤解されるのも嫌だし・・・



「……」

比企谷君に、helpと目線で伝えたがあっさり視線をそらされてしまった。くっそお……誤解してないよね!?

この悪い空気を葉山くんは上手く避けて、二人を帰らせる方向に持っていった。

っべー! 葉山さん、まじりスペクトつす。

「じゃあ、わたしたちそろそろ」

「葉山君またね! メールするね!」

そう言つて二人は立ち去つて行つた。明るかつた表情が冷たくなつていくのが見て分かる。

なんとというか……こつちの表情の葉山くんの方が私は好きかも。

も、もちろん一番好きなのは比企谷君だからね! 勘違いしないでよね!

「どうしてこんな真似を?」

「面白そうだし」

「またそれか……で、なぜ二人はいるの?」

「なんとこの二人はあのパーマの娘と同じ中学だったんだつて! しかも比企谷君はそのパーマの娘に告白したんだつて! 超面白くない!? 雪乃ちゃんも呼びたかつたくらいだ

よー」

「……」

陽乃ちゃんの笑い以外誰も喋らない。なんだか気まずい気持ちになり喋りにくい。

陽乃ちゃんは笑い終わると詰まらそうにして席をたった。

「私もう行くね。良い暇潰しができて楽しかった。そうそう！みんなちゃんと遊びにくんだよ？じゃあね！」

「……俺誘われてないんですがね」

比企谷君が、陽乃ちゃんには聞こえないようにそつと呟いて反撃していた。こういうところでも比企谷君の姑息なところが見てとれる。姑息な比企谷君もかっこいいぜ！

「君は陽乃さんに好かれてるんだな」

「は？」

「愛川さんも気に入られてるみたいだね」

「そ、そうかな」

「あほか、俺のはからかかってるだけだろ」

「少なくとも興味は持たれてる」

「あの人は興味が無い人にちよつかい出したりしないよ。なにもしないんだ。好きなものには構いすぎて殺すか、嫌いなものを徹底的に潰すことしかしない。」

その葉山くんの忠告ともとれる言葉聞いたとたん背中に悪寒が走った。

確かに陽乃ちゃんならそうするかもしれない。あの陽乃ちゃんに本気で何かされたら、私は無事で要られるんだろうか。

「そりゃ怖いな」

比企谷くんがそう言うのと葉山くんは去っていった。

「俺たちも行くか」

「映画・・・行く?」

とても映画を楽しめるかわからない。今の比企谷君はそんな顔をしている。明らかに疲れすぎだろう。出来れば休んだ方が良さいかもしれない。

「そうだな・・・金払ったし一応見に行くか」

「そう・・・だよ。じゃあ行こっか」

この後の映画では私は集中してみたのだが、比企谷君は熟睡してしまった。今日は責めないでおこうかな・・・

――

家に帰り、お風呂から出て部屋に戻るとケータイに折本からのメールが届いていた。

「土曜日か」

本当に遊びに行くんだ・・・なんか大変そうだな。基子とか、変わってくれないかな

? まあ無理だよね・・・

了解つと返信を返すと直ぐにメールが届いた。

返信早すぎじゃない?

そう思ったがどうやら違うらしい。差出人は菅原君。内容は土曜日楽しみだねという内容だった。

やっぱり来るのかあ・・・比企谷君になんて思われるかなあー。仕方ない。

菅原君には、そうだねつとだけ返信して布団に飛び込んだ。

土曜日・・・なにも起こらなきや良いな・・・

土曜日の心配をしながら瞼を閉じると、直ぐに意識は無くなつていった。

## 24話

本日は土曜日。約束通り私は千葉に向かつてる訳だが……

「はあ……」

ついにこの日が来たか……

菅原君がもしも私に好意を持つていたとしたら……非常にまずい!

今日は比企谷君もいるんだよ!?! そんな状況でアタックされても嬉しくない! もしも

比企谷君が勘違いしたら……

いやああああ! 違うの! 違うのよ比企谷君!

菅原君とはそんな関係じゃなくてお友達なんだよ!

今日はこんな感じで一日過ぎすのかな……胃に穴が開きそう……

「あつ、愛川さん! おはよう」

「おはよう! 二人とも早いね」

千葉についたところで愛しの比企谷君と葉山君が居るのを見つけた。

「あれ? まだ海浜組は来てないの?」

「ああ。もうすぐ来るらしいぞ……あ、あれじゃないか?」

「お待たせ！」

「遅れちゃってごめんね」

「全然！」

この前会った二人は口々に挨拶をしてやって来る。その二人の後ろから体格の良い短髪の男の子が前に出てきた。

「やあ、愛川さん。久しぶり」

「う、うん。そうだね」

菅原将太君。私の小学校からの学友だ。そして今回の私の最大な敵！

出来ればあんまり関わりたくないな。

「なんだか・・・前よりも可愛くなつた感じだね？」

「そうかな？ありがと！」

うん。この人はすぐこうゆう事言うんだよね。軽薄とは言わないけどね。嬉しいんだけどそんなに嬉しくはないかな。

「お、本当に比企谷だ！なつかしー！」

「・・・うす」

「なんだよ、相変わらず愛想ねえな・・・」

「・・・」

え？なにこの二人の雰囲気。もしかして私を巡って争ってる？

そ、そんな・・・私には心に決めた人が・・・だから菅原君はすっこんで！

「じゃあ行こつか！」

「映画だよね」

「その予定だね」

そう言つて菅原君は私のとなりを陣取る。そして最近はどうだのそつちは楽しいかとか世間話を振つてきた。私としては本命である斜め後ろを歩く彼と会話をしたいな。

正直そつちなほうが有意義な時間を送れるだろう。

はあ・・・

映画では比企谷君の隣にいこ・・・

—————

「映画面白かつたな」

「そうだねえ」

「あの爆発のシーンとか！めっちゃ派手でさ！引き込まれたな」

「そうだねえ。でも私としては終わりがたが物足りない感じがしたな」

「え・・・そ、そうだったよな」

あつ、これ菅原君無理に合わせるな。せつかく映画後の感想の言い合いが、菅原君

とじゃ出来なさそうだな。

「ねえ！比企谷君はどう感じた？」

ならばこれはチャンス！自然な流れで比企谷君の隣にポジショニングできたぜ！

「そうだな・・・この映画は隠されたメッセージがあつたように感じたな」

「えっ？どゆこと？」

「あの犯人グループの主張つてさ、今起きてるイギリスがEU離脱したことで出てくる問題をモチーフにしてると思う」

「うーん・・・確かにそうかも」

「それにあれを作つた監督はそういうの好きだらな。前作は北朝鮮についてだったはずだ」

「ひゃー、相変わらず詳しいな」

「それでもねえよ・・・」

「でもそれだけ良い映画つてだけにあの終わりほね・・・」

「ああ。あと少し頑張つてほしかった」

ああ・・・

「まあ、仕方ないか。つて言うか寒いね」

やっぱりこれだよ。



「もう冬だしな．．．仕方ないだろ」

「あーあ、マフラーとか欲しいな！」

「知らない、俺に振るな」

「冗談だよ」

この二人で軽口を叩いてる時間は楽しいな．．．私癒されてると思う。

「あつ、マフラー！俺の貸そおか？」

「ううん。大丈夫だから！」

菅原くん．．．ここに入ってきたか．．．やつぱり今日の障害だな。

「8時半って時間無いじゃん！急いで回ろ！」

「そんなに急ぐ位なら無理して回らなくても良いんじゃない？」

「え？ちよつと愛川。今みんなで回る流れだったんだから良いじゃん別に」

ええ．．．だつてめんどくさいじゃん。今日はなんだか疲れるんだよね．．．

てか今の発想比企谷君つぽかったかな？もしかして比企谷菌に汚染された!?もうこれは責任とつてもらえないかな。

「ほら！愛川！行くよ！」

「わかったよ」

私は折本に急かされ店内に入っていく。ちらつと比企谷君の方を見ると菅原君とな

にやら話してるみたいだ。

あれ？比企谷君の目が濁りを増して・・・

「ほら！余所見するな！」

「ご、ごめんごめん」

何を話してたのだろうか。聞いたら教えてくれるかな？

後で聞いて見よーつと

――

一通り店を回ったあと外に出てきた。

つ、つかれた・・・

なんなのあのサッカー部のマネージャー！めっちゃ怖いし！どうしたらあんなに冷たい声が出せるんですかね？

それと菅原君・・・めっちゃ話しかけてくるし、私のためにつてマフラー買ってこようとするし・・・とにかく疲れた。

「ちよつとお腹減らない？」

「普通に私は空腹だよ」

もう本当にお腹すいた。今日のお昼ご飯いつもより少なめだったからお腹すい

ちやつた。

「比企谷。なにか食べたい?」

折本が意地悪そうな顔で比企谷君に訪ねる。きつとシンデレラのお姉さんとかはこんな顔してるんじゃないかな?

「サイゼ、とかな」

はいサイゼ。千葉県民ならサイゼだよね!

「えー」

「えっ?」

折本が不服そうな顔をしたので思わず声が出てしまった。サイゼだよ?あのサイゼだよ?なんで嫌がるのか分かんないや・・・

結局葉山君の選んだカフェになってしまった訳だが・・・サイゼ楽しみだったな。

「しかし、サイゼはないわー」

「ないよね」

「比企谷、男ならもう少しは気の利いたこと考えようぜ」

海浜組は比企谷君を笑い出す。

・・・なんかこの3人、今日比企谷君の事バカにしすぎじゃない?

ちよつと反撃してやるかな。

「私はサイゼ好きだよ？」

「そうだね。俺も好きだな。サイゼ」

「でもデートで選ぶにはどうなの？ っと思っわー」

「それある！」

そう言つてまたクスクスと3人が笑い出す。

ちらつと比企谷君を見ると乾いた笑いをしていた。

「こんなの・・・おかしいよ・・・」

「そういうの、好きじゃないな」

「っ！」

葉山君!?!まさか葉山君が比企谷君を？

「だよねー!!」

「違うよ。俺がいつてるのは君たちのことさ」

「っ」

は、葉山くん!グッジョブ!正直私もこいつらに胸くそ悪いつて思つてた!

え?言葉遣いが悪い?

ごめんなさい。はい終わり。

とりあえず私も流れに乗るかな

「私も好きじゃないな。海浜ってこんな感じかな?」

「え、えつと・・・」

海浜組はどうしたら良いのか分からないようであたふたし始める。さて、この後どうしようかな?とありあえずさつさと帰るのを提案するよ。

「・・・来たか」

「え?」

私が帰り支度をしようとしたら見知った人影が目に入った。

由比ヶ浜さんと雪乃ちゃん。奉仕部のお二人さんですね。

「・・・なんで、ここに?」

「俺が呼んだんだ」

そういうと海浜組に、明らかな敵意を持った口調で比企谷君を庇護する。

・・・葉山くん。この手は比企谷君には残念だけど悪手だよ?

たぶん比企谷君は助けてほしいなんて思っていないし、哀れんでんじやねえよって文句言うと思う。

これじゃ逆に比企谷君を怒らせちゃうだけだよ。

葉山くんの気迫に負けて海浜組は3人も帰っていった。菅原君が、別れ際になにか言いたげな顔をしていたが今はそれどころじゃない。現状を何とかしなくちゃ。

だけどその後は酷かった。奉仕部の中でもめてるのは一瞬でわかつたし、陽乃ちゃんまでいるし、その3人が帰っても比企谷君と葉山くんも口論してるし、本当に胃に穴が開きそうだよ。

「気持ち悪い同情押し付けてんじやなねえよ。そんなレッテル貼りは迷惑だ」

比企谷君はそう言つて階段を下りていつてしまった。

「ま、まって！比企谷君！」

私は彼を追いかけて駐輪場を目指す。たぶん同じところだな。

そこにつくと、比企谷君が倒れてる自転車直してるのが目に入った。

「ぎげんなよ……」

「……比企谷君」

その後一緒に帰つたがそんなに大きな会話はしなかった。

—————

以前、唐突にとあるメールが届いていた。

部活が自由参加になったから暫く一緒に帰らない。

「はあ……」

「花菜……なんて顔してるんだよ」

「いくら比企谷君と帰れなくなったからって、一週間一緒に帰れない位でそんな世界が終わるみたいな顔しなくても」

「だって……はあああああ」

比企谷君は今奉仕部で大変な事が起こってるんだろう。今回の部活自由参加もその影響だと思う。だから今は比企谷君たちがその問題を乗り越えるのを待ってるしかない。それは分かっている。分かっているけど……

「やだやだ私と比企谷君だけの日課を無くしたくなくいく、毎日会いたいく、一緒に帰りたいいく」

「欲望に忠実だね」

「うっさい」

本当にそう思ってるんだから仕方ないじゃん。好きな人との大切な時間が無くなるんだよ？そんなの嫌でしょ。

「で、花菜はどうするんだ？」

「どうするって何を？」

「何って……このまま何もしないつもりか？」

「うん」

確かに今のこの状態は嫌だけど比企谷君は私が干渉することを嫌がるだろう。そうなるのは私としても好ましくない。

「冷たいねー、そんなにモタモタしてたらあの二人と比企谷君との間に入り込む余地のない絆が出かちやうよ？」

「そうだよ花菜ちゃん！恋愛はいつも攻めの一手に限るって！」

「うーん……」

「それにほら、比企谷君って誰がどう見ても奥手じゃん？少しは自分から行かなきゃ距離が縮むのがいつになるか分からないぜ？」

「……確かに」

一理あるな……出来れば三年生になる前に比企谷君に告白したい。このまま指をくわえて待つただけじゃ私も嫌だしね。

「よし！とりあえず情報だけでも集めてみようかな」

「おお！ついに動くか！」



「修学旅行からあんまり動きがないから気になってたんだよね〜」

「なんであんたらが心配してんのよ」

「そりゃ私たちの友達の初恋だもん。心配にもなるってもんよ」

「これでも応援してるんだよ？」

「二人とも・・・」

なんて良い友達を持ったんだろう。花菜ちゃん感激です！

「で、何かわかったら教えてね？」

「うんうん！」

にやにやしながらこつちを見つめてくる二人。

こ、こいつら私の恋愛を完全に楽しんでるな・・・畜生！例え何か分かってても教えてやらないもんね！

「それでどうやって調べるの？」

「大丈夫。考えあるから」

そういつて、電話帳からある人の名前を探す。

「えーつと・・・あつた」

明日の昼休みに話があると一言メールをして・・・よし。

「準備おっけ！」

後は明日になるのを待つだけだ。

—————

時は過ぎて翌日の昼休み。私は屋上で呼び出しておいた人物を待っている。何を聞くかは決まっている。あとは来るのを待つのみだ。

ガチャリとドアが開く音が聞こえた。

そこに現れたのは頭につけたお団子がトレードマークの巨乳美少女。

そう、由比ヶ浜さんだ。

「おまたせー」

「ううん。それより急に呼び出してごめんね」

「そんな！大丈夫だよ？」

「良かった。じゃあ早速で悪いんだけど質問させてもらおうね？」

彼女は何かを察したのか顔を強ばらせていた。緊張感が今の空気に走る。その思い空気の中私は意を決して口を開く。

「修学旅行からの奉仕部について・・・何があったの？」

なぜ彼女を選んだのか。理由は簡単だ。一番口を割りそうな当事者だからだ。雪乃ちゃんや比企谷君はクライアントのプライベートがどうたらこうたら言うけど、由比ヶ浜さんはきつとそんなこと考えてない。ましてや今の奉仕部の雰囲気が良いなら

どうにかしたいと相談してくるかもしれない。

「・・・やっぱりね。ヒツキーの事聞いてくると思ってた」

「うん。比企谷君が部活動自由参加になったから一緒に帰らないってき、そんなの言われたらどうなってるのか気になるじゃん」

「だよね」

「うん。だから教えて・・・」

「・・・わかった」

よしや！食いついた！ちよろがはまさんナイス！

「修学旅行の前にね・・・依頼が来たんだ。私たちの関係がおかしくなったのはその依頼からで・・・」

「って感じかな」

「・・・雪乃ちゃんが立候補？」

「うん。今日ゆきのんが平塚先生とそれっぽい話してるの聞いちやって・・・」

まさか雪乃ちゃんが誰かの代わりになるために生徒会長に立候補する？そんなことしたら奉仕部はどうなるの？彼女の・・・奉仕部の理念は？

「もう私どうしたら良いかわからないよ・・・ゆきのんもヒツキーもみんな勝手だよ・・・」

由比ヶ浜さんは俯きながら涙声でそう漏らす。

私は今回の事を聞いて驚き、困惑、そして言い知れぬ失望感などいくつかの感情が沸き上がってきた。

「確かに勝手だよ。みんな勝手だよ」

「・・・」

「修学旅行に関しては比企谷君は大暴走だ」

「・・・だよ」

「でもね、知ってる？比企谷君の事情」

「ヒツキーの・・・事情？」

「うん。なんであんな事をしたか。その真の理由」

私は姫菜ちゃんに聞いた事を簡単に由比ヶ浜さんに説明をした。それを聞いていた彼女の表情はみるみる変化していく。

やっぱり彼女たちは姫菜ちゃんの依頼を分かかってなかったんだね。

「じゃあヒツキーは・・・依頼を達成したってこと？」

「うん。だと思おうよ」

「・・・」

シヨックだろうな。何も知らないとはいえ、彼は悪だと思い込んでいたはずだから。

その考えは相模さんと変わらない行為だしね。

「だとしても……」

「えっ？」

「だとしても勝手だよ！」

「由比ヶ浜さん……」

「分かってたなら私たちに教えても良かったはず！あんな行動をとる前に事前にこうするつもりだつて教えても良かったはず！そうしたらこんなことにはならなかったかも知れない！」

「ゆきのんもゆきのんだ！私に相談なく立候補？そんなの身勝手すぎるよ！相談くらいしてよー！」

「どんだん荒くなつてくる息づかい、そして潤んでいる目。彼女が今まで貯めてきたのも全てを吐き出しているのではないだろうか？」

「みんな……みんな勝手だよ……」

糸が切れた操り人形のようにその場に座り込んでしまった。その顔は俯いてしまっていて表情がよめない。だが良い表情をしてないのは確かだろう。

「そして私も……勝手だよね」

彼女の気持ちは分かる。私も自分勝手に色々やってるから。痛いほど伝わってきた。

周りが我道を行く二人だからそれを上手くまとめる役を担ってた。だから彼女は自らの意見で行動する事は無かつたんだろうな。

「由比ヶ浜さん」

「・・・なに？」

だがまとめるのも限界。ならば彼女も・・・

「由比ヶ浜さんも何かやってみたらどうかかな？」

「・・・私が？」

「うん。現状が嫌なら行動しなきゃダメだよ！なにもしなかったら良い方には変わらな  
いはずだから」

「・・・」

「今まで散々二人に振り回されたんだ。行動を起こしてさ！私もいるんだぞ！勝手する  
なって二人に教えてやれば良いんだよ！」

「私が・・・いる」

「そう。あなたが居る」

「・・・」

最初は困惑の色が濃く現れていたが次第に由比ヶ浜さんの表情は確固たる決意を感じさせるものになっていった。

「・・・私やってみるよ」

「そのいきだ！あつでも二人を傷つけるやり方はダメだよ？」

「うん！愛川さんありがとう！」

「どういたしまして」

「じゃ！私戻るね！」

「ばいばい！」

由比ヶ浜さんはガチャンと扉を締めて戻っていく。

「はあ・・・」

姿が見えなくなったら急に気が抜けた。

なんで私、敵にアドバイスしてんのかな・・・

結局余計なお世話しちやったよ・・・由比ヶ浜さんにだけど。

まあとにかく情報は手に入ったし良かった・・・のかな？

それとこれからどうするか。答えはもう出ている。やつぱり私比企谷君にもお節介しよう。このまま待つてもチャンスは来ないかもだしね。なによりじつと待つてるのは私には合わない。

「よーしー」

これから頑張るぞ！

## 25話

由比ヶ浜さんに吹っ掛けた翌日。本日もなんの滞りもなく授業は進んで昼休みになった。雪乃ちゃんの様子をチラチラと伺ってみたが普段と変わった様子は見られない。雪乃ちゃんはこの先の奉仕部をどうしたいのかな……。

そして比企谷君。彼も何がしたいのか、何を考えているのか分からない。彼の守りたいたいものは何？それについては予想はついてる……。でも、その答えは私的に認めたくないものなんだよなあ。

「知りたいなら本人に聞けばいいじゃねえか」

その事を基子たちに相談したらあいっは何てこと無いって顔でそう言い放つ。

簡単に言ってくれるな……

「聞いても教えてくれないでしょ」

「かもな。でも、感じとることは出来るかもよ?」

「感じとること?」

「そつ。話してるときの顔とか話題に対する態度とかで」

比企谷君の態度でか……



「でも・・・」

「花菜ちゃん」

「美波？」

「恋愛に關してはやらずに後悔よりやつて後悔だよ？」

「・・・」

やらずに後悔よりやつて後悔・・・か。

「とにかく1回腹を割って話すことは大切だと思うよ」

「・・・そだね。よし！今日の放課後比企谷君の家に行つてくる！」

「さすが花菜ちゃん！がんばれ！」

「うん！」

比企谷君が本音で話してくれるかは分からないけど、でもやるしかない。今の私が前に進むにはこの手以外思いつかないから・・・

—————

時は経ち放課後、本日は顧問の都合で部活は休み。グットタイミングだぜ。私は下駄箱で上履きを履き替える。

外に出ると校門付近に二人組がいるのが見えた。あれは・・・

「っー」

その二人が誰かを認識した瞬間、心臓がどくんと跳ね上がる。

歩いているのは男女二人組、女の子は頭にお団子を作っていて、男の子の方はアホ毛がびよんと頭部のでっぺんに生えている。

えっ？ふ、二人で下校って今は由比ヶ浜さんがやつてるの？ず、ずるい。

そんな事を考えていたら二人は外に向かって歩いていった。

冗談はさておきどうしたものか……

よし！二人を尾行しよう。ほら、比企谷君と話したいことあるしさ？やましいことなんて何一つないよ？ただ少し会話の内容が気になるかなーってだけかな？

自転車を取りに行つてたら見失うな。後で取りに来れば良いや。とりあえず今は追いかけるんだ。

オレンジ色の空は徐々に暗い色が見え始めてきた。夕日も三分の一位は沈んでる。ロマンチックな景色だなあ……でも二人の様子を見た感じだとロマンチックの欠片もない。二人とも無言で歩いている。何をしているのよ本当に。由比ヶ浜さんなんか凄い怯えてる目してるし。

「ゆきのんさ、出るんだね。選挙」

「ああ」

いきなり立ち止まり由比ヶ浜さんの方から口を開いた。

ちよ、急に止まらんでよ。私は映画の探偵のように近くの電柱に隠れる。

話すのはやつぱり雪乃ちゃんの事か・・・それはそうだよね。二人で解決策でも考えるのかな？・・・でもそんな雰囲気では無いか。

「・・・あたしも。やつてみようと思うの」

さつきまで怯えていた彼女の目はすでに強い決意を感じさせるものに変わっていた。

えっ？

やつてみようと思うって・・・選挙のこと？なんでそんなこと・・・

「っ」

思考を巡らせていると比企谷君の表情が目に入った。その目は濁りを増してもはや最大限に達したのではないだろうか。驚きと大きな苦しみが表情から読み取れる。

やつぱり比企谷君の守りたいものは・・・

「今度はねあたしたちが頑張るの。ヒッキーに頼つてばっかりだつて気づいたから」  
「俺はなんにもしてねえよ」

「そうかな」

「そうだ。だから頑張る必要もない」

強引な言い方。選挙なんかやめさせようと必死になつてるのが伝わってくる。こん

なの今までの彼からは想像できない。

こういう姿を目の当たりにすると私の予想が確信に近づいていく……

「無くなっちゃうよ。文化祭の時だって体育祭の時だって、ゆきのん、ひとつのことに集中するの、ヒツキーだって知ってるじゃん」

由比ヶ浜さんが会長になっても同じなんじゃないかな？それは比企谷君もわかってるはず。そして比企谷君が会長になってもまた奉仕部は崩れる。あの三人は誰一人として欠けてはダメなんだ。欠けたら彼らはあの《奉仕部》では無くなる。

「ばいばい、ヒツキー」

比企谷君は由比ヶ浜さんと別れると俯きながら自転車を押して来た道に戻り始めた。その背中には悔しさ、怒り、焦燥感などあらゆる負の感情が滲み出る。

……今私にできることが分かったよ。

「比企谷君！」

自転車に乗られる前に声をかけなきゃね、私は徒歩なんだし。

「……愛川」

俯いてた顔を上げると、彼の顔はとても酷い状態だ。顔……いや、身体中から不幸なオーラが漏れている。

「聞いてたのか」

「うん」

「そうか」

「由比ヶ浜さんと雪乃ちゃん、選挙出るんだね」

ぎよつと目を見開き驚きの表情をして私を見る。

「・・・お前雪ノ下の事知ってたのか」

「依頼の事とか色々知ってるよ」

「・・・由比ヶ浜か」

「うん。正解」

「・・・あいつに選挙に出るように言ったのか？」

「ううん。あれは由比ヶ浜さんが自分で考えたんだよ。私はやりたいことをやれって背

中を押しただけ」

「そうか・・・」

私の事を見ていた濁った目は地面に向けられてしまった。

「ねえ・・・比企谷君。聞いて良いかな？」

「・・・なんだ」

「比企谷君はさ、何を守ろうとしてるの？」

「俺は何かを守ろうなんてしてない」

「今まで色んな事したじゃん」

「あれは部活だからだ。最善の手だつて思ったからやった」

「じゃあ今回の事は？」

「は？どういう意味だよっ」

「雪乃ちゃんが生徒会長になるのは学校としては最善の手だつて言える。でもさ、君はそれに納得できてない」

「っ！お、俺は……」

顔を伏せたまま喋らなくなってしまう。でもその行為で彼が何を考えているのか、何を守ろうとしているのか、私が想像していた答えが正解なんだろうと確信した。彼の守りたいものは……

「比企谷君の守りたいものは奉仕部の日常でしょ？」

そう。奉仕部の日常。

それは私の居ない……日常。

「っ」

びくつと肩が跳ね上がる。

「頭で否定しても本能が日常を壊すことを拒んでる。雪乃ちゃんがいて、由比ヶ浜さん

がいて、そして比企谷君がいる。困難な依頼や下らない依頼を3人で聞きながら解決する。そんな日常をさ」

奉仕部。彼にとって一番特別な関係に私は含まれてない。私が依頼の手伝いで生徒会長に立候補するって言つても彼は止めてこないだろうな。私にはかなり堪えるよ……

正直に言つて奉仕部の存在を疎ましく感じたことはある。下校中、時々比企谷君は雪乃ちゃんや由比ヶ浜さんの話を楽しそうにするんだ。その度に胸がモヤモヤして、嫉妬してた。

その話を聞いただけで私がモヤモヤする日常。本当だったら無くなつてくれたら私は楽だ。だけどそれで……彼が、比企谷君が傷付くなら……私が……

「私はその日常を守つてあげるよ」

「……え？」

比企谷君に由比ヶ浜さん、雪乃ちゃんがやれないなら他の誰かがやるしかない。他の誰かがやって比企谷君の守りたいものが守れるなら……

「私は生徒会長に立候補する」

—————

「比企谷君はさ、何を守ろうとしてるの？」

肩までかかった黒い髪は風に靡き夕日によく映える。背丈も体格もTHE日本人っ



て容姿の少女、愛川花菜は俺にそう告げた。

「俺は何かを守ろうなんてしてない」

俺はなにかを守りたいだなんて考えたことはない。いや、小町と戸塚の笑顔は守りた  
いって思ったことあるか。

「今まで色んな事したじゃん」

愛川は俺の言葉を否定してくる。やめる。俺はそんな良いことをやってる訳じゃないんだ。

「あれは部活だからだ。最善の手だつて思ったからやった」

「じゃあ今回の事は？」

「は？どういう意味だよっ」

イラつきが大きくなり、それが表に出てきた。俺が今までやった事が誰かを守るため  
？ふざけるな。俺は俺のためにやってるんだ。わかったような事を言うな。

「雪乃ちゃんが生徒会長になるのは学校としては最善の手だつて言える。でもさ、君は  
それに納得できてない」

「っ！お、俺は……」

その言葉に反論できない。言葉が出てこない。いつものように屁理屈が出てこない。

俺は雪ノ下が生徒会長に立候補すると聞いたとき、確かに胸に引つ掛かるものを感じ

た。それが何なのかは分からなかったが……いや、分からない振りをしていた。

「比企谷君の守りたいものは奉仕部の日常でしょ？」

「……俺の守りたいもの。」

俺が守りたいのは俺という個人、そんなことを思い浮かんだが彼女はまったく違う答えを出してくる。

「頭で否定しても本能が日常を壊すことを拒んでる。雪乃ちゃんがいる、由比ヶ浜さんがいて、そして比企谷君がいる。困難な依頼や下らない依頼を3人で聞きながら解決する。そんな日常をさ」

違うと否定の言葉を出すことができない。

俺は……本当に守りたいのか？

愛川の顔をちらつと見ると切なさを感じる表情をしている。

「私はその日常を守ってあげるよ」

「……え？」

思わず顔を上げて目を見てしまった。もうその顔に切なさは感じない。決意に満ちた目だ。

『……私も、やってみようと思うの』

「っ」

ふと、さっきの場面がフラッシュバックする。愛川の目はあの時の由比ヶ浜の目と重なった。

そして夕日に照らされた少女は桜色の唇が開きはじめる。

なにを言う気だ。やめろ。聞きたくない。

やめてくれっ。

「私は生徒会長に立候補する」

どくんっ

まただ・・・胸がもやもやする。

「まああの二人に勝てるかは分からないけどねえ」

先程とは、うって変わっておどけた態度。

「ま！とりあえず言いたいこと言えたし私は行くね！」

「愛川・・・」

「じゃあね！」

駆け足で学校の方に向かっていく。

俺はその背中が消えたあともしばらくその場か動けずにいた。

—————

「はあ・・・」

家のソファアーにどすつと座り込み深いため息が出る。あれからずつと愛川との会話が頭から消えない。

あいつ・・・なんで立候補するって言う前に切なそうな顔をしてたんだ？

なにかあいつに辛いことがあるんだろうか。会長になるのが嫌なのか？

「くそっ！」

いくら考えても分からない。俺はどうしたら・・・

文字通り頭を抱えて悩んでいるのがちやつと扉が開く音が部屋の静寂を打ち破る。

顔を上げてみると・・・

「・・・」

そこには比企谷家の長女、比企谷小町が立っていた。

なにかないかと言う風に冷蔵庫を漁り出す我が妹。相変わらず俺を無視している。

・・・小町なら、妹なら。

「い、小町」

「・・・何？」

「コーヒー淹れるが飲むか？」

「・・・飲む」

よし。そそくさと準備をしてお湯を沸かす。その間に会話は無い。

「……ほら」

「……ん」

淹れたてのコーヒーを小町に渡す。俺たちは猫舌だからすぐには飲めないがな。

……さてと。

「なあ、小町」

「……なに？」

「ちよつと相談したいことがあるんだ」

「……それより先に言うことがあるんじゃない？」

「……この前は悪かった」

「……はあ」

「こ、小町？」

あれ？なんか間違えた？

「ま、いつか。許してあげる」

「そうか、ありがとう」

「小町はお兄ちゃんの妹だからね。あつ！今の小町的にポイント高い！」

ああ、ほんとに高いよ。

「それで、相談ってなに？」

「ちよつと長いが良いか？」

「良いよ」

「ありがとな。先ずは修学旅行の事なんだが・・・」

「はああああ」

頭に手を当て深いため息を吐く。なんかすつごい呆れられてるな。

「ほんとにごみいちゃんはどうしようもないね。ポイント低すぎ」

「いや・・・でも」

「でも?」

「おつしやる通りです」

「まったく・・・それで?お兄ちゃんはどうしたい?」

「俺が・・・どうしたいか?」

「うん。お兄ちゃんは奉仕部の日常を守りたい?」

そう言われて考えてみる。瞼を閉じるとそこは紅茶の香りがする特別棟のとある一室。ケータイのカチャカチャという音と、本がめくれる音が静かな教室に響いているどこか居心地が良い空間。

俺は……

「俺は……あの空間が好きだ」

あの三人でいる空間が好きだ。出来ることなら守りたい。それはやはり難しいことだと思う。でも守りたいんだ。

「そっか」

小町は生暖かい目でこつちを見てくる。

な、なんだよお。わるいか？てかさんな目でみるな。

小町にやめろと睨むと一瞬引いたような態度をとって真剣な眼差しに変わる。

小町さん？一回俺を蔑まなきや気がすまないんですか？

「じゃああともうひとつ」

「ああ」

「花菜先輩の事。このまま任せちゃう？」

そう。すでに奉仕部だけの問題ではなくなつた。

愛川は俺の守りたいものを守ると言ってくれた。でも本当は彼女も嫌なんじゃないか？テニス部だつてきつと疎かになる。毎日今より忙しくなつて勉強も大変になるん

じゃないか？

「お兄ちゃんはどうしたい？」

俺がどうしたいか・・・つか。結局そこにたどり着くんだな。

「・・・」

またもや目を閉じて考えてみる。

『ふうー・・・助かった。ありがとう！』

いつもあいつは笑顔で

『えっ？えっ？？どういうことなの？なんでここにいるの？』

まっすぐ俺の事を見てて

『それでも凄いやー！』

俺を否定しないでいてくれて、間違えたら教えてくれる。

『私がその日常を守ってあげるよ』

そんな、お前がそんな顔をしないでくれ。俺の記憶の中のお前は・・・



『私も比企谷君がのこと嫌いじゃないよ!』

「・・・」

「お兄ちゃん?」

分かったよ、俺が守りたいものが。俺は・・・

「俺は愛川との日常も守りたい」

もうあいつは俺の中で無視できないほどに大きくなって。あいつのいない日常はきつと物足りないと感じる。

俺は奉仕部も愛川も守りたい。そのどちらも欠けてほしくないから。

そのために……

「小町、俺に力を貸してくれ」

「お兄ちゃん……」

涙目になりながら俺を見上げてくる小町。その表情はとても嬉しそうで感動しているんだと感じる。

「任せて！小町に出来ることならなんでもするよ！」

「ありがとな」

小町、ポイント高すぎるよ。

「それにしても凄い成長だね！お兄ちゃんはきつと守りたいものとか認めないと思ったよ。最悪小町が奉仕部を守ってって、お兄ちゃんに依頼しようかなーって思ってたんだけど……あのお兄ちゃんが自分から言ってくるなんて……成長したなあ」

あれ？俺が兄だよ？なんで弟の成長を喜ぶ姉みたいな顔してるの？

……まあでも俺も自分で思うよ。前までの俺なら絶対に守りたいものなんか認めなかっただろうな。

それはきつとやっぱりあの三人によるものが大きいんだと思う。

はっ、こんなこと考えてる時点で俺らしくない。

「それで！具体的にどうするか決めてるの？」

「ああ」

それについては考えてある。きょうの帰り道はいつもより時間があつたからな。

「おお！それで内容は？」

「SNSを使つてこの依頼を無かつたことにするんだ」

小町がは？何言つてんのこいつつて顔で見てる。や、やめて！そんな目でみないで

！何かに目覚めそう！

「それつてどういう意味？」

「一色に生徒会長になるように説得するんだよ」

この策がうまくいけば全て元々あつた形にもどる。うまく行くかは分からないが今はこれしか思い付かない。少々危険だが絶対に成功させるんだ。

俺はこの作戦の準備のために部屋に戻つてパソコンのスイッチをつけた。

## 26話

比企谷君

件名（無題）

今日の部活が終わったらいつもの場所で待ってる

「おっ、来たか愛川」

「比企谷君」

私が比企谷君に確固たる決意で彼の日常を守ると誓った日から数日後。私は彼にメールで呼び出されていた。

「じゃあ帰ろうぜ」

「うん」

季節はもう冬。時間はまだ6時にもなっていないがすでに太陽の半分は沈み辺りは暗くなってきた。冷たい風が吹き抜けるなか二人並んでペダルを漕ぐ。

「な、なんの用だろ・・・私がやること気に入らないとか？文句言うために呼びつけた？」

「うう・・・なんかそんな風に言われるのは嫌だな。」

「なあ」

「は、はい！」

「お前、雪ノ下たちを倒すために選挙に出るんだったよな」

「う、うん。正確にはあの二人を会長にしないためだけだね」

「それな・・・雪ノ下も由比ヶ浜も生徒会長に立候補するのをやめるそうだ」

「・・・えっ？」

「つまりお前も立候補する必要は無くなったわけだ」

ちよつと何言ってるか分からない。どういうこと？私がバカなの？

「ちよつと待ってよ……ちゃんと説明してよ！何のことだか分かんないよ！」

「あー……そだったな。簡単に言うとな今回の依頼は取り消しになったんだ」

「取り消し？」

「ああ。依頼に来たやつが会長をやる気になつたらしい」

取り消し……会長をやる気に……

「……っ！」

なるほど。何となくわかった。

「……比企谷君がやったの？」

「……さあな」

「やっぱりそうなんだ」

比企谷君がまた動いたんだ。自分の力で何とか解決させたんだ。

あんなに腐つてたのにまったくどうしたんだろ……

「……とにかく、お前も立候補する必要は無いぞ」

どくんっ。

胸がいたい。お前なんか俺のために出来ることなんてない。自分のことなんて自分だけでやれる。お前は俺には必要ない。そう言われた気がした。

比企谷君をちらつと見ると前を見ながら自転車をこいでる。その前を見つめる目はもう以前ほど腐ってなんかいない。まだ腐ってはいるけどね。

比企谷君がそんなことを考えてないのは分かってる。そういう事を思う人ではないし、それを隠すことが出来るほど器用でもないだろう。

「そっか・・・」

「ああ。そうだ」

「はあああああ・・・」

「あ、愛川？」

「ねえ比企谷君」

「ん？」

「なんで自分で行動したの？」

「・・・」

「私に任せていても奉仕部は守れたのに・・・どうして？」

「まああれだ。お前の策は正確性に欠けるからな。」

「そっか・・・」

本当に余計なお世話だったんだ。

「愛川？」



「そだよね！雪乃ちゃんとか由比ヶ浜さんに勝てる見込みなんて薄いもんねー」

私は比企谷君に信じてもらえるだけの力がない。頼りないってこと……

「私が何もしなくても……比企谷君は自分でやれたんだ」

比企谷君には奉仕部は守れないだろうと、私が何とかしようと、私なら守れるって、勝手に決めつけてた。私は無力なのに力を持つてるって錯覚してた。とんだ道化だよ。

恥ずかしい。悔しい。虚しい。悲しい。

色々な感情が私を飲み込んでくる。私の心の中は何も見えないくらい真っ暗。

「なんか私が出たことお節介だったなあ……余計な事してごめんねー」

この嫌な感情を表情に出さないように笑顔で謝った。明るい声で、明るい顔でやったつもり。だけど比企谷君は私を見ると自転車を漕ぐのを止め、立ち止まってしまっていた。

「愛川……」

「比企谷君？どうかしたの？」

比企谷君は考えるように俯いていたが、何かを決心したように口を開いた。

「今の俺のやり方じゃ本当に守りたいものを守ることができない。以前そう言われたんだ」

「え？」

「今回やり方を少し変えてみたが成功したかは分からない。でも……今回俺は確かに変わったと思う」

良い方に正しく変わったかは分からないがなつと言い加え、頬を掻きながら自嘲気味に笑う。

「お前も知つてると思うが俺はこんな性格だからな。変わる必要なんてないって思ってた。俺はこのままでも良いって。でも俺は変わろうと思った。守りたいものをしっかりと自覚したからだ」

比企谷君……

「自覚することが出来たのは他のだれでもない愛川、お前に教えてもらえたからなんだ」

「つまりあれだ……今回俺が行動を起こせたのはお前のお陰って事だ」

「っ」

私を肯定してくれる言葉。その一つ一つの言葉が私の心の中の暗闇を明るく照らしてくれる。真つ黒な感情を溶かしてくれる。

「その……なんだ。ありがとな」

顔を少し赤くしてそつぽを向きながら頭を掻く。出会って間もない頃、彼がよく見せてくれた仕草。その仕草をみてるだけで心が温まる。安心する。

「……っ！……」

気が付くと私の瞳から幾つもの滴がこぼれ落ちてくる。唇が、肩が震える。呼吸が荒れてくる。

「あ、愛川？」

ごめんね比企谷君。いきなり泣かれたら困るよね。でも止まらないんだ。

今回私が起こしたお節介は無駄じゃなかったただけじゃない。修学旅行から数ヶ月。久しぶりに比企谷君を見て、心がぽかぽかと温まった。その事で感じる圧倒的な安心感。

「っ……ケホッ」

こんなに泣いちゃって……迷惑かけてごめんね。

勝手に色んな事してごめんね。

ううん。きつと彼はこんなこと言って欲しいんじゃない。

「比企谷君……どういたしまして！」

夕日を背にし、飛びつきりの笑顔で私はそう返事をする。さつきみたいに無理矢理作った笑顔じゃない。まだ泣いているのに自然と出てきた

私の本当の笑顔。そして彼が求めたであろう言葉。

「おう」

私の返事に返事をする彼の顔は困惑の色を残していたが優しい表情をしていた。

泣いている私を比企谷君は近くの公園のベンチで連れてきて休ませてくれていた。

「落ち着いたか？」

「・・・うん」

あれからどれだけ時間が経っただろうか。辺りは暗くなってしまうている。

「ほら、あつたかーいマツカンだ。温まるぞ」

「ありがとう」

カシユツと開けて一口含む。

ああ〜美味しいよお・・・

冷えた体に染み渡るこの練乳の甘さたままないよ。

何よりも久しぶりに比企谷君と二人でマツカンを飲んでる。この時間は以前と変わらず・・・いや、以前よりもっと幸せに感じる。

「比企谷君」

「どした」

「ありがとう」

「は？なんでお前がお礼言うんだよ」

「えへへ．．．なんでだろうね。なんかそういう気分なんだよ」  
「なんだそりゃ」

街灯のみで照らされた公園に冷たい冬の風が吹き込む。両手で包み込んだ缶コーヒーが温かい。隣に居るのは呆れたように笑う私の想い人。

この空間．．．この雰囲気だ．．．

「そだ！比企谷君！また本貸してよ！」

「そういや最近はお貸してなかったな．．．」

「うんうん。まあ最近はお貸してなかったからゆっくり読書する時間も無かったけど．．．ね」

ゆっくり読書．．．ゆっくり読書かあ。

「どうかしたか？」

「今度のお休みの日にさ、一緒に図書館に行こうよ」

「図書館デート！図書館デートってなんか良いよね！恋愛映画とかでも時々見るし憧れる！」

比企谷君も本好きだし私も楽しいしナイスアイデアでしょ！

「ええ．．．」

そう思ったのもつかの間。比企谷君の嫌そうな顔が表に出てきてる。

「ちよ！なんで嫌そうにしてるの!？」

「休む日って書いて休日だぜ？なんで休日に外に出なきゃいけないんだよ」

ぐぬぬぬ・・・なんだよそれえ・・・相変わらず平常運転かよ。

最近学校で人気の女の子と図書館デートできるだよ？なんで断るんだかまったくもう・・・

「良いから！行くの!」

「え？なに？まじで?」

「まじ！決定ね!」

「ええ・・・」

いくら不服そうな顔してもだめだからね。最近スッキリした気持ちで遊べてないんだからここで発散しなきゃ!

「結構遅くなったな。そろそろ帰るか」

「そだね」

残ったマツカンを飲み干し帰り道に戻る。

この時まで私は、彼の守りたかった奉仕部の時間は取り戻せてない事などまったく知るよしもなく、以前の用な幸せな日常を取り戻したと、うきうき気分で彼の隣を歩いていた。

## 27話

みなさん！こんにちは！愛川花菜です！

最近は何々大変な事がありました！がなんとか解決することができました！

そして今回はなんと久しぶりに比企谷君とデートすることが出来るんです！

いやあ・・・こんな清々しい気持ちで出掛けるのは本当に久しぶりだよ・・・

そして現在比企谷家の前。時間は午前9時50分か。集合時間の10分前に着いちやった。ま、いつか。

ピンポーン

冬の乾いた空気の中にインターホンの音が響き渡ると、はーいつとなんとも可愛らしい声が家の中から聞こえてきた。

「花菜先輩！こんにちは！」

将来、私の義妹になる（予定の）女の子、比企谷小町ちゃんだ。

「こんにちは。比企谷君と約束して来たんだけど・・・」

「実はまだ兄は準備が出来て無いんですよ。ちよつと待つててください！」

「そっか。了解」

まあ確かに集合時間よりも少し早いもんね。

「花菜先輩！花菜先輩！」

「ん？どうかした？」

「今日はやっぱりデートですか!？」

「えっ・・・わ、私はそのつもりで比企谷君を誘ったよ」

「へー！へえー！」

今日はデート。改めて第三者に言われると結構恥ずかしい。しかも小町ちゃんなんだか知らないけどすごいニヤニヤしながらこっち見てるし・・・ちよ、見ないで！はずかし！

「これはもう花菜先輩ルート一直線かな・・・でもこの前は他の二人も・・・」

え？なんて？

何やらぶつぶつ呟いてるがまったく聞こえない。

「玄関でなにをぶつぶつ言ってるんだお前は」

「あつ！やつと出てきた！」

「待たせて悪いな」

「ううん！まだ時間来てないし大丈夫だよ」

「ありがとな」



そう言つて微笑む彼を見るとなんだかこちらの頬まで緩んでしまふ。

「へえ〜」

そんな私たちの何て事のないやり取りをニヤニヤし生暖かい視線を送る女の子がいた。

「・・・なんだよ」

「べつつにー。ただこれがお兄ちゃんのままrつて!」

「余計なことは言うな」

小町ちゃんの頭にチョップをして喋ろうとするのを制止する比企谷君。

小町ちゃん何て言おうとしてたのかな・・・

「お兄ちゃんの・・・なに?」

「なんでもねーよ。行くなら早くいこうぜ」

少し頬を朱色に染めながらそそくさと歩き出す。

少し気になるなく。比企谷君、私の事家では何て言つてるんだろ。

「花菜先輩」

「どうかした?」

「あんな兄ですがよろしくお願いしますね」

「え?」

なんの事だろうか・・・比企谷君をよろしく？

「それじゃあ行つてらっしゃい！」

「う、うん！」

—————

今日の図書館にはあんまり人が居なくて静かだ。私たちは隣に座りながら読書に興じる。互いにお薦めしあったもので後で感想を言い合おうって事になっていた。比企谷君は推理小説を私は恋愛小説をお薦めしている。

「・・・」

静まり返った空間でページをめくる音だけが響く。ちらつと隣を見ると愛しいあの  
人。

まつげ長いな・・・鼻も綺麗に整つてる。しかし残念なことにお世辞にもかっこいい  
とは言えない目。でもそんな目も今は真剣に本の文字を追っていた。

彼は恋愛小説を読んでなにを感じているんだろう。ドキドキしてるかな？キユン  
キユンしてるかな？少しは私の気持ちに気付いてくれるのかな？

じつと眺めていたらその視線に気づいたのか比企谷君がこちらを見てきて目があつ  
た。

「どうかしたのか？」

「ううん。なんでもないよ」

「・・・本、面白くなかったか？」

「ううん。本当に何でもないから」

「そうか・・・」

「そういう比企谷君こそ、恋愛小説なんかって感じになつてない？」

「そんな・・・いや、そう言うのは後でにしようぜ」

「ふふふ。そうだね」

微笑み合つてまた読書に戻った。今度こそ集中しなきやね。

—————

「まさか犯人があの人だったなんてね。ほんとやられたつて感じだよ」

現在帰宅中。私たちは本の感想で盛り上がっていた。

「だろ？ トリックも中々のものだったよな」

「うん。あの作者の他の作品も読んでみようかなあ」

「あの人のやつなら俺んちに面白かったのが三冊あるからまた貸すよ」

「ほんと？ ありがとう！」

「おう」

「なにかお返しがしたいんだけど…比企谷君はどうだった？」

「中々面白かったんだが…主人公に感情移入出来なかったな」

「ええー！あれ私はすごい気持ちわかるよ？」

ほんと比企谷君は女の子の気持ちかわかってない。

「比企谷君はもつと女心について学んだ方がいいよ」

「言つとくが俺は少女漫画を愛読してるんだぞ？女心についてならそれなりに心得がある」

「え…その結果がこれ？」

「ちよ、そんなゴミを見るような目で見ないでくれない？」

酷すぎるでしょ。全然私の気持ちにも奉仕部二人の気持ちにも気付いてないし。

「第一あれだろ？こういう女の子がされて嬉しい事つてのはイケメンに限るんだろ？」

「一概にそうとは言わないけど概ねそうだね」

「それなら俺が学んでも生かす機会なんてないだろ」

「そ、そうかもしれないけどさあ…でも比企谷君にはきつとあるの！」

「は？なんでそんなこと分かんだよ」

「えっ…それはその…私が…」

私が比企谷君を好きだから女心を分かって！何て言えるわけない。???

「あー！もう！比企谷君いちいち細かい！」

「ええ…」

二人で他愛もない会話を楽しみながら帰路を進む。この時間が永遠に続いてほしい。そう考えてしまう私は向上心がないのだろうか。

もしも彼女になつたら今よりも楽しくなるのかな？ドキドキするのかな？幸せになれるのかな？

分からないけど今は何も考えずにこの時間を楽しんでおこう。

—————

図書館デートからそれなりに日がたったある日、比企谷君から一通のメールが届いていた。

「はあ…」

内容はしばらく一緒に帰れなくなったというもの。

「花菜ちゃん？大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも…せっかくまた一緒に帰れてたのになあ…」

「クリスマスイベントの手伝いなんだよな。それなら仕方ないだろう？」

「そうなんだけどさあ…やっぱ頭で理解するのと納得するのとは違うよね…」

非リア充の代表を名乗ってそうなのに文化祭の時といいこんなにも忙なのは何なんだろうね。

「まあそんなシヨボくれた顔すんなって」

「そうだ！じゃあ久々に三人で遊ぼうよ！部活終わりにさ！」

「うーん…そうだね。久々にいこうか！」

最近遊んで無かったし良い機会かもしれない。この二人との交友も大切にしたいしね。

「久々にあのカフェでも行くか」

「それ良い！じゃあ決定ね！」

—————

「…楽しかったな」

最高にいい気分転換になった。なんかカフェでも恋ばなになって色々公開処刑にされたけど…

でも今回、一番ビックリする事が発覚した。

美波の気になる人の話だ。

なんかあの娘、物理の先生に気があるみたいですよ？

顔を真っ赤にしながらあの、あざとボイスで赤裸々に想いを語る彼女は正直可愛かった。恋する乙女はやっぱ綺麗になるんだろうか？

私も比企谷君の事考えてる時もあんな風に可愛くなれてた良いなあ。

それにしても物理の先生かく。ほんと驚きだよ。好きな方程式は何ですかってクラスの人が質問したら、嬉しそうながら運動方程式について20分語るような人だよ？あんな変人のどこがいいんだろ。

「…なんか今の発言ブーメランじゃね？」

私の好きな人もかなり変人だったわ…ポツチ公言してるとかヤバイでしょ。どのくらいヤバイかって言うとう目を見ただけでやばいって分かるレベル。

「…あれ？」

自転車を漕いでいたら前方の自販機の前に見慣れたアホ毛が…？

「つて比企谷君!?!」

「っー」

びくつと肩を動かした後、ジト目をしてゆっくりと此方を振り向いてきた。

「いきなり大きな声をだすな」

「あつごめん」

よかった本物だ。

好きすぎて比企谷君の事を考えただけで幻が見えたのかと思つたわ。

「こんな時間までお前なにやつてたんだ？」

「今日は友達と遊んでたんだ。最近暗くなるの早いじゃん？たまが見えないからテニス部つてこの季節になると活動できないんだよ」

「へえ。なるほどな」

「比企谷君はこんな時間に制服でどうしたの？」

「メールで言つてたやつだよ」

「メールつて…クリスマスのイベントの手伝い？」

「ああ」

「えっ…それつてこんな時間までやつてるの!？」

「…そうだよ」

あの仕事嫌いな比企谷君がねえ…

でもよくよく考えたら文化祭の時も何だかんだで頑張つて働いてたし当然なのかな？  
？そういう真面目なところも比企谷君のいいところだと思う。

「ほえ。こんな時間までやるつてことはかなり忙しいんだ」



「忙しいって言うか…色々問題があつてな」

比企谷君はそう言うとき目をいつもより濁らせて辛そうな顔をしていた。その顔を見たとき心臓がどくんつと跳ね上がる。

私は知っている。いったいどんな時に比企谷君はこの顔になるのかを。

「比企谷君。クリスマススイベントの手伝いつてき、どんな感じなの？」

だからこそ聞かずにはいられない。

「まあ拗れてるかな」

「…詳しく教えて欲しいな」

「ええ…別に良いよ。愛川に言っても解決にはならんだろうし」

「それでも話したことで少しはスッキリするかもしれないじゃん！」

「そうかもしれないが…うーん」

そつと顎にてを当て考えるそぶりを見せる。しかしすぐに顔を上げてこちらをみた。

「少し長くなるけど良いか？」

「うん。大丈夫。その代わり全部話してよね」

「わかつてるよ。まずは新生徒会長の…」

—————

「って感じで今に至る」

「…」

やっぱりまた比企谷君は困難な仕事をしてるんだね。それに今回は奉仕部を頼ることができない。比企谷君の意地、奉仕部の雰囲気があることを許さないだろう。

奉仕部の関係は戻ってなんか無かった。未だに拗れたまま。

「…ほんとに時間がヤバイんだね」

「そうだな。海浜高校のやつらのやり方で行くなら絶対的に時間が足りない」

「どうしようか」

「そうだなあ…本当にお手上げって感じだよ」

「うーん…」

何か策はないか。何か…何かっ。

いくら考えても良い案は出てこない。

「……あのさ」

「なに？」

なにやら神妙な面立ちでこちらを見ている。

な、なんのはなしだろ。

「もし…時間があるなら愛川。手伝ってくれないか？」

「え？」

今なんて？比企谷君が手伝ってくれて言ったの？

「正直俺一人だけじゃきついんだ。仕事を手伝ってくれる人手がほしい。頼む」

「……」

あの比企谷君が…私を頼ってくれた。

「無理なら良いんだが…」

「無理じゃない！」

無理じゃない。こんな答えは決まってる。やっと好きな人に頼られたんだもん。

「手伝うよ」

「…ほんとか？」

彼の顔には驚いた表情。

自分から頼んでおいてその顔はなによ…もう。

「ほんとだよ」

ついつい微笑みがこぼれる。前なら絶対に頼られることはなかったはず。

やつぱりこの変化は嬉しい。

「ありがとう」

ほりほりと頬を掻きながらお礼を言うがどこかぎこちない。本当に不器用な人だな。

「いいのいいの！任せて！それで？詳しい日時とか教えて」

「ああ」

文化祭に引き続きまた仕事をやることになっちゃったけど、今度は比企谷君のためなんだ。頑張らなきや！

## 28話

「とう言うわけで部活しばらく早退させてほしいんだけど……」

「…そっか。分かった」

私がクリスマスイベントを手伝うと決めた日の翌日。早速、戸塚くんはこの事を伝えるにきた。

「八幡最近また元気が無くなってきてたからさ、心配してたんだ。昨日も、夜と一緒にご飯食べたんだけど元気なかつたしね。これでまた元気な八幡に戻ると良いな」

うっ、眩しい。久しぶりに天使の微笑みがああああ！

最近私も腐ってたかもだからなあ…ほんと浄化されてる気分だよ。

…つって一緒にご飯って？

「ちゃんと比企谷君をサポート出来るように頑張るよ！」

「あはは。頼もしいなあ。頑張ってる！」

「ありがとう」

「ううん…」

「…戸塚くん？」

あれ? 戸塚くんなんか元気ない?

もちろん可愛らしい顔なんだけどいつもよりも元気がない感じるな。

「僕はテニスに高校生活を費やしたいと思ってるし、そうしてるつもりだよ」

「えっ…急にどうしたの?」

「愛川さんは…恋に費やしたいんだね」

「えっ? えっ?」

急になにを言い出すのこの天使は。恥ずかしいんですけど。

「ふふふ。顔真っ赤にして、愛川さん可愛いなあ」

「ちよ、戸塚くんまでやめてよ。何だかはずかしいじゃん。てか何で恋!? 何で知ってる

の!?!」

もしかして

「八幡の事いっつも見てたでしょ? さすがの僕でも気づくよお」

なんですと…恋愛に興味なさそうな戸塚くんまでもが気づいてるって事は他のみん

なも気づいてるってこと…?」

「っ!」

ええ…私ばれてないと思ってたんですけど!? すっごい恥ずかしいんですが!

「戸塚くん…もうやめてえ」

「ごめんごめんちよつと意地悪言いたくなつちやつて」

「ええ…酷いなあ」

「ふふふ。でも応援するから安心して。それに部活しばらく早退するんだからこの位はね」

舌を出してそう言う彼の仕草は可愛いの一言に尽きる。女としての自信が砕けそうなんです…

「そろそろ練習始まるしコート行くよ？愛川さんはそっちのボール持って行ってね。僕は部室の他のみんなにも声かけてくるよ」

「はい。じゃあ先いつてるからね！」

戸塚くんの承認も得たし、今日から張り切っていかなきゃね！

「…ちゃんと応援しなきゃ」

—————

私が比企谷君と校門前で合流してから向かったのは学校から自転車で数分ほどの距離のコミュニケーションセンター。そこについてから進捗状況の事を細かく聞いていた。

「えっ、全然間に合わないかもしれないのに小学生加えることにしたの？」

「ああ。まったく意識高い系（笑）の考えてることはわかんねえよ」

「どんな会議なのよ…気になってきた」

「これから嫌でも味わうことになるだろうな。これは聞くより直接見た方が分かりやすい」

「本当にどんな会議なんだろう。こういった行事事では比企谷君そこそこキャリアあるはずなのにこんなに苦労するって…考えただけでも恐ろしい。」

「おつ、来たな」

彼の視線の先を見てみると、亜麻色の髪少女がこちらに歩いてきていた。

「せんぱーい！おま…た…」

私を見るなり固まっちゃったんですけど。私悪いことしたかな。

「ちよつ、せんぱい！」

「なんだよ」

「…」

なにやらひそひそ声で会話始めちゃったんですが…もしかして比企谷君話し通してない？

「…」

話が終わるとこつちを値踏みするようにじろじろ眺めてきたんですが…そんなに見られると緊張するんだけど。



「こんにちはー！すみませんおまたせしちやつて。わたし、生徒会長の一色いろはです」  
うっわあー！一瞬でこんな明るい顔と声になっちゃったよ!?!すごっ。この娘凄い強  
者っばいよ!!

それにたしか以前折本たちと出掛けたときに会った娘だよね…あの時はなんか怖  
かったな…

「こ、こんにちは。2年の愛川です。よろしくね」

「愛川先輩ですよね！文化祭見ました！お姫様可愛かったです！」

「そ、そう？ありがと」

「いえいえ。てか先輩、愛川先輩とも知り合いだったんですね。葉山先輩とも知り合い  
だし先輩の交遊関係って地味に凄いですよね」

「交遊関係って…ボツチの俺にそんなもんがあると思うのか？」

「うわっ、またボツチとか言ってるんですか？」

「うるせ。ほら早く行くぞ」

「はい。じゃあお願いします」

えっ…当然のごとく一色さんのビニール袋を受けとる比企谷君って…それに一色さ  
んも渡すのに抵抗無さそうだし。

あ、あれ？もしかして二人ってかなり仲良さげな感じ？

比企谷君は一色さんの事苦手だと思ってたんだけどなあ。

「…」

「愛川。行くぞ」

「あ、うん」

もしかしてライバルが増えたなんてこと…ないよね？

「……」

「今日から手伝ってもらおう新しいヘルプ要員です！」

「どうも、愛川です」

「玉縄です。海浜高校の生徒会長なんだ。よろしく」

「挨拶が終わったなら早く会議を始めようぜ。時間がない」

「そうだね。じゃあ始めようか」

挨拶を済ませて会議が始まる。私は比企谷君の隣にポジションニングしてスタンバイオツケーだ。

オツケーなんだけど…

「顧客がなにを求めているのか、それをカスタマーサイドにたつて客観的に考えてみよう

「よ」

「…」

「その案だと予算が掛かりすぎでコストパフォーマンスがわるいんじゃないか？」  
「…」

「それだとシナジー効果が薄れるんじゃないかな？」

こ、これは…

正直舐めてた。

なにを言ってるのかまったく理解できない。

あれ？これって私がアホだからなの？

「ねえねえ比企谷君」

「なんだ」

「今これ…なにやってるの？」

「…さあ？」

さあって…

「まあこんな感じなんだ」

「なるほど…」

これは本当にやばいな…

—————

本日の会議をじっと観察した感想を言おう。

会議がまったく進んでる気がしなかった。

全部の意見に対する討論。批判を許さずその意見をどうしたら実行できるか。どうしたら全部の意見を取り入れられるか、そう言う話し合いをしていた。これじゃあ会議が進まなくなってるのも分かるよ。

「この会議のやり方ってまずいよね」

「ああ。このままじゃ時間が足りないな」

比企谷君との帰り道、私は現状を彼と確認しながら進んでいた。

「やり方変えなくて良いの？」

「やつらは今のスタイルを崩すことを嫌がるんだ」

「嫌がるって…それじゃ、うまくいかないじゃん」

「じゃあ進言してみ。何言ってもだめだから」

「…」

「あいつらのやりたい事はたぶんボランティアを成功させる事じゃないだよ」

「…何となくわかるかも。あの人たちはたぶんあの議論を楽しんでるんだよね」

「たぶんな。ミスチル風に言う意識高そうな話をして、自分が高尚な人種になった気になってるだけだ」

「これヤバイよね…」

「ああ…どうにかしなきゃや確実に失敗する」

「どうにかしなきゃか…」

今日比企谷君が彼らを説得してたのを見てたけど聞く耳をまったく持たない。きつと説得は無理。ならどうするか。

「玉繩つて人に個人的に意見しに行く?」

「だめだ。あいつはリーダー面してるが責任を取りたくないんだ。自分一人で何かを決めることに抵抗を覚えてる」

「責任を取りたくないリーダー…」

「今現在俺達に必要なのは責任を取れる責任者かもな」

「…」

何となく会議が進まない理由が…根元が分かった。

「このままじゃ共倒れ、うちの学校もやられる。てか実際かなり巻き込まれてる」

「生徒会の人達、なんだか一色さんのこと頼ってないよね」

「新生徒会が発足してはじめての仕事で倒れたからな。リーダーの頼りなさが出ちまってる」

「現状として比企谷君が全体の仕事を統括してるもんね」

「ああ。最近じゃ一色に声をかけずに俺にかけてくるようになってきた。これはまず

い。一色の代わりをするのは奉仕部としての活動理念に背くことだからな」

「あつちもこつちもどうにかしなきゃならないのか…ああもう！もういつそのこと海浜と総武で別々に出し物やらない!？」

「それ良い考えだな。俺も出来ればそうしたいんだけどな」

「まあ普通に考えたら無理だよね…」

「とにかく明日から愛川も書類作りと手伝ってくれ。文化祭実行委員を経験しただけあつてかなり事務処理能力は高いしな。お前が一人増えるだけでかなり効率が上がる」

「う、うん。がんばる」

とりえず私は書類整理とかして…それをやりつつ比企谷君のサポートをして…

よーし！頑張らなきゃ！

## 29 話

「エナジーを無駄にしないためにもここはロジカルシンキングを大切にしよう。とにかくインポートな事から議論しようか」

あれから二日経ったけど相変わらず会議は進まないでいる。比企谷君が少しずつ意見してはいるんだがまったく聞く耳を持ってくれない。

「…」

私かというと会長以外の生徒会の面々とあつちから回されて膨大な書類関係の仕事をやっている。このやつてもやつても減らないどころか増える感じが懐かしい。

私はこのまま事務処理だけをしてるだけで良いんだろうか？

そんなことを考えながらただただペンを走らせていた。

「ん？もうこんな時間か。今日はここまでにしよう」

こうして今日も無駄な会議を終わりを告げ、皆がちらほらと帰り支度を始める。

「はあ…」

「比企谷君」

比企谷君はと言うと顔から焦りと疲れがにじみ出ていた。

私がクリスマススイベントに参加して少しは回復してたのにまたこんな顔に戻ってしまっていた。

今のままじゃ…今やつてる作業だけじゃやっぱりだめなんだ。

「比企谷君」

「あ、愛川か。悪いな、すぐ支度する」

「…ねえ」

「どした？」

「比企谷君はどうするのがベストだ思ってる？」

「どうするのが？そうだな…」

少し考える素振りを見せながら比企谷君はすぐに答えを出す。

「総武高校と海浜高校、別々に出し物をするのがベストだと思う」

「別々に…なるほど」

確かにこの足の引っ張り合いを止めるにはそれしかないかも。それにどちらかが転けても最悪もう片方が成功すればなんとか面目は守られるからね。

「私…やってみるよ」

「は？何を？」

「なんとかして見せる」



「…どうやって?」

「実は前から考えてた策があるんだ」

「策?」

「うん。名付けて民主主義的大作戦!これは比企谷君じゃ、思い付いても絶対に成功しないであろう策だよ」

にやりと自信ありげな笑みが溢れる。

あれ?私こんなに自信家だっけ?

「民主主義的か…なるほど」

「で、どうする? やっちゃってもいい?」

比企谷君はしばらく考え込んでから呟くように話しかけてくる。

「…頼む。他に選択肢はないしな」

「うん!まかせて!」

—————

月曜日の放課後。クリスマスイベント準備時間になる。今回の会議も相変わらず終わる目処がたたずに進む。会議は進むんだけどまた新しいことをやろうとすることからやることが減らない。むしろ増えるまである。

はあ…比企谷君じゃないけど働くのって辛い。

「そろそろ一回休憩にしようか」

「っ！」

海浜の会長の一声で皆がわらわらと散らばり始める。海浜の生徒会の面々は何やら彼らだけで話し合いを始め、ヘルプの面々は彼等だけで雑談を始めた。

き、きた……！

会議の休憩。私は今やっている作業を切り上げ1つのグループに近づく。

作戦開始だ。

「折本」

「ん？愛川じゃん。どしたの？」

「ちよつとお願ひしたいことあるんだけど……良い？」

「お願ひ？どんな？」

「小学生たちの世話を数日手伝ってほしいんだ」

「小学生の世話？」

「うん。クリスマスイベントまで時間がなくなってきたでしょ？うちの生徒会の人達も出来るだけ会議に出席させたくてさ」

「あー、確かにそつちの生徒会の人々が毎回世話してるから出れない人いるもんね」

「そうなんだよ。それで……頼めるかな？」

「んーっ…」

折本は考える仕草を取り、動かなくなる。

しかしじつと見るとやっぱり折本も可愛いよなあ…まあ比企谷君に興味無さげだし警戒する必要はないか。

「分かった。手伝うよ」

「えっ、ほんとに?」

「こ、こんなにあっさりとおーケー出すの?」

「うん。まかせて」

「ありがとう!助かるよ!」

「気にしない気にしない。じゃあさっそく行こうか」

「うん!」

—————

小学生たちの世話を終え、折本にはそのまま流れでこっちの雑務も手伝ってもらった。

意外な事に折本は雑務をめちゃくちゃ真面目にこなしていた。

もつと面倒くさがると思ってたんだけど…

「ん？もうこんな時間か…今日はここまでだね」

海浜の会長の一声で本日の作業は終わり、帰宅時間。当然のごとく今回も会議で進展は無かった。

「じゃあね、比企谷君！」

「おう」

「じゃ、行こっか。折本」

「そだねー」

今後、どうするか話そうと提案し、折本と帰宅することになった。ご存知のとおり、私と折本は同じ中学で家も近いたため不自然なことは無かった。

「いやー！すっかり疲れたよー！」

「集中して手伝ってくれたもんね。ありがとう」

「いやいや、今までそっちばかりやってたからこれくらいはねー」

少しづつが悪そうにしながらハニカむ。今までこちらに作業が重点的に来ていたことに少し罪恶感を抱いていたのだろうか。

「うん。にしても仕事ってやってもいっぱい増えるんだよね」

「それある！あたしも今日雑用やってて仕事減らないなーって思ってた！」

「そうだよ。それなのに会議はまるで進まない」

「えっ？進んでるから雑務が増えるんじゃないの？」

「私は進んでないと思う。あれやこれや新しいことをやろうとするから、現状から動けないでやるが増えているんだよ。海浜の会長さんの否定しないって方針がこの状況を生んだんだろうね」

例えるならポケモンで凶鑑を埋めるために次のジムに行かずに草むらを歩き回るような物だ。プレイ時間は増えても、手持ちが増えても結局ストーリーは進めていない。

「このままじゃ…正直ヤバイと思う」

「…」

「でも私は雑務を頑張ってやるしかないんだけどね」

「じゃ、明日もあたし手伝うよ」

「うん。ありがとう」

—————

翌日の火曜日。本日も小学生たちの面倒を見終わり、折本にはそのままこっちの雑務も流れで手伝ってもらっている。

折本はたったの二日目なのにかなり作業効率が上がっている。彼女、実はかなり有能なのかもしれない。

「クリスマスらしさを取り入れたいよね」

「ツリーだけじゃ物足りないよね…そうだ！ケーキを焼くって言うのはどうだい！」

「いいね！」

「小学生たちが焼いたりしたら皆にも喜ばれるんじゃないかな？」

「Nice！」

「ちよつと待ってくれ」

「ん？どうかしたのかな？」

「ケーキを焼くとしてそれを食べさせるのには問題がある。コストもかかるし、小学生に作り方も教えなきゃならん。何よりも衛生面で保護者とかの参加者の信頼を得なきゃならない。本当に清潔な環境で作られているのか、害はないのか示さなきゃならん」

いつものように比企谷君はこれ以上はダメだと阻止しようと試みる。

ちらつと隣に座る折本を見ると、作業中の手を止めてこのやり取りを見ていた。

「ふむ…確かに」

「今からそんなことをやってる時間なんてないぞ。ケーキを作るのは現実的じゃない」

「のんのん。何回も言うがそうやってすぐ否定するのはナンセンスだ」

「何回も言うが時間がないんだ」

「わかつてる。だからどうしたらなんとかなるか、それを話し合おう」

「…でも」

「よし！じゃあ今からどうやったらケーキを出し物として出来るか話し合おうか」

「…はあ」

総武高校の書記ちゃんから小さなため息が漏れる。折本は依然とやり取りを見つめていた。

「参加者の説得するのはこの施設を使わせてもらうって事と担当の先生をつけるって事で説得しよう。施設は市が管理してるから信用できるだろうしね。」

「うん。まずはそれで行こうか。異議のある人いるかな？」

「…」

「よし。じゃあその説得役なんだけど…総武高校の方でお願いできるかな？」

「…はい！わかりました！」

「っ」

また仕事が増えるのか…分かってましたけどね。そんな顔を総武高校の面々はする。だが今回はそれだけではない。

そんな顔をしている人がもう一人。

「…」

そう折本だ。

翌日、水曜日。本日は小学生は来ない日なので最初から事務作業に勤しむ。  
うわあ…なんて量なんだ。折本早く来てくれないかな…。

「愛川、お待たせ」

ぞろぞろと海浜の助っ人組を連れて折本が到着する。

「折本。待つてたよ。今日もよろしくね」

さーって仕事仕事つと…つてあれ？なんか取り巻きたちが席につかないんだが。

「あんな愛川…こいつらも手伝うことになった。仕事を割り振つてよ」

なんと折本の口から出たのは私の予想してなかった素敵な言葉だった。

「え？…良いの？」

「良いの良いの。現状は皆に伝えたからさ。そつちの生徒会の人を会議に参加させるのにはこれしかないでしょ。人出が足りないんだし。」

「折本…ありがと！じゃあやろうか！」

—————

「次になにかある人はいるかな？」

「この前のケーキの件だけ取り合えずうちの学校の平塚先生に監修してもらえる事になりました。参加者の説得の方はこれから行くつもりです」



「そっか！よろしくね！」

手伝いが増えたことでこちらの生徒会の人達が発言できる回数が増えている。やっぱ人数が対等になることがかなり大きいんだと思う。それでも会議は進まないんだけどね。

ちなみに今日もあつちの方針に比企谷君が何回か異論を唱えたが全部否定されていた。否定しないんじゃないのかよ本当に。

「じゃあ今日はここまでにしようか！お疲れさまです！」

すつかすかの会議が今日も終わりに変える準備を整え、比企谷君と帰路につく。

「疲れたねー。それにかなり寒いし！」

「ああ久しぶりにあったかーいマツカンが飲みたいな」

「だねえ。買ってこようか！」

「そうだな」

「…っ？比企谷、あそこの自販機の前にいるのって…」

しばらく漕ぐと見慣れた海浜の制服にパーマの髪の子の女の子が一人で待っていた。

「お、折本!?!なにしてるの!?!」

「比企谷に聞きたいことがあってさ、待ってたんだよ」

「俺にか？」

こくんと真剣な顔でうなずく。

表情から何の話かは何もなく予想がついてた。

「それで…何を聞きたい?」

「比企谷はさ…どうなるのが一番良い結果に繋がると思う?」

どうなるのがベストか…それは私が以前比企谷君に聞いた質問と同じものだった。

比企谷君にアイコンタクトを送るとわかっていると云う風に頷く。

「俺は海浜と総武が各々で違う演目をやるのが良いと思ってる。今の状態だとお互いの良いところを殺しあってるからな」

「良いところを?」

「ああ。先ずうちの会長の一色だが年下であることが理由で完全にそちららに対してイエスマンになってしまってる。だからこちらの生徒会に大量の雑務が流れてくるんだ」

「うん」

「そうなるるとこちらの生徒会の面々は雑務に追われて意見を言う機械がかなり減る。これでは海浜の意見を採用するだけになってしまい、自分達の意見が反映されない」

「確かにそうだね」

「次に海浜だがこちらに雑務をほとんど投げているから作業にどれだけ時間が取られるかが分かっている。こちらに投げた作業はきっちりこなしているから、簡単に出来る

もんだと勘違いしてるんだと思う。大抵の仕事はすぐに終わらせるだろうと勘違いをし、無尽蔵に意見を出そうとしたりする。過去にイベントをやった経験もないからそう言うところの抑えが効いてない」

それだけが原因って訳じゃないと思うけどね。

「これらを解決するには別々にやるのがベストだ。海浜がいなければ総武の人達は意見が言えて自分達の思うようにやれる。総武が居なければ海浜の人達は雑務にかかる時間を身をもつて知れて加減ができる」

「なるほど」

「分かってくれたか」

「うん！確かに比企谷の言う通りかもねー！」

もう完全に折本はこちら側に来ただろう。海浜の助っ人組の主要人物を抱き込めた今なら…

「私もそう思うよ。だからね…明日意見してみようと思うんだ。バラバラでやろうって」

攻めるなら今だ！

———

翌日の木曜日、小学生は本日も学校の都合で来ない。好都合だ。

「それじゃあ今日の会議を始めようか」

今日は皆にも現状を知ってもらおうと意見して会議中の雑務は一切禁止。集中して会議することになっている。

「ちよつと意見なだけどき！クリスマスだしjazzbandのプロに依頼できないかな？」

「jazzかー。いいねそれ！」

始まった。

人数差がもとに戻って何か言いたいこと言いやすくなったのかな？昨日よりもあちの人達は口が回るよ。折本の『それあるー！』が無くなっただけまだ少しまじだけどね。

「待ってくれ。依頼するあてはあるのか？」

「これから探すんだよ」

「そんな時間はどなにある？費用は？」

「そこをどうするか、それをこれから話し合うんだよ」

「それじゃあ間に合わない」

「ほんとに君はしつこいな。否定から入っちゃダメだよ。他のみんなもそう思ってるはずだよ」

海浜の会長はちらつと自分等の生徒会の面々を見るとみんなそうだそうだ！つと言わんばかりの表情を作っていた。

この人達は何を考えているんだ。いや、なにも考えてないんだらうか。もういいや。ここでやろう。

「はい。意見良いですか？」

私は万を辞して高らかと手をあげる。反撃開始だ。

「ん？君は確か…愛川さんだったかな？」

「私はこの会議の方針は間違ってると思う。このままじゃ間に合わない。絶対に」  
「だからそれをどうするか話し合うんだよ」

「その時間はどこにあるの？」

「そ、それは…」

「私はあなたがしつかりと責任を持って出来ることはやる。無理なら却下をすべきだと思おう」

「ブレインストーミングは皆で話し合うものなんだ。今さらそれを否定するなんてナンセンスだよ？」

「方針は変える気は無いんですか？」

「もちろん」

「ここまで言ってもやつぱりダメか。」

「なら私は海浜と総武とで別々の題目をやることを提案します」

一色さん、比企谷君と折本以外の驚きの視線が私に集まる。

一色さんには事前にしつかりと伝えてあるからまあ驚かないよね。

「そんなのはダメだよ。この合同の目的が合同でやることでグループシナジーを生むことなんだからさ」

「そのシナジーは生まれてないんじゃないかな?」

「確かに。それある」

「えっ?」

「あたしも上手く協力できないと思うな」

海浜の面々はそろって折本の顔を見つめる。予想外のところからの攻撃。これが一番効くんだよね。

そしてこの攻撃を期に海浜の助っ人組も会長に不振な目を向け始めた。

人数差は逆転した。ここで畳み掛ける!

「で、でもこれから生まれると思うんだよ!」

今まで動揺が少なかった海浜の会長も焦りを隠しきれない。あと一押しで行ける

!

「そんな確証どこにも無いじゃない」

「そんなことっ!…一色さん!一色さんはどう思う?」

「わ、私ですか!?うーん…そんなことないようなあるような」

「っ!」

一色さんを狙われた!?事前に伝えたとはいえ彼女は今回の作戦で立ち向かうだけの準備をしておかなかったし…狙われたのは痛い。

「ほら!一色さんだって可能性を感じてるんじゃないか!」

「可能性があるっただけで賭けるのは危険だと思う」

「一色さんは今の形式で構わないだろ?」

「うーん。確かに協力することも大切だと思いますけど…せいこ…」

「ほらね!」

一色さんが言い終わる前に強引に声を上げる。

形成が逆転したと言わんばかりに余裕の表情を見せる。

「そもそもこれは生徒会同士の合同のイベントなんだよ?両生徒会長が納得するのに助っ人がそんなに引つ掻き回さないでほしいな。ね、一色さん?」

「…あはは—」

一色さんは自分の発言で責任が生じないようにしてる。不味い流れだ。

「…じゃあもしも失敗したらどうするつもりだ」

比企谷君が援護をはじめめる。このままじゃヤバイ。

「失敗しないように話し合ってるんだ」

「資金が…時間が足りなくなるのは話し合いじゃどうにもならない」

「…1回さ、時間を置こう。お互い冷静になるまでさ。今日は早いけどこれで解散にしよう。それで来週辺りに続きをやろうか」

やばい！逃げられる！この機会を逃したらもうだめだ！

「時間がないんだよ。今日ここで決めよう」

「他のみんなの意見も聞きたい。でもみんないきなりでビックリしたはずだよ。だから1回クールダウンしなくちゃダメだと思うんだ。一色さんもいいね？」

「はい。お任せします」

「というわけだから今日は解散！詳しい日取りはあとで連絡をするから。次はみんなにも意見を聞くからね！」

「…」

ダメだった…。

「愛川…」

「比企谷君。だめだったよ。あと一押しだったんだけどな」



「一色をしつかりとこちら側につけていたら…確実に成功しただろうな。あいつにこの作戦伝えたの今日だし仕方ないっちゃ仕方ないかもな」

「だよね…昨日やろうって決めて今日決行だもんね。早すぎたかあ」

「…」

「まあ仕方ない！次にみんなの意見を聞くときに何とかしようか！」

「…そうだな」

くよくよしてゐる時間なんてない。次は月曜に向けて作戦もまた練らなきゃ…どうしようか。

「愛川」

「ん？なに？」

「先に帰っててくれ」

「え？なんで？」

「用事があるんだ。ケンタにいかなきゃならん」

「じゃあ私も…」

「いや、一人で良い」

「う、うん。わかった」

「ありがとな。じゃあまた今度」

「またね」

比企谷君はそう言うのと駅の方に進んでいった。

なんだったのかな…考え事でもしたいのか。そんなことを思いながら帰路につく。

その夜に比企谷くんから『次の会議は任せて欲しい』とのメールが届いた。

## 30話

寒空の下、冷たい風が顔に当たるのを感じながら俺は駅に向かって自転車を漕いでいる。

『比企谷君。だめだったよ』

そう言う愛川の顔が、声が何度も頭をよぎる。

くそっ、俺は何やってたんだ。

一色への連絡だつて俺がもつとしつかりしてればこんなことにはならなかった。確実にこの作戦は成功したはずだ。それに加勢に入るのも遅かった。ほぼ逃げられるのが確定してから加勢してたんじゃ間に合うわけないだろうっ。

何やってんだよほんと。愛川は自分の事でも無いのに……俺なんかのために一生懸命やってたのに俺は……俺は！

『比企谷君。だめだったよ。』

「っ」

考え事をしていたせいかすぐに駅前のケンタについてしまった。さっさと予約をしてケンタから一番近い出口へ向かう。すると下りのエスカレーターに見知った顔を見

つけた。すぐに人混みに混ざることができたなら良かったのだがすぐにその人物と目があったてしまい、見なかったことには出来そうにはない。

「よお」

「…こんばんは」

黒髪のきびきびと歩く少女。雪ノ下と出会ってしまった。

雪ノ下も出るらしく同じ出口に向かって歩く。店を出てすぐの広場で雪ノ下は足を止めた。

「あー、面白い物、か？」

よせば良いのに最近癖になった中身のない言葉が口から出てくる。

「ええ。…そういうあなたこそ、こんな時間にどうしたの？」

「俺もまあいろいろな」

「そう…」

雪ノ下は少し間を開けてからゆっくりと語りかけてくる。

「…一色さんの手伝いをしてるんでしょ？」

「まあ…成り行きだな」

「わざわざ嘘までつかなくても、よかったのに」

「別に嘘なんかついてねえよ」

「…そうね、確かに嘘はついてないわ」

「その…黙ってたのは悪いとは思ってる」

「気にする事はないわ。あなたならきつと一人でも解決できるだろうし」

「そんなことはないだろ」

「これまでだつてそうだったじゃない」

「別に解決なんしてねえよ」

本当にそうだ。うやむやにすることや問題の先伸ばしは出来ても解決はさせることが出来ない。それに二人でも…愛川の力を借りても解決が出来ない。それどころが足を引つ張つてさえいる。

「一人でやれるのはお前も同じだろ」

「私は…違うわ」

俯いて口を引き結びコートの袖を握りしめる。その緩んだマフラーから覗く白い喉がこくりと動いた。こんな雪ノ下は見たことがなかった。そんな雪ノ下は絞り出すように言葉を紡ぐ。

「いつも、できているつもりで、わかっているつもりでいただけなもの」

それは誰のことを言っているのだろうか。自分のことか…それとも俺のことか…。

どっちでも同じだ。彼女の言葉は俺に突き刺さる。だから、何か言わなければと、考  
えてもまとまっていなくて口は開く。

「あんな、雪ノ下…」

どうした。いつものように言葉が出てこない。中身のない言葉でさえ。

「そうね、あなたには味方をしてくれる人が、一人いたわね」

「っ」

肩までかかった黒髪の少女の顔が頭にうかぶ。

彼女がいれば私たちの助けなんか要らない。そう言われてる気がした。

「それに一色さんと私たちがいるよりやりとりしやすいだろうし」

「…お前」

「部活、しばらく休んだら？ 私たちに気を遣ってるなら、それは不必要よ」

俺の言葉は雪ノ下の、いつもの落ち着いた声で遮った。

「別に気を遣ってなんかねえよ」

「ずっと遣ってるわ…あのとときからずっと」

消え入りそうな声を聞き逃さないように待っていたが続きの言葉は出てこないで、全  
く別のことを言った。

「けど、別にもう無理する必要なんて無いじゃない。それで壊れてしまうのなら、それま

でのものでしかない。違う？」

その問いかけに俺は何も答えられない。

それはきつと俺が信じていて、信じきれなかったものだ。こど雪ノ下は信じていた。うわべだけのものに意味を見いだせない。それは俺と彼女が共有していたであろう一つの信念。その信念を今も持つているだろうか。彼女から突き付けられた問いはきつと最後通牒だ。

その問いかけに俺は：答えられないでいる。

何も言えないでいる俺を雪ノ下の寂しげな瞳が見つめる。

「もう無理して来なくていいわ」

俺の沈黙が問いへの答えなのだど理解すると口を開いた。

優しく穏やかに、そして：儚げに。

—————

彼女が街へ姿を消してから俺は動けずにいた。どれくらいの時間がたっただろうか？

かなり時間が過ぎた気もするがそんなに経ってない気もする。

そんな中よしつと腰を上げ帰宅のために自転車に股がる。

愛川とのことに加えてまた自己嫌悪の材料が増えた。

俺は変わってしまったのだろうか？こんなものくだらないと、今まで上部だけの会話をしてきたやつらをバカにしてきた。だけどその上部だけ会話をしてまで壊したくない関係を持つてしまった。

「はあ」

ダメだな…ほんと。

車のあまり通らない公園前の道路を走っていると向かいから来た何やらすごそうなスポーツカーがクラクションを鳴らし、ゆっくりと俺の横に車をつけた。

え？もしかして俺？

俺…何かやらかしましたか？

「比企谷、こんなところでどうした？」

その車から降りてきたのは平塚先生だった。

「はあ、いま帰るとこなんすけど。先生こそどうしたんですか？」

「イベントまで一週間だろ？様子を见に行ったら今日はもう終わっててな。私も帰ろうとしていたところで君を見つけたんだ」

「なるほど」

「ふむ、ちょうど良い。現状を聞きたいし少し付き合いたまえ」

「はあ…少しなら」



「よし」

そう言うのと先生は目の前の自販機でコーヒを買ってほらつと投げてきた。暗いせいで危うく落としかけたがなんとか受けとる。

平塚先生は車に寄りかかり、煙草をふかしながら片手でコーヒを開けた。

「なんか、かつこいいつすね」

「かつこつけてるからな」

先生はニヤリとどや顔で答えてくる。

本当にその姿ははまって格好いい。そんな先生を見ているのが気恥ずかしくなつて暗い公園を見た。

犬の散歩をしてる男性やスーツ姿の女性が公園を歩いていた。

「どうかね、調子は」

どうやら本題に入ったようだ。その問いは何に対するものなのだろうか。まあさっきの会話からクリスマスイベントのことだろう。

「結構やばそうです」

「ふむ…」

ふーつと煙草を一吐きしてから俺に顔を向けた。

「何がやばい」

「何がつて…一概には」

「まあ話してみたまえ」

「はあ…それじゃあ…」

—————

「まあこんな感じですかね」

あらかた俺の考えを述べた。上手く言葉にできたかは分からないが平塚先生はふむと頷いた。

「…よく見ている。君は人の心理を読み取るのには長けているな」

そんなことはない。もしそうならもつと上手くやれるはずだ。そう返そうとすると平塚先生は指をたててそれを制す。

「けれど、感情は理解はしてない」

息が詰まった。こんなにも俺の核心をついたことば無いだろう。

「心理と感情は常にイコールな訳ではない。ときにまったく不合理に見える結論をだすのはそのせいだ。…だから君たちは間違えた答えをだす」

その通りだ。俺は人の気持ちを考えてたつもりでいたが

表層的なところしか見えていない。推測を事実として行動してきた。それは自己満

足と何が違うだろう。だけど…

「その通りですけど…それは考えても分かるもんじゃありませんか」

欲望や保身など負の感情は表情や状況から想像しやすい。しかし損得を抜きにした、時にまったく不合理だと思われる行動は分かりにくいものだ。いままでそれだと思ってきたものは勘違いであつたことがほとんどだつた。

今まで間違い続けてきたんだ。

「わからないか…今まさに君の近くには不合理だが行動を起こしている者が居るんじゃないか？」

「俺の近くに…」

「愛川…彼女は自分のやりたいことのために突つ走るまつすぐな娘だよ」

「やりたいこと？今回は俺が頼んでやつてもらつてるんですよ？」

彼女は前向きにクリスマススイベントを手伝いたいなんて思う人間ではないはずだ。

「そこだよ。そう言うところをもつと考えてみるんだ」

煙草を吸うのを止め目をしっかりと見て俺に語りかけてくる。

「わからないなら考えるんだ。今までよりももつとだ。計算しか出来ないなら計算し尽くせ。全部の答えを出して消去法で一つに絞るんだ。残つたもの、きつとそれが君の答えだ」

熱い眼差しだ。だけど言ってることはめっちゃくちゃ。

計算しつくせ…：か…。

それはきつと効率が恐ろしく悪い方法なんだろう。しかも答えが出るかも分からない。  
い。

驚きと呆れで言葉が出てこない。

「…それでも分かるとは限らないんじゃないですかね」

「なら答えが間違ってるか、計算のやり残しがあるかだ。そうしたら一から計算のやり直しだな」

先生はすこしおどけてしれつと口にした。あまりに無茶苦茶な事をあまりに当たり前のように言うもんだからついつい笑いが出てしまった。

「無茶苦茶すぎですよ」

「バカ者。人の心が計算で導き出せるなら人類はもつと高度な人工知能を作り出してやる」  
「や」

熱く語っていたが声は優しく感じた。

答えが出るかも分からない計算を答えが出るまでやるのか…寒気がするほどおそろしいんだろうな。

そんな事をさとした俺の様子を見るとくすりと先生はわらった。

「まあ私も計算の失敗ばかりしてるから結婚できないんだろうがな。この前も友人の結婚式で…」

心なしか涙目になつてる先生は自虐的な笑みを浮かべる。

いつもなら茶化して終わりなんだが今はそんな気分じゃない。

「そりや相手に見る目がないんですよ」

「へ？な、なんだいきなり」

こんなにもかっこよくて他人を思いやれる人がもてないなんて俺には考えられない。冗談じゃなくあと十年はやく生まれていたらたぶん心底惚れていただろう。

「ま、まあいい。礼といつてはなんだがヒントをやろう」

咳払いをして再びピリツとした空気に戻る。

「考えるときは考えるポイントを間違えるな」

「はあ…」

「傷つけないためにはどうすればいいか？を考えるんじゃない。なぜ傷つけないかを考えるんだ」

「なぜ…傷つけないか…」

「その答えは簡単だ。大切だからだ」

大切だから…か…。それは選挙の時に少しは自覚してたつもりだったんだが…

「でもね、傷つけないでいるなんて無理なんだ。少しでも関わりをもったら、自分が存在することで無自覚に傷つけてしまう。どうでも良い相手なら傷ついたことにも気付かない。必要なのは自覚だ。大切だからこそ傷つけてしまったと感じる」

言い終わると煙草に火をつけふーっと一息つく。そしてもう一度俺を見つめてきた。その表情はとて優しく穏やかなものだった。

「誰かを大切にするには、その人を傷つける覚悟をすることだよ」

そう言うとき先生はコーヒーをぐいっと飲み干しにつこりと微笑んだ。

「ヒントはここまで」

先生の言っていることは今までの俺の人生には無かったものだ。だけど俺が求めていたものは…それかもしれない。

「お互いが思いあっているからこそ手に入らないこともあら。だがそれは悲しむべき事ではなく喜ぶべきことだ」

「…それってきつくはないですか」

「きついな」

言うとき先生は俺に一步近づき力強く語りかけてくる。

「でも、君ならできる。私がそうだったからな」

勝ち気な表情な先生を見ると、昔色々あったんだろうと想像できた。何があったかは

分らないし聞いて良いかも分らない。でもいつかそれを教えてくれる日が来るのを楽しみにしている自分に気づき、気恥ずかしくなつてつい憎まれ口が出てしまう。

「自分でできたからつて俺ができるはずつていうのは傲慢ですよ」

「…かわいくないやつめ」

がしがしと頭を引つ掻き回してくる。

「…そうだな、正直に言うとなぶん君でなくても本当はいいんだ。この先雪ノ下自身が変わるかもしれないし、彼女に近づき理解してくれる人が現れるかもしれない。それは由比ヶ浜にも言えることだ」

「いつか、ですか」

「ああ。今がすべてと君たちは感じるかもしれないがそんなことはない。この先の人生は長いんだ」

確かにそうかもしれない。いや、きつとそうなのだろう。俺は雪ノ下や、由比ヶ浜の長い人生の欠片に関わつてただけなのだから。

「…でも私はそれが君であつてほしいと思つてる」

「いや…そういわれてもちよつと」

言いかけた途端肩を優しく掴まれた。

「この時間がすべてではない。だけど今しか出来ないこともある。…比企谷。今だ…今

なんだよ」

濡れた瞳から目が離せない。いつのまにか強く握られていた肩も動かすことが出来ない。

「考えてもがき苦しみ、あがいて悩め。例えみつともなくてもな。じやなきや本物じゃない」

そう言い終わると肩を離し、また俺から距離をとった。

俺の胸のなかには今の平塚先生の話で溜まった言葉がたくさん蠢いている。けどこれは今吐き出すべき言葉じゃない。だから今は別のことを言おう。

「…苦しんだからって本物とは限らないでしょ」

「本当にかわいくないやつだな」

かるく俺を小突くと、ははっとなんか楽しそうに笑った。

「…さて、帰るとするかな。君も気を付けて帰るんだぞ？」

「うす」

そう言うとうち先生の車は夜の街へと消えていった。

—————

俺はリビングのソファにもたれかかりながら考え事をした。そして俺の動いていた理由を《欲しいものがあつたから》と結論付けた。



俺が求めていたものが彼女たちを通して見えた気がした、触れた気がしたから。だから、俺はまちがえた。ならば今度は手段を考えよう。

しかしどうしたらいいかわからない……いくら考えても手段も作戦も何一つ思い付かない。

だからきつとこれが俺の答えなんだろう。

そう思った時に俺は携帯を手にとった。

俺が特別に感じた人の一人、愛川に今度は俺の番だとメールを送る。

メールを打つてるときに愛川の事を考えていたが1つ違和感を感じた。

雪ノ下や、由比ヶ浜と同じく俺は愛川にも俺が求めていたものを感じたが奉仕部の二人とはすこし違う。

何か特別というか……違うものを感じていた。

それは彼女に対しては別のものを欲しがっているんだろうか。

それとも根本的に別の問題なんだろうか。

俺が彼女を通して見たものは特別違うだけなのか。それとも奉仕部の二人が特別なのか。

戸塚と……なんか悔しいが材木座に対しても俺の求めていたものを感じるがそれは奉仕部の二人に近い感覚だ。この二人も愛川とは違う。

愛川は何が違うのか。その疑問を次は考えていかなくちやな…。どうせ明日は休みだし時間はたくさんあるさ。いろんな事をじっくりと考えていこう。そうして俺は眠れない夜を過ごして行つた。

## 31話

あのメールが来た翌日、私愛川花菜は2年F組の教室に向かっている。

その理由は昨晚、比企谷君から来た『次の会議は任せて欲しい』というメールについて聞きたいから。

何をどうするつもりなのか、どんな案なのか、昨日は気になって仕方なかった。そして比企谷君は本当に大丈夫なのか気になってしまう自分もいる。

以前別れたときの彼の顔は沈んでいた。

あんな状態の彼はいったい何を考えるのか、考えられた答えは私の大好きな彼の答えとして納得が出来るものなんだろうか。夏休みのボランティアや文化祭の時のような彼にしか思い付かないような奇策を思い付いたのだろうか。私をワクワクさせてくれるなにかを考えているのかな。

まあ私が納得しようとしなからうといい案ならなんの問題もないんだけどね。

とにかく私は今現在弱っている情けない状態の彼で大丈夫なのかと心配なのだ。

「あっ」

F組につくと扉の前には最近よく見かける亜麻色の髪のをしピンクのカーディガ

ンを萌え袖にしている少女を発見した。

「こんにちは、一色さん」

「え…あ！愛川先輩！こんにちはです！」

「ふあ…相変わらずあざといなあ…。私もこういう技術磨いた方がいいのかな？」

「こんなとこに来てどうしたの？」

「先輩や愛川先輩に次の会合は明日の五時からっていう連絡をしに来たんですよー」

「そうなんだ…なんか次は来週にするみたいいな事いつてなかったけ？」

「本当はそうしたかったらしいんですけどー。うちの副会長がさすがにそれは不味いと、時間が全然無いからってあちら側に頑張つて進言しまして…」

「なるほど…」

副会長頑張つたね…来週にするとか普通に考えたらあり得ないし。

一色さんはそうなんですよお…と言つた後にムスツとした表情に変わり続けた。

「でも先輩もう教室に居ないんですよ？信じられないですよねー」

「ありやま。今日は会合ないって知ってるしもしかしたら部室に行つたのかな…」

「あ…：やつぱりそうですかね…」

「私が伝えておこうか？ちようど比企谷君に聞きたいことあるから探すし」

「いえいえ。私も一緒にいきますよ」

「わかった。じゃあいこうか」

特別棟の人気の無い寒々しさがとても辛い。血流がおそくなり、体温が低下していくのを感じる。

強い風は窓を打ち付け、運動部の声はここまでしつかり届くほどよく出ていた。

一色さんと寒いねえなんて話をしながら歩いているとあの教室が見えてきた。

「やつと着きましたねえ。ここちよつと遠いですよ」

むーつと頬を膨らませてそう漏らす一色さん。

私はそれをよそにノックをしようと思拳をドアの前に持つてきた。

『一色の言つてたクリスマススイベントなんだが、あれが想像以上にやばくて、手伝つてもらいたいんだが…』

…比企谷君の声？

ノックしようとして握つた拳がドアの前で固まる。

「愛川先輩…この声って」

「うん。たぶん比企谷君だよね」

「なんか話してますね」

「だね。タイミングを見て私たちも入ろうか」

「そうですね」

どうやら奉仕部に助けを求めららしい。

…これが比企谷君の解決案？

「…」

きつと二人が参加することで状況がよくなる方法があるんだよね。なら私も手伝わなきゃ。

『あなた一人の責任でそうなっているなら、あなた一人で解決すべき問題でしょう』

『…だな。悪い。忘れてくれ』

おやおや…説得出来そうにない？旗色悪いですなあ。ここは私がいつて援護した方が良いかな？

一色さんの顔をちらつと見ると彼女もこちらを見て無言で頷いた。じゃあいきますか。

『待って』

その一言でノックしようとしていた拳はまたピタリと止まった。

『そうじゃないよ。なんで、なんでそういうことになるの？おかしいよ』

由比ヶ浜結衣。三人目の奉仕部にして他の二人とは決定的に違う存在。

彼女の紡ぐ言葉はとても拙く、抽象的な言葉が多い。でもその言葉には今までの思い

が乗せられていた。一つ一つの言葉は第三者であるはずの私の心にまで届いている。

『ゆきのんの言ってること、ちよつとずるいと思う』

『今、それを言うのね。…あなたも、卑怯だわ』

雪乃ちゃんも黙っておらず今まで言いたかったことであろう言葉を話始めた。自分の思っていたことを。

雪乃ちゃんはこの感じ。自分が正しいと思ってることを言う姿勢が懐かしい。最近の彼女は今あるものを壊さないように慎重に言葉を選び余計なことは言わないといった印象が多かった。

しかし彼女は…ほんの少しだけだけど戻ってきた。

『でも、言われてもわかんねえことだつてあるだろ』

二人の言葉に比企谷君も参加する。

比企谷の話す言葉は徐々に震えてきて弱々しくなっていく。自分の本心をさらけ出して言葉にしているんだろう。

彼の言葉を聞くと胸がギョツと苦しくなり視界は少しボヤけてる。

彼の言葉に意識が釘つけになる。なにか他の事を考える意識はとつくに消え失せ中の会話以外の音は一切感じなくなった。

『俺は…それでも、俺は…俺は、本物が欲しい』

震える声で、中々発することのできなかつた言葉。

それは支離滅裂で理性の塊である彼の言葉とはとても思えないものだった。

その彼の言葉を聞いた私は扉の前から一步も動けずに固まってしまっていた。

頭の中では何度も何度も彼の言葉が行き交っている。

『私には…わからないわ』

雪乃ちゃんはそう言うのと扉を開けて出てきた。

「あつ…」

「っ！」

私と一瞬目が合うがそのまま上へ向かって走って行ってしまった。

雪乃ちゃん…泣いてた…。

『一人で歩けるからいい。行くぞ』

ガチャンと勢いよく扉が開けられるとそこには目が潤んだ彼が驚いた目で私を見た。

潤んだ目の回りは赤くなっていて、なかで彼がどんな顔をしていたのかなんとなく分

かった。

「比企谷君…」

「愛川さんというはちゃん？ごめん、またあとでね」

由比ヶ浜さんがそう断りを入れると比企谷君もハツとなり駆け出そうとしている。



「せ、先輩！今日会合休みですから！それを言いには…。あ、あと！」  
「ああ、わかった」

そう言つてこつちも向かずに行こうとするので腕をつかみ制止した。すると何事かと比企谷君が振り向く。

「雪乃ちゃんは上に行つたよ」

「悪い。たすかる」

私がそう助言すると比企谷君は由比ヶ浜さんと上へ向かつて駆け出して行つた。

その後ろ姿をボーッと眺めていると一色さんがちよんちよんと秘事をつついてくる。  
あざとくね。

「良いんですか？雪ノ下先輩の居場所教えて」

「良いに決まつてるじゃん。あんな状態の雪乃ちゃん放つておけないよ」

「そうですか…」

そこから若干の沈黙が流れる。頭のなかがちやごちやしちやつてまとまらない。

それはきつと一色さんもそうなんだろう。

「私…これからテニス部に行くよ」

「ですね…私もサッカー部行きます」

このままここにいても埒があかないと二人とも部活動に参加した。

テニスをしながらも『本物』について思考が止むことは無かった。

—————

「はあ…なんか疲れたあ」

部活終了後、冷たいサドルに股がり帰宅開始。いつもの何倍も疲労感を感じている。原因ははつきりしている。アホ毛に死んだ目をした猫背の生徒の言葉だ。

まったく…また比企谷君の事で頭が一杯だよ。どんだけ大好きなのさ私は！

そう心のなかで冗談をいいながらも未だにあの言葉について思考は止まらない。

そんな中一つ目の角を曲がると黄色と茶色がプリントされている缶を片手にこちらを見つめる一人の男子生徒が居た。

「えっ?」

「…よう」

「な、なんで居るの!?!」

あれ?一緒に帰る約束してたっけ!?

「なんでって…メール見てないのかよ…」

「メール?」

ケータイを確認すると確かに新着メールが一件来ていた。

内容を確認すると何時もの場所で終わったら待つてるとのことだ。

これは比企谷君からのお誘いメールか!?

このレアメールは取り合えず保護しておかなくては…。

いそいそとケータイを弄つてるとため息をはく音が聞こえてきた。

「寒いしはやくいこうぜ」

「う、うん。そうだね」

刺すような肌寒さを感じながら私たちは二人ならんで帰路を進む。

横を向くと昨日とは彼の顔つきが違う。

確かに疲労感があるがスッキリとしていて目に若干の輝きが見える気がする。

それは今まで過ごしたどの彼とも違う顔。

私を二人のおじさんから助けてくれた時とも違う顔。

夏休みのボランティアの時とも違う顔。

一緒にプールに行ったときとも違う顔。

文化祭の時とも違う顔。

修学旅行の時に悩んでいた時とも違う顔。

そして…

私が恋い焦がれた彼とは違う顔。

彼は変わった。

良い方が悪い方かは分からないけど彼は、はつきりと変わった。

そう思うと…。

この感覚は…どんな気持ちなんだろう…。

今の彼の顔を見ると温かく優しい気持ちになれる。でも今までとは何か少し違う感覚。今までドキドキしていた胸は落ち着いているがむず痒い。強ばり火照っていた頬は緩み口元も緩くなる。

私は分からない事だらけの現実に惑わされつつペダルを漕いで比企谷君の隣を走っていった。

## 32話

あの奉仕部での一件があつた日の翌日の放課後。

昨日の一件から一晩明けたけどまだ頭はスツキリとしていない。しかしお仕事があるためコミュニケーションセンターへ向かつていた。

昨日彼を見て感じたあの気持ちは…一晩経てば元に戻つてるのだろうか。

そもそもあの感情はなんなのか。

今日基子達にも相談したけどニヤニヤしてるだけでちゃんと答えてくれなかつた…。べ、別にのろけてる訳じゃないのに…。

答えのない問題に頭を悩ませていたら時間があつという間にすぎ、コミュニケーションターに到着した。そこには比企谷君の姿はまだ無く一色さんしかいなかった。

「おはよ、一色さん」

「あつ！愛川先輩！おはようございます！」

「はいいねえ」

「いえいえ…って先輩はまだなんですか？」

「みたいだね」

それから一色さんとちよくちよく他愛のない話をしながら比企谷君を待つ。

話のなかで時おり見せる彼女の表情は私と同じでなにか考えさせられてるものだった。きっと昨日の比企谷君の言葉に心動かされたのだろう。

こんなにも可愛い後輩にまで影響させるなんて……やっぱり比企谷君はとんでもない男だわ……困ったものねえ。

「よう。お待ちせ」

多くの（私も含めた）美少女を悩ませているとはまったく思っていないであろう男、比企谷八幡君が登場。

もちろんその後ろには奉仕部の二人もいる。

彼を見て感じるのはいやほやり下校途中に感じてたものと同じだ。

「じゃあ今日は事前に打合せした通りにやるから頼むな」  
「いえいえ、こちらこそよろしくです」

挨拶を済ませ今日の事を話している一色さんは自然と持っていたコンビニ袋を渡し、比企谷君はそれを受けとる。

その様子を見た奉仕部二人は固まっていた。

私も最初、えっ？ってなったからなあ……気持ちには分かるよ。

てか比企谷君またなんで二人が固まったのか原因が分かかってないな……あの顔は。



ほんと罪作りなやつだぜ。

—————

「予想以上ね…。ずっとああいうやりとりをしていたの？」

「…ああ」

進まない会議は大いに白熱し海浜メンバーは体力を消耗したらしく休憩がとられていた。

最初は二人に現状を実際に見てもらうために今まで通りの会議をした。雪乃ちゃんも由比ヶ浜さんも疲れた表情をしている。

まあそうだよ。私も同じ気持ちになったし慣れても辛いし。

「愛川さん、あなたこの状況を打開するきっかけを作ったそうね」

雪乃ちゃんが、私に近づき真剣な顔で聞いてくる。

「え？それって前回のあれのことかな？」

「ええ。比企谷君に聞いたわ」

「きっかけってほどじゃないと思うけどなあ…」

「それでも雰囲気が変わったのは事実でしょ…素直にすごいと思う」

「そ、そんなことないよお」

なんだか雪乃ちゃんに褒められると嬉しい。他の人に褒められるのとは全然ちがうな。

…まあでも失敗したけどね。

「たぶん私じゃ一人でなんてきかないわ」

「私にできたんだし雪乃ちゃんだって」

「いいえ。きつと無理よ」

「…?」

急にどうしたんだろう…なんか悲しそうな顔してるけど…

「あなたも私には無いものを持つてるのね…」

「え? 何て言ったの?」

「いえ、気にしないで」

何かボソツと呟いたけど…何て言ったんだろ?

「それで、どうしよつか?」

私たちの会話をよそに話し合いを進め始める。

まあ休憩時間だけだしはやめにやらなきやね。

「愛川。またお前の出番だ」

「え? 私?」

「ああ。前回と同じように海浜側に抗議してくれ。別々でやろうってな」  
「でも一回失敗してるじゃん。それで大丈夫なの？」

「ああ…大丈夫だ」

そう断言した彼の目は腐っていながらも自信があるように感じた。

ああ…やつぱり少し違うな…今までと…。

「わかった。じゃあやつてみるよ」

—————

20分ほどの休みを終えまた各々が会議の席につく。

「じゃあ会議を再開しようか」

にこやかに玉繩はそう宣言する。比企谷君をちらつと見ると小さく頷いた。

…じゃあいけますか。

「あの」

ぴんと手を挙げ玉繩を見据える。

「どうぞで」

「私は再度二校がバラバラの演目をやることを提案します」

海浜の面々はざわめき玉繩はやれやれと困った顔でこちらを見てくる。

いらつとききますね！

「それは前回で無しになつたじゃないか」

「何ですか？」

「前も言ったことだけどグループピナジーを生むことを目的として合同でやるんだからそれは適したmethodじゃないと思うんだよね」

「グループピナジー……。まだまだ経験不足の生徒会じゃこれを出すのつて厳しいと私は考えてます」

「確かにそうかもね。協力することでビジョンを共有することで催し物により一体感が出せると思うんだ。イメージ戦略の点で考えても、合同イベントの大枠は同じにした方が良いんじゃないかな」

「なんか前回に比べて饒舌になつたなあ……。あれか？」

「先輩とか他のメンバーと会議してこういつた結論が出たんだろ……。くそー！これ私に對しての対策して来てるよねこれ！」

「てか玉縄のどや顔がやはり腹立つなあ。」

「だとしてもリスクは高いよ」

「確かにそうかもしれないけど出来る可能性はある。いい方向に向かえるなら多少のリスクを負つてでもそれにオールベットするのもいいと思うんだ」

「それはあなた個人の意見ではないでしょうか」

「前回そちらの会長も肯定してくれたじゃないか。ね、一色さん」

キリツと決め顔で一色さんを見る玉縄。

「そのことなんですけどー。わたしも別々にやりたいなーって思ってるんですよー」

「えっ…?」

思わぬ反撃をくらい決め顔が崩れる。

「僕たち総武高校は今までの案から演劇と音楽の二部構成のイベントにしたいと思ってる」

副会長が一色さんに続き二部構成の詳細を伝える。

「比企谷君が生徒会の面々に何か言ったのかな？」

やけにみんな準備がいい。

一色さんもなんか凛々しく見えるし…。

「という感じなんだけど。どうかな？」

「うーん…考え方としてはありだと思っただけど…やっぱり二校合同であることに意味があると思うんだよね」

「そうかもですけどー」

玉縄と一色さん。二人のやり取りがはじまる。

このやりとりはやけに長くいくら話しても平行線のままだ。

いや、徐々にだけどこちらが優勢にはなってるのかな？海浜は奇襲食らって若干驚いてるみたいだし。

それにしてもしぶといなあ：あつ、一色さん舌打ちした。

イラついてますね：はいわかりますその気持ち。

完全に蚊帳外になったので遠くから眺めているとずっと一人の生徒の手が上がった。猫背でアホ毛が特徴のシルエツト。

そう、彼だ。

「…合同でやる必要ってあるか？」

平行線の討論をしている会議場でその空気を破る一言が出てくる。

会議が長くなり落ち着きを取り戻した玉繩はやれやれと首をふり答えた。

「それは合同でやることでグループシナジーを生んで、大きなイベントを」

「さつき愛川も言ってたろ。シナジーは生めない」

「生めないかもしれないけど、僅かでもかのうせ」

「可能性なんてない。シナジーなんかどこにもない。イベントを大きくって言ったって、このままだと大したことできないだろ。なのになんでまだ形にこだわるんだ？」

会議場は一瞬静まり返るとひそひそ話し声が聞こえ始める。

海浜のメンバーは比企谷君の言葉を受け納得の表情をする人が多く見られた。

これは前回折本を味方につけたときの副産物かな。そうじやなきやこうして和を乱した比企谷君や私に対してもつと冷ややかな視線が来るはずだしね。

「き、企画意図とずれてるし。それにコンセンサスはとれたたし、ブランドデザインの共有もできてたわけで…」

「…違うな。自分ではできると思ってる、思い上がっていたんだよ。だから、まちがえてもみとめられなかったんだ。自分の失敗を誤魔化したかったんだろ？そのために、策を弄した、言葉を弄した、言質をとって安心しようとした。まちがえたとき、誰かのせいにくらしたら楽だからな」

どこか自嘲気味に彼はそう発言をした。それはやはり彼の本心、心の中の言葉。だからなのだろうか、その言葉は聞き手の心に響く。

…  
こう、本心っていうか思ってることをここまで言うなんて…やっぱり変わったんだね…

私からほろりと小さな笑みが溢れた。

「そついうことじゃなくてさー、コミュニケーション不足だと思っただよね…」

「もう一度クールダウンの時間をとろうよ。やっぱり1日じゃ短かったんじゃないかな…」

そう海浜の生徒会の人たちは玉縄を援護した。また先送りにしようと、そう言ったのだ。

しかし今日はそういったことを許さない人がいる。

「ごっこ遊びがしたければ余所でやってもらえるかしら」

そう。皆さんご存じ雪ノ下雪乃ちゃんですね。

このあと雪乃ちゃんの言葉や由比ヶ浜さんのフォローもあり、二部構成の体制に切り替わることが決定した。

比企谷君と雪乃ちゃんが持ち前の能力で突っ走り由比ヶ浜さんがフォローする。

やっぱり良いチームだよね：

愚直な人がいて、ぐねんぐねんにひねくれ者がいて、周りを見れる常識人がいる。

完璧な布陣だ。

私の入り込む余地は無いくらいに。

私の入り込む余地は無いくらいに…。

—————



「やったねえー!」

「だな。まだまだ時間的にも厳しいけどひとまず安心だ」

会議が終わり比企谷君との帰宅道。12月の8時はもう完全に日が沈む。自宅に近づくにつれて街の雑音は消え冷たく吹き付ける風の音だけが私の耳に響く。

比企谷君といつも別れる交差点で今日はマッカン片手に雑談していた。

「疲れた…」

彼がはあつと吐いたため息は寒さのせいで白くなっていた。

「雪乃ちゃんと比企谷君は一色さんに怒られてたもんね」

「いや待て俺はわるくない。事実を伝えただけだ。それにお前だって少し怒られたじゃねえか」

「私は指示通りに働いただけですよ?」

あのあと問題発言連発の二人と共に言い方がきついと一色さんに怒られてしまった。

年下の美少女にごみを見るような目で罵られるのつてあると思います!

いやんなんか目覚めちやいそう。

そういえばそのあと比企谷君は平塚先生とも話してたな…。

「そういえば比企谷君、平塚先生となに話してたの？」

「ん？…ああ…悲しい話だよ…」

「悲しい話？」

「先生の友達の結婚式の二次会で獲得した景品の話だよ…」

「…？」

なんか思ってた悲しいと種類が違う…。

「なんとあのディスプレイニールランドのペアチケットだそうさ。悲壮感が半端ない顔で見せびらかしてきた」

「誘う相手は…？」

「これを見てみる」

「それは…」

比企谷君がポケットから出したのディスプレイニールランドのペアチケット。

「先生にもらった」

「…」

「相手がいるのにわざわざ俺にくれると思うか？」

「思いません」

平塚先生…美人なのになぜ相手がないんだろう。

…ん？まてよ？

「ペアチケツトもらったの？」

「ほぼ押し付けられたけどな」

ペアチケツト…誰を誘うんだろう。

「へえ…小町ちゃん誘うの？」

「…小町はいま受験生だからなあ。流石に誘えんな」

「そういえばそうだったね…」

え？じゃあいったい誰を？

誘えるのは一人だけ。

由比ヶ浜さん？雪乃ちゃん？戸塚くん？材木座君？

あとはあとは…

「な、なあ…愛川」

なにやら挙動不審だなあ。声震えてるし。

「比企谷君？どうかしたの？」

「ああ…その…チケツトのことなんだけど…」

「？」

「期限が今年一杯までで、はやめに行かなきゃならないだけだよ…」

「うん」

なにやらボリボリと頭をかきながらキョロキョロ色々か場所を見てる。顔は寒さのせいか真っ赤になり、目はじやつかんうるでいる。

ど、どうしたんだろ…

「その…なんだ…クリスマススイベント終わったら行かないか…俺と…25日とかに…」

「え？」

え？

え？

え？

いまなんて？

イカナイカ？

いや待て。まだ慌てる時じゃない。冷静になるんだ。

「ふ、二人で？」

「ああ…」

ほんとにほんとにお誘いが来た!?!しかもあのデイスティニーランド!?!

え？嬉しすぎて泣けるんだけど。やばいねやばいよ。

「用事があるとかなら良いんだ別に…」

「いやいやいや！行く！絶対に行く！用事とかあつても行く！」

「お、おおう。そうか。てかやけにテンション高いな」

「そりや高くもなるよ！あのディスプレイニーランドだよ！」

「そ、そうだな」

「うん！」

しかも好きな人と行けるんだよ！格別に違くない。

「じゃあチケット片方渡しとくわ」

「ありがとう！」

おそらく今最大限の笑顔をしているであろう。

「じゃあ俺そろそろ帰るわ。じゃあな」

「うん！またね！」

そういつて比企谷君と別れた。

そして自宅に帰ってきてきて部屋に戻るとすぐさま布団にダイブ！

「うへへえ」

貰ったチケットを片手に、にやにやと眺める。

比企谷君とディスプレイニー！比企谷君ディスプレイニー！

どんな感じなのかな…？

手を繋ぎながら写真とったり…乗り物に乗るときとかは肩とかぶつかるくらい近くて…

「キヤーー！」

なにこれやばすぎる！

バタバタと足をばたつかせて悶える。

ああ…母上…生んでくれてありがとう！

こんなに幸せで良いんでしょうか…。

クリスマスイベントのことなんかすべて忘れて誘われた事実にはたとえと歓喜する

私…色々悩んでたけど単純なのかな…。

まあ今はそんなこと良いや！それより当日はどうしよお！

あれやこれやと考えるこの天国のような妄想タイムはこの後30分間続いた。

## 33話

本物がほしい。

学校で彼女たちに告げ、愛川と共に帰宅した俺はふらふらとソファに倒れ込んだ。

なんだか今日は疲れたな…。

こうしてじっとしていると今日の事が思い返される。

なぜ俺はあんな恥ずかしいことを言ってしまったんだ…。

うわああああ！死にたい！死にたい！明日学校行きたくないよおおお！

ばっかじゃねーの!?!ばっかじゃねーの!!?恥ずかしいすぎるだろばかああああ！

心の中で悶えながらソファの上でゴロゴロしていたがゴトンと床に落ちてしまった。

ああ…

「死にたい…」

小さなうなり声を上げながらボツリと眩くとなにやら後方から視線を感じた。

「…どうしたの、お兄ちゃん」

マイラブリーシスター小町ちゃんがあきれ半分、恐れ半分で問うてくる。

いまの俺はいかに小町が可愛かろうと相手をするきになれなかったのでぶいっと顔

を背ける。

「放っておいてくれ。お兄ちゃん、今ちよつとアイデンティティクライシスだから」

俺がだらだらとした声で言うのと小町は溜め息を吐くと目を半開きにし口をへの字に曲げる。そのおかしな表情でなんか言い出した。

「アイデンティティ？はあ？往々にして個性個性言ってるやつに限って個性がないんだよ。だいたいちよつとやそつとで変わるもんが個性なわけねえよ」

「小町ちゃん、なにその言葉遣い。乱暴よ？あと顔が変だわ」

「…お兄ちゃんの真似だよ」

「似てねえ」

え？俺ってそんなにムカつく感じなの？もつと知的でクールな感じだと思ってたんだけどなあ…。

客観視して初めて知る真実に軽くショックを受けてると小町がよってきてソファに腰かけた。

「何があつたか知らないけどさ、今さらそのひねくれた性格が直るわけないじゃん。ごみいちゃんはごみいちゃんなんだよ？ごみいちゃん」

ちよつとごみつて言い過ぎてないですか？

うりうりと足で床に転がっている俺を突っついてくる。さながら本当にごみ扱いで



ある。

だが、いきまさなりその足がピタリと止まり、クスリと優しく微笑みながら俺を見下ろしてきた。

「でも、小町はそういうお兄ちゃん、結構好きだよ。あつ！今の小町的に超ポイント高い！」

「…そいつはありがとよ。俺も結構好きだ。こういう俺。今の八幡的に超ポイント高い！」

「なにそれ」

呆れるような顔をした小町をよそに俺はすくつと立ち上がる。

数多くの思い出（トラウマ）が小町が結構好きだと言ってくれる俺を形作っている。その思い出は傷などではなく俺のチャームポイントだ。チャームポイントが大量にある俺を、俺はきつと好きになれると思う。

奉仕部の二人の事は踏ん切りがついた。

さて、俺が考えなくちゃいけない人間がもう一人。

愛川花菜。

頑張り屋で、理系科目が得意で、背が少し小さくて、実はかなり強かな女性。

そういうええいつも一色と一緒に部室の前に居た気がする。

聞いてたよな…絶対聞こえてたって。

あ…なんかまた死にたくなってきた…。俺のメンタルは木綿豆腐なんじゃないですか…。

俺は彼女に抱く感情はいつたいなんなのか？

雪ノ下や由比ヶ浜に抱くものと近いがなにかが決定的に違う。

親愛？博愛？庇護欲の対象？尊敬？

どれもしつくり来ない。

そもそも家族愛以外をほぼ知らんからなんとも言えないのであてにはならないけどな…。

「お兄ちゃん？また目の濁りが増してきてるけど、どうしたの？」

「ああ…ちよつと難題に直面しててな…気にするな」

「ふーん…じゃあ小町は勉強に戻るから。さっさとお風呂入っちゃってねー」

「へいへい」

そういうと小町は退散していった。

難題…分からない事。

『わからないなら考えるんだ。今までよりももつとだ。計算しか出来ないなら計算し尽

くせ。全部の答えを出して消去法で1つに絞るんだ。残ったもの、きつとそれが君の答えだ』

もつと考える…か…。

考えても分からない、答えがでない、なら1から解き直すしかない。

出会ったときの事から考えよう。

最初に出会ったのは中学一年の時。あの時はただ優しいやつだなって思ってたな。特別な感情はなかったはずだ。

色々あつて疎遠になり高校2年の春。

夜に駅前の本屋でオッサン二人に絡まれてた時。

俺はその場を納められるよう間に割っては行つた。

本当に下心はなく放つておけなくてやった。

あの時のお礼がしたいと奉仕部にまで追つて来たのは流石に驚いた。あんなに強引で行動力のあるやつだなんて思わなかつたからな。

結局お礼としてカフェで奢ってもらつた気がする。

その時俺が大和撫子スタイルで3歩後ろを歩いていたのに横にならんで来たり、カフェで俺と長時間しゃべつたりとすごかつた。

素直な気持ちを言うと言つて嬉しかつた。こうして普通に楽しく、ひねくれた自分で長時間

話したのは家族以外だと初めてだったから。

もうこの時にはすでに俺にとつて愛川はその他大勢の内の一人では無くなっていたと思う。だけどそれは当時の由比ヶ浜や戸塚と同じ感情のものだった。

そのあと一緒に下校し、本を借りに家に来た。

俺のオススメの本を気に入ってくれて柄にもなく嬉しくなったんだ。それで貸すか？なんて言った。

小町が家にいて愛川を家にあげたんだよな…。愛川は俺の家に嫌な顔一つせずに入り小町と楽しくおしゃべりをして帰った。

楽しげにしゃべってる愛川と小町を見て微笑みがこぼれたのを覚えてる。あの二人に見つかったら不審者だと思われるだろうからすぐ顔を引き締めたけどな。

夏休みのボランテイヤ。

愛川とそんなに関わらなかつた気がする。マツカンを恵んでもらつたのと水着を見るのを拒否されたのは覚えてる…。

特にこの時も特別な感情はなかつた。

二人で行つたプール。

本当は小町も行くはずだったのに二人になつたんだよな…。

そこで初めて愛川の水着を見たんだが…正直予想以上だった。完全に見とれてし

まった。

愛川を可愛いつて再確認したのはあの時だ。

そして普通に遊んだあと愛川と初めて手を繋いだんだ。

とてもドキドキしたのを覚えてる。

そしてあいつはそのあと俺に私の事が好きかと問いかけてきた。照れ臭くなり嫌い

じゃないと答えたんだがそのあと愛川は俺に

『私も比企谷君の事きらいじゃないよ！』

と告げた。

その時の笑顔は最高に輝いていて、またもや俺は見とれてしまっていた。完全に時が止まっているのを感じていた。

…この時か。

今のこの感情の始まりはあの笑顔を見たときからだ。

文化祭で実行委員会の仕事を一緒にしてたときは余裕がなかったのだがあいつといると、妙な気持ちになることが多かった。

そしてライブ。愛川の歌った『小さな恋のうた』

他に観客はいなくてもいい、俺にだけは聞いてほしいと愛川は言っていた歌。

その歌はプロに比べるとやはり全然下手で、演奏も間違いが多かった。でも…それでも愛川たちは輝いていた。歌は心へ届き、その演奏をしてる姿から俺は目をそらすことが出来なかった。

文化祭も終わり動物園にも行ったな。

正直これはもうデートなのでは？とか思ったりしたが、勘違い乙など考えて乗り越えた。

生徒会選挙で愛川が、雪ノ下や由比ヶ浜との関係を守るために私が立候補すると告げたあの日。愛川はテニス部があるのにあんなことする必要はないはずだ。今のクリスマスのイベントの手伝いもそうだ。それなのに俺を手伝ってくれた。

さて、ここまでの気持ちを整理しよう。

友情？

違う。戸塚や材木座とは違う感じだ。

親愛？

雪ノ下や由比ヶ浜はたぶんこれだが愛川は違う。

庇護欲の対象？

小町とはやっぱりちがうな。

「…」

この感情がなんなのか、本当はとつくにわかつてたはずだ。

ただそれが本当にその通りなのか不安になった。

その気持ちで自覚すると今のままじゃ居られなくなるのが嫌だった。

…もう誤魔化して、逃げて、目を背けるのをやめろ。

もう覚悟を決めるんだ。

俺はあいつの事が…愛川の事が…

| | | | | | | | | | |

翌日、今回の会議で別々に準備することが決定した。

決まったら一色を含めた生徒会の面々と由比ヶ浜、雪ノ下、愛川の三人は慌ただしく準備やら計画やらをすすめている。

現在俺も小学生たちの使う道具の整理や修正を行っている。

ああ…なんかどつと疲れた…。この疲労感で仕事って正気か？

将来会社に入ったら毎日がこんな気持ちになるのか…やっぱ専業主婦になりたいなあ…。

専業主婦になると再び決意を固めたところでピシヤツと扉が開けられる音が響いた。

スーツの上に白衣を羽織った女性、我らが顧問の平塚先生だ。

平塚先生は俺を見つけるとこちらに向かってくる。

「お疲れ比企谷」

「お疲れさまです。今日はどうしたんですか？」

「君たちの様子が少し気になってね。少し見に来たんだが…」

「？」

「雪ノ下や由比ヶ浜がいる事とその顔、どうやら上手く行ったみたいだな」

平塚先生はくすりとまるで子供の成長を喜ぶ母親のように微笑んだ。



それを見るとなんだか俺もむずがゆく、照れ臭いったらない。

「いや…まあ…そつすね」

「本当に良くやったな…」

「やめてくださいよ…」

「後は愛川との事だけかな…」

今度は微笑みをしまい、腕を組んでうーんつと唸る。この人もころころ表情が変わるな…美人だからその全てが絵になる。

そう思っていると平塚先生の口がにりるとつり上がりわざとらしい態度を取りはじめた。

「良くやった君に私からささやかな贈り物をしようじゃないか！ほら受け取りたまえ！」

「…デステイニールランドのペアチケット？」

「ああ！この間、友人の結婚式で…も…らったんだ…」

そう言いきる前に奥歯をぎゅつと噛み締め悔しがる顔をしている。

誰だ?!この人にこんなもの贈った大馬鹿者はだれだ!?

「みんな羨ましがってたよ…デステイニールいいなーってな…でもペアチケットって…私にはソロなんだがどうしたら…」

もう誰かもらってあげてー! じゃなきゃ俺が貰っちゃうよ!? こんな先生見てられない!

「そ、そうですか…でも今小町は受験期ですし俺もソロなんで渡されても困るんですが…」

はっ! まさか平塚先生にお誘いされてる!? どうしよう流石に先生と二人つてのは…

「何をいつている。君は渡したい人間がいるんじゃないか?」

「…」

「比企谷。今しかできないことがある。あと少ししたら今出来ることが出来なくなるんだ。分かるな?」

「はい」

「じゃあ…受けとるか?」

「はい。いただきます」

いつだって平塚先生は生徒の事を見てる。俺の事もここまで見てくれている…やっぱり魅力的な女性だ。

世の男は見る目がないな…。

「よし。私の屍を越えて行け!」

嬉しそうにそう言い捨てると颯爽とその場から去っていった。

なんか生き生きしてたな…あの台詞言いたかったんだろうな…。

…魅力的だよな…うん…。

「渡したいやつ…か…」

携帯電話を取りだしメールを開く。

『終わったら待ってるからな』

宛先は愛川花菜。

それだけ送り俺は再び時間になるまで作業に取りかかる。

このあと帰り道で話すであろう事を想像し手元も心も落ち着かない時間はやけに長く感じた。

## 34話

昼休み、私はいつの面々である基子と美波の三人で昼食をとっている。

私、愛川花菜は昨日想い人である比企谷君にデステイニールランドに二人だけで行こうと誘われなのだが…

「どう思う?」

「ど、どう思つて…本当に二人だけで行こうつてさそわれたの…?」

「本当に本当だよ。ほら!証拠のチケット!」

「これ本当に本物…?」

そ、そんなに驚かなくても…。私も昨日の夜なんども現実か疑つたけどさ…。

「で!これつてさ!やつぱりあれだよね?期待してもいいやつだよね!」

「あつたりまえだろ!これでダメとかあり得ないつて!」

「だよねだよね!きゃー!やつぱり行けるよね!」

よっしやー!きたきたきたきた!ふつうに考えてそうだよねやつぱ!

「ちよつとまつて」

基子と二人でキヤツキヤツと盛り上がつて居たのだが驚くほど冷静な声で美波がそ

れを遮る。

「どうかしたか？」

「行けるって…本当にそう思う？」

「えっ…でもふつうに考えてさ…」

「比企谷君が普通に該当するって言う考えが甘いと思うなあ」

「うっ…」

た、たしかに…。

「それに…そのチケツトって平塚先生から貰ったものなんですよ？」

「うん」

「ならば、今まで色々手伝ってくれてありがとうってお礼の意味しかないかもしれない

よっ…」

「…」

あれ？比企谷君なら確かにその可能性あるよね…てかその可能性の方が高くない？

「過度に期待しすぎるのもよくないんじゃないかな？」

「うう…仰る通りで…」

やばいな…気持ちだけが先走ってたかも…。

「そんなに落ち込まないですよ。あまりにもはしゃいでたからつい…大丈夫だって！」

「でも……」

「それでもチャンスに変わりはないだろ？」

「そうだね……」

「期待はし過ぎるなってだけなんだからさ、そう落ち込むなって！」

「うん……そうだよね」

くよくよしてても仕方ない。前向きに行かなきゃ！

「よーし！楽しんでやうよ！」

「その意気！その意気！」

「ねえねえ花菜ちゃん。デステイニーってき、完璧じゃない？」

完璧？

雰囲気とか面白いとかインスタ映えとか？

色々お高いのを除けば確かに完璧だろう。

「完璧ってなにが？」

「そんなの決まってるよ。告白する場所として」

「い、告白!?!」

告白ってあれだよな？自分の気持ち伝えるあれのなあれ？

ちよつとまって真つ暗な夜空に綺麗に光るお城と花火が写ってて雰囲気なにもしな

くても作られててこれってやっぱ告白するのに最適とかいうあれなのか？

「パニクってんなあ。とりあえずこの数字見て落ち着け」

4…9…16…25…36…49…64…81…100…121…144…169

…196…ああ…落ち着く。なんて美しい数字なんだろう。

って

「告白とか無理無理！まだ早いつて！」

「そんなことないよ。そろそろ告白してもいいとおもうよ？」

「いやいやいや…」

「あれだけ比企谷君の為に頑張ったんだよ？きつと行けるって」

…そんなことない。

「…今比企谷君の頭の中は奉仕部の事でいっぱいなんだと思う。まだ私が入る隙間は無いよ…」

奉仕部内に充満していた嫌なものはない。比企谷君の心からの言葉によって振り払われた。きつといっぱい悩んだらうな…まだそんなに時間がたつてないし私に気を回す余裕はまだ無い…。

「花菜ちゃん…」

「まあ告白とかさ、そういう進展はなくても絶対に楽しいだろうし大丈夫だよ」

「…なあ花菜」

「ん？」

「なにを比企谷君に遠慮してるんだ？」

「え？」

「奉仕部の事で頭がいっぱいなものつてき…お前に関係ある？」

「確かに無いかもだけど…今比企谷君大変だし…」

「そんなの関係ないだろ」

「そ、そんなこと…」

私は比企谷君に辛い思いをしてほしくない。すこしでも負担を減らしたいだけなのに…

「今比企谷君の頭が奉仕部の二人でいっぱいだとするならその原因はお前にもあるだろうな」

「え？」

「あの二人は比企谷君を引っ掻き回して独占してる状態を作ってる。でもお前はどうか？比企谷君に迷惑はかけられないからって何を大人しくしてるんだよ」

「…」

「花菜は文化祭で二人に宣戦布告したんでしょ？遠慮なんかしちゃダメだよ。話を聞く



限り現時点で確実に二人に負けてるぞ?」

「でも…」

「大丈夫大丈夫。迷惑になんてならないよ」

にっこりと美波が割り込んできた。

「ほとんどの男の子はね? 女の子に頼られたいって欲望を持つてるものなの。多少の我が儘な位がグツと来るはずだよ」

「そ、そうなの?」

「そうそう。比企谷君って面倒見良さそうだしそっちの方が絶対良いつて! だからさ、思いつき引つ掻き回そうよ」

確かに今まで比企谷君が大変だからって身を引いたこともあった。それでもちよくちよく迷惑はかけてたけどね…。

「よーし! 分かったよ! 私! 頑張る!」

「その意気だ! いっちょ頑張れ!」

もつと私も我が儘に、私もここに居るんだぞ! ってアピールしなきゃ…。

「それにもしだめでも一回告白された異性って良くも悪くも意識しちゃうからね。他の娘に比べて一歩リード出来るんじゃないかな」

フフフっと少し黒い笑みを浮かべる美波の顔はとてもイキイキしています。なんで

美波ってこんなに強かなのに教師を好きになっちゃったのかな。やっぱ愛は理屈じゃないってこと？

「まあとりあえず目先のクリスマスイベントだよな。私たちも当日は行くからよろしくね」

「オツケー！楽しみにしててよ！」

こうして私はクリスマススの日に人生初の告白をすることになった。

告白か…何て言えばいいのかな…男の人って何て言えばグッと来るんだろ…。

考えておかなきゃ…。

—————

時は経ってクリスマススイベント当日。

あれから両学校は、すさまじいペースで作業を進めぎりぎり間に合わせることに成功した。

最初からこうすれば良かったのでは？なんて言うのはナンセンスだ。最近から別々にやっていたならあの限界を越えたかのようなペースで仕事は出来なかつただろう。

各々己のポテンシャルを理解するには良かったのかもしれない。

まあそれは結果論であつて余裕があるにこしたことはないのかな？

「愛川さん。この生地を混ぜておいてくれる？」

「オツケー」

イベントは本日の午後から。私たちは午前中、一色さんの指示を受け奉仕部 a n d 私はケーキやらクッキーを焼いていた。

え？料理できるのかって？

この愛川花菜はなんでもそつなくこなすスペシャリストですよ？並みには出来ますとも！

そんな何ともいえない戦闘力を持った私だがちよつと雪乃ちゃんの前じや霞むかな…うん…。

なんかちよつと小洒落たケーキとか作ってるし…これなんか細か！

てか本当になんでもできるんだな…反則すぎやしませんか？

「比企谷くん」

「ほい」

「ありがとう」

「むう…」

名前しか読んでないのに生クリーム寄越せてちゃんと伝わったのか…なんか熟年の夫婦みたいでずるい…こうなれば！

「比企谷君！」

「あ？」

伝わって！私の思い！

「むむむー！」

「…なにやっつてんだお前」

「…なんでもありません」

そんな真顔で引かれたら流石の私も堪えますよ…。

昨日に引き続き長時間の作業をしていたせいか頭がやばくなってきたのかも…。

突然ガラガラつと控え目に、あまーい臭いが充満していた調理室の扉が開けられた。

そこから顔を出していたのは…

「戸塚くん？どうしたの？」

「うん！生徒会の人に聞いたところだつて言うからさ。手伝おうかなつて。ね？」

そういう戸塚君の後ろには小町ちゃんの姿が見える。どうやら二人とも手伝つてくれるそうだ。

「小町さんは料理の方の手伝いをしてもらおうかしら。クッキーとケーキ、どつちがお得意？」

「小町、どつちもいけますよ！」

「そう助かるわ。ならこのレシピ通りをお願い」

「はい！」

「ありがとうね小町ちゃん！」

「いえいえ。雪乃さんと花菜先輩とお菓子作りできるなんて、小町、色々捗って幸せです  
！」

何が捗るんだ一体。

手を洗い準備を終えた小町ちゃんを加え、楽しく談笑しながら作業は進んでいった。  
なんか平穩って感じでいいなあ…。

「そう言えばなんですけど、お二人ともあしたの予定って決まってるんですか？」

「えっ、あした!？」

「はい！お二人はクリスマスをどう過ごすのか気になってちゃって！」

「私は由比ヶ浜さんが家に来てなにか、パーティーをするそうよ」

「へえー！楽しそうですねえ。もちろんうちの愚兄はお呼ばれてないですよね」

「それが…由比ヶ浜さんが誘ったらしいのだけけど…本当に用事があるからって断られ  
たと言っていたわ」

ギクウ！そ、そうですねそれ私ですたぶん。

なぜかチラツとこつちをみる雪乃ちゃんはエスパーなんじゃないでしょうか。大方

察しがついているぞとそういいたいのかな？

「愛川さん…あなたはどうかなの？」

「私は…」

「なにか答えられないような不都合なことでもあるのかしら？」

比企谷君が隠しているのに私がばらしても良いものか…うーん…。

「…なんて冗談よ。比企谷くん本人に聞いたわ、あなたと出掛ける用事があるって」

「そ、そうなの？」

「ええ」

嬉しそうに笑う顔はまるでいたずらが成功した子供のようだ。

余裕あるって感じしてない!? なんか！

「からかうなんてひどいなあ…っていつまで笑ってるの!？」

「ふふっごめんさい。あなたの困った顔見てたらつい…」

「そんな変な顔してた!？」

私顔はそこそこ可愛いと思うけどな…。

おつかしいな…一時期モテ期も来たのに…。

でも最近は確かに前ほど告白とか無いかも…むしろ全く無いかも…。

「むむ…これはもしか…」

「小町ちゃんはどうしたの？」

「いえいえー！ やっぱ捗ってるだけなんでお気になさらず！」

捗ってるってなにがよ。お菓子作りの事？

なにやらずつと悩ましい顔でお菓子をもくもくとつくっていると思っただけ何を考えていたのやら…。

なんか独り言もぶつぶついつてるし…そういうところお兄さんとそっくりだな。

「少しお喋りし過ぎたわね…二人とも、すこし急ぎましょう」

「はい」

そこからみんな真剣な顔になり、しばらくお菓子作りに没頭してた。

—————

「つつかれた…」

クリスマスイベントはなんのトラブルもなく終了し、片付けも済ませて私は帰宅していた。もう日は完全に沈み辺りは暗くなってきた。

終わってみればあつという間だったなあ…あれだけ色々大変な思いをしたというのに。人間の感性はやっぱ不思議だ。

それにしてもいろいろ大変だった…本当に…

「つつかれたあ」

でも、いつまでも部屋でぐだぐだしてるわけにはいかない。明日は比企谷君と二人で！二人で!! デステイニーデートだ！

さてなにを着ていこうかなー、デステイニーだから地味だと似合わないし…でも派手すぎるのは比企谷君好きじゃなさそうだし…うーん…やっぱモコモコ系？

「あつ」

明日の準備をあれやこれやとしていたときに大切事を思い出した。

明日の集合時間と集合場所、決めてないじゃん…

どうしよ、もう連絡して平気かな？

途中で奉仕部の三人とは別々に片付けしてたから彼らがもう帰ったかは分からない。うーん…どうしよつか…まだ仕事してたりして。

ない話じゃないよね…。

私がどうするか悩んでいると好きなJPOPのサビが部屋に響き渡った。

で、電話…比企谷君だ！

「も、もしもしー！」

『よう。明日の事だけど…いいか？』

「うん！大丈夫！なんじにどこ集合しよつか」



『そうだな…じゃあ俺たちの最寄り駅に朝七時とかでいいか?』

「えっ?」

『どうかしたのか?』

「てつきり比企谷君の事だから朝イチは混んでるしひるからにしよーぜーとか言うと思つてた」

『一応誘つたのは俺なんだけど…まあでもたしかにそれもいいか』

「いやいやいや!嘘だから!あした駅に7時半ね!了解!」

『おう、あといい忘れてたけど今回も手伝つてくれてありがとな』

「どういたしまして。また何かあったら言つてよ!出来だけ力になるからさ!」

『ああ…そのときは頼むかもしれん…とりあえず今日はお疲れさん。またあしたな』

「おつかれさまあ!」

ふう…。

明日は七時半か…よーし!

今日はあしたに備えて早く寝なきや!疲れを完全に回復しなきやだしね!

このあと9時に布団には言つたがなかなか寝付けず2時まで起きていました…。

## 35話

皆さん！おはようございます！

ご存知、愛川花菜です！

今日は待ちに待ったデステイニーデート。

現在待ち合わせ場所に向かってます！

まだまだ慣れないお化粧に四苦八苦、今日のために少ない時間を利用して買った洋服等々、私自身に精一杯のお洒落を施した。

そして完成したのが今日の私！

私史上最高の可愛さだと思う。

心なしか道行く男の人に見られてる気がするし…これは可愛いんじゃない!? 本当に  
!

つと、駅に到着つと…どれどれ…比企谷君は…いた！

十五分前集合とは関心関心。

「ひーきがーやくん！おはよー！」

「おお…愛川。おはようさん」

「じゃ、はやく遊びたいし行くか」

「おう」

ええつと…デステイニーに行くにはこっちのホームだったかな…。

「愛川」

私がケータイで行き方を確認しているとポリポリと若干赤みがかった頬をかきながら呼び掛けてきた。

「ん？」

「その…今日の服、似合ってるぞ…」

え、ええつと…まじで？

こんなに容易く比企谷君が褒めてくれた…？

しかも自ら？

し、信じられないんだけど…。

にしてもたかが服誉めたくらいで照れちゃってもー。

比企谷君相変わらず初なんだからもう！

か・わ・い・い・☆

さんざん告白されて誉められるのになれた私は華麗に受け答えてやりますか！

「あ、ありがとう…」

…。

はい。めっちゃ嬉しいしめっちゃ照れてますわ。

だつてあんな！照れてながら誉められるとき！こっちだつて照れるつて！

「…」

『あのカップル初々しくて可愛い』

「っ！」

二人そろつて顔を真つ赤にしうつつ向いてフリーズしてたらそんな声が耳に入ってきた。

「い、行こっ！」

「そうだな。時間は有限だし勿体ない」

はやくこの場を離れたい…。

—————

クリスマスと言うだけあつてステイニーへ向かう電車はかなり混んでいてぎゅうぎゅう詰め状態だった。

「とうちやくー！」

改札を抜け駅から出るとステイニーへ続くファンタジーな道が正門まで続いてい

る。遠くを見るとそこには女の子が憧れるお姫様のお城。

この道を歩いてると嫌でもテンションが上がってしまう。

「いやあー！楽しみになってきたよ！比企谷君はまず何に乗りたいたい！」

「うーん…俺はあれかな…」

「電車?!もう帰る気まんまん?!」

満員電車でかなり消耗したのだろう比企谷君は

すでに平常運転だ。

しかし私は見ていた。ぎゅうぎゅうの電車の中でお城やら火山が見えたとき目が少

しだけ輝いていた比企谷君を！

「じゃー！とりあえず行こうか！」

「お、おい。引つ張んなって」

こう言うときは強引に行かなきゃね！ついでにちやつかり手を握ってしまおう。

正門の到着するとそこには長蛇の列が作られていた。

「開園まで20分くらい時間あるねえ。待ってようか」

「若干早めに集まったからな…」

「最初はどーいこうか」

「俺はなんでも良いぞ」

「比企谷君って絶叫系平気？」

「まあ、そこまで激しくなければ」

「じゃあ最初はあの火山のやつ乗ろうよ！混まないうちにさ！それでついぞにスプライドマウンテンのファストパス取っちゃおうよ」

「了解だ」

スプライドマウンテンから見る景色は綺麗だから暗くなったらもう一回乗りたいな。

「…なあ。ところでいつまで握ってるんだ？」

「手離したら比企谷君電車に乗っちゃいそうだし…だからこうして捕まえておこつかなって」

「さすがにあれは冗談だから…」

「分かってるよ、手を握るための建前だって。私はこうしていたいからね」

「そうか…」

「だからさ、そういうことにしておいてよ」

ぱちつとウインクを飛ばし笑顔でそういうとみるみる比企谷の顔は紅潮していった。

今日の私はいつものより攻めるよ…なにせ勝負の日だからね！

にしても手を握っただけで顔真っ赤にして…相変わらず初なんだから。それともウインクした私が可愛すぎたのかな？なーんて！

『見て見て。あそこのカップル二人とも顔真つ赤…初でかわいい』  
…。

は、はやく開園してください。

—————

「比企谷君！みてみて！おっきいツリー！」

「おお…さすがにでかいな」

正門から入ってすぐにそびえ立つのは巨大なクリスマスツリー。この規模のものはなかなかお目にかかれないのではないだろうか。

「キラキラしてて…きれい」

「すげえな」

「そだ！せっかくだから写真撮ろ？」

「え…もう？」

「イエス。すみません！写真とつてもらっても良いですか？」

その辺にいたスタツフさんにケータイを渡し二人で並ぶ。

「じゃあ撮りますよー？良いですか？」

「大丈夫です！」

「はいチーズ」

「えいー！」

「こんな感じでどうでしょうか？」

写真を確認するとそこにはツリーをバックに驚いた表情をした彼と彼の腕に抱きつく私が写っていた。

「ばつちりです！ありがとうございます！」

「いえいえ。それではよい一日をお過ごしください！」

スタッフさんは笑顔で持ち場に戻っていった。しかしいい写真がとれたな…。

「いきなりそれは流石にびっくりするんだけども」

「良いじゃん良いじゃん！こんな美少女に抱きつかれて役得でしょ？」

可愛くコーデされた私に抱きつかれて不満があるのかね？

あるとしたら私悲しくて泣くよ？

「じゃあ行こっか！」

「はあ…はいよ」

ずいぶんつかれた顔してるけど…一日はこれからなんだよ？

—————

「やつと座れた…」



「さすがに少し疲れたねー」

あれからそこそこのアトラクションにのりデスティニーを楽しんだ私たちはお昼時より少し遅い時間にランチを取ることにした。

「わあ！みてみて！このハンバーガーちゃんとキャラの形になってる！」

「おお…そうかそうか。俺のピザは残念ながら普通のピザだな」

フューチャースペースエリアでのランチということもあり内装はかなりスターフォースの世界みたいになっている。

「比企谷君はスターフォース見たことあるの？」

「一応な。今話題のアマゾンプライムで予習済みだ」

「でたあ。便利そうだね私も登録してみようかな？」

「あれあると暇な時間とか大分潰せるからな、おすすめだ」

アマゾンプライムか…有料だから手は出してこなかったけどTSUTAYAとかでDVD借りるならこっちのほうがいいのか？

まあそれはさておき…

「そういえばそのピザってなに味？」

「ん？ツナ…なんとか味」

「圧倒的に情報が足りない」

「とりあえず旨いぞ」

「ふうん。一口ちよーだい」

「別に良いけど…ほらーピース取っていいぞ」

「ふふん、違う違う。あーん！」

口を開けておねだり開始。

「ちよ、やめろつてはずいから普通に」

私だって恥ずかしいわ！でもほらー！デートっていったらこういうのやりたいじゃん  
!?

「あーん！」

「…まじで？」

力強くコクリと頷き待機。

「…まじで無理だつて、勘弁してくれ」

「…もう」

比企谷の顔を見ると頬を真っ赤にして目を凄まじい勢いで泳がせてる。

私だってバカみたいに口開けて恥ずかしかったのに…。

「…へタレ」

「申し訳ない…」

そんなことをしつつも昼食を終え次のアトラクションへ向かう。

次に乗るのはパンさんのバンブルーファイトだ。

これもデステイニーの人気アトラクションの1つで乗るまでにかかなりの待ち時間を要する。

今回は2時間待ちでようやく私たちの番が来た。

「それではパンさんの世界にいつてらっしやーい！」

係員のお兄さんに手を振られていざ発進。

そこの世界はクリスマス？なにそれ？って感じだった。しかしながらアトラクション自体のクオリティが高い。

「すげーな」

「うん。パンさんの世界観よく出てるね」

二人そろってそんな感想が出てきた。

「パンさんと言えば雪ノ下がかなり好きらしいな」

「ああ…：そういえば雪乃ちゃんの部屋にいったときにかなりグッズがあつたね」

「由比ヶ浜いわく、一緒にパンさんのビデオを見ると解説モードに入るか集中モードに入るらしいぞ」

「なにそれ怖い」

「集中モードにはいるあいつに話しかけると怒られるらしい」

「デステイニー映画でまさかの私語厳禁!？」

「もしも雪ノ下とこのアトラクションに乗ったら同じ感じになりそうだな」

「遊園地でも私語厳禁!？雪乃ちゃんならやりそう」

雪乃ちゃんもなかなか変人だしね。まあいくら変人でもさすがにデステイニーで私語厳禁はないだろう。

アトラクションが終わると出口付近にお土産コーナーが設けられていた。

「小町に土産買っていこうと思ってたんだ。ちよつとよつていいか？」

「うん、いいよー。なんなら私も選ぶの手伝うし」

「そりやたすかるわ。たのむ」

「おっけー!」

お土産コーナーにならぶ商品はそれはもうパンさんだらけ。まあ当たり前なんだがパンさん一色だ。

「小町は受験生だしこのペンとかで良いか…」

「なに言ってるの？ペンなんてどこでも買えるし使いなれた今のやつの方がいいに決まってるじゃん!」

「むう…確かに」

「私はこのぬいぐるみがいいと思うな。かわいいものを見るとなんか癒されるし」

ストレスたまってついつい投げたりしても壊れないしね！

「確かに…俺も前作ったガンブラ見てたらテンション上がるしな…その女の子バー  
ジョンか…ふむ…よし。これにするわ」

どうやら決まったみたいだ。さすが私ナイスアドバイス！

「…こつちのは今年限定なのか」

「このぬいぐるみ？確かに今年の冬限定！って書いてあるね」

「雪ノ下にも買ってやってやるかな…」

「…」

「そうすると由比ヶ浜にも何か買ってやらなきやな…あいつはこれでいいか…よし、  
じゃアレジ行ってくるわ」

「うん」

二人のお土産を選んでは比企谷の顔、すごく穏やかで優しかった…。

あんな顔、私に向けたことないのに…。

てかさつきもだけどデート中に他の女の子の名前だして何!?デリカシー無さすぎで

しよー！

…まあデリカシー無いのは知ってたけどさあ…。

っつてだめだめ！こんなダメ！

楽しむの！よくないマイナス思考！

「おまつとさん」

「うん！じゃあ次行こうか」

「おう。次はカナダの山賊だったか」

「あれはすぐ乗れるからね。ちよつとした休憩タイム」

「だな」

「じゃあ行こつか」

そう言つて彼と取り歩いきだしたがさつきよりも少しだけ彼の手を握る力が強くなつてしまった。

—————

「いやあー！もうすっかり夜だね！」

「だな。かなり寒いな」

「ねー。海沿いだし風強いもんね」

「あとスプライドマウンテン乗つて花火見たら終わりだな」

「もうそんな時間か…」

楽しい時間つて言うのはあつという間だな…。

「俺ちよつとトイレ行つてくるわ」

「わかった。じゃあここで待つてるね」

「了解」

ふう…

にしても寒いな…手を繋ぐために手袋してこなかったけど今だけはほしいや。

「ねえ、きみきみ！今一人？」

「え？」

大学生風の男3人組に話しかけられた。これはナンパか？

クリスマスなのになにしてんのやら…いや、クリスマスだから頑張つてゐるのか。

「もう時間ないけど俺たちとき、回らない？」

「連れがいますので」

「ならさ！そのお友だちも一緒にどう？」

「いえ、結構です」

「そんな冷たいこと言わないでよー、俺かなしー！」

「君みたいな可愛いこ、なかなか居ないんだからさ！俺たちラッキー！つて思ったわけ  
！ねえお願い！」

それ私に関係あるの？私からしたらアンラッキーなんです。それにしてもしつこ

いな…。

「っ！」

あのアホ毛は比企谷君！トイレから出てきたっぽい！助けて！ナンパされてるよ！

アイコンタクトで合図を送ると彼は頭をかきながらこちらに近づいてきた。

うわっ！目が大分濁ってるな…面倒事に対しての嫌悪感が滲み出てる…。

「待たせたな愛川」

「ううん！そんなにまってるない！」

比企谷君の登場に大学生風の男たちは呆然としていた。

「そうか…ところでこの人たちは誰なんだ？」

濁った目で大学生ズを見つめて言うときクツとなつてから舌打ちをしてどこかに  
行つてしまった。

「ふう…助かった！ありがとう！」

「たくっ…ちよつとトイレ行つただけでこれかよ…」

「仕方ないじゃん！私は悪くない！」

「確かにそうだけど…まあいいやとりあえずいくぞ」

ん、とだけで声をだして左手を私に差し出してきた。

これってあれ？比企谷君の方から手を繋ぐために手を出してきたのかな？



え？まじで？こんなのはじめてじゃ…。

「どうした？繋がらないのか？」

「いや…比企谷君から手を出してきたのはじめてだから戸惑っちゃって」

「少しはなれただけでまたナンパされてたら堪らないからな」

そんな台詞を吐きながらぶつきらぼうに手を差し出し出してる比企谷君って…

キユンってきた！

「つー…もう！ちゃんと手あらってんだよね？」

「たりまえだろ」

「ほんとー？嘘ついてたら怒るからね」

やばいな…ドキドキしちゃうよ…なんかほんと少女漫画みたいなね！こんなのある

んだ！

冗談でも言わなきやちゃんと返事出来ないくらいドキツとしたかも…。

比企谷君といてこんな感じになるのは初めて…かな…。

—————

スプライドマウンテンはファストパスを取っていたのでスムーズに進むことができ  
た。そのおかげで私たちの出番はすぐに来た。

「よつと…ああ…やつと座れた」

「一日動き回ったから疲れたね…スプライドマウンテンの最初はのんびりしてるし休める」

「だなあ」

こう言つてはなんだがもう私はこのスプライドマウンテンには夜景を見るためだけに乗っているようなものだ。さすがに疲れたから最初のようなテンションでははしやげないし楽しめない。

「そういえばさっきの感じ懐かしかったな」

「そうだよね！私たちが初めて喋ったときと同じ感じだったよね！」

なんかすごいなあ！原点復帰っていうの！軽くテンション上がる！

「…そうだな。俺たちが高校で関わり始めたのはあんな感じだったな」

「なんか懐かしいよね」

「ああ…この一年間は色々あったな…」

「あったよね…最初私お礼したくて比企谷君探し回ったのに全然見つからなくてさ！」

「それはしらん」

「もつと教室にいてよ！」

「教室には居場所がなくてな、長居は出来ないんだ」

「もう…またそんなこと言つて…」

「それで、俺を見つけたあとお礼として奢ってくれたんだよな」

「そうそう。あのカフエちゃんで行ってる？」

「何度か行つたぞ、戸塚とな！」

「スツゴク嬉しそう……」

「そりやそうだろ戸塚だぞ？」

「あはは……わかるようなわからないような」

「それで次は戸塚も参加した林間学校か？」

「あの時の比企谷君のヒールつぶりはたまんなかったねえ」

「おいこら皮肉か」

「まあねー！」

「くっ」

「それで夏休みに一緒にプールにも行つたよね」

「ああ……行つたな」

あの時に私は初めて比企谷君の事が好きだつて認識したんだよね……

「お、もうすぐ落ちるな」

ガラガラと音をたててコースターが登っていく。それにつれて私の彼への思いも盛り上がってきてしまった。

「比企谷君…」

「ん?」

「私ねあのときから…ね…」

やっぱり怖い。この楽しかった遊園地にももう二人でこれないのは怖い。もう二人で帰れないのも怖い。となりで手を繋ぐことができなくなるのも怖い。

「?」

「っ」

頂上についた。そこからのキラキラと光るランドが一望できる。

高さも盛り上がりも最高潮。

今なら言える。

きつと神様が私に…告白する魔法をかけてくれたのかもしれない。今なら言える。今なら…あなたの事が…

「…好き…です」

そういうと同時にコースターは落下の衝撃で水しぶきを撒き散らした。

—————

スプリッドマウンテンから出て花火を見るために場所取りをしている。白亜の城と花火が見える場所を比企谷君がリサーチ済みだったのでそこを陣取っていた。

とここで…

「はあ…」

愛川花菜。人生初の告白をいたしました。

その結果はどうだったのか、わかりますか？

失敗です。

落下の衝撃音やらなんやらで私の喉から絞り出した小さな告白はかき消されてしまった。

比企谷君も何て言ってたんだ？って聞いてくるし…。

もう無理！こんな状況でもう一回告白なんて出来るわけくない!?

ああーもう！私の青春ラブコメ間違ってるよ！

まあ落ちる寸前までびびってた私も悪いのかもだけどさ…神様…勇気渡すの遅いよ…。魔法は解けてしまいました。

「愛川？大丈夫か？」

「…うん」

はは…失敗したものは仕方ないさ…もう今日は無理なんだし精一杯遊びますか…へへ…。

「よし！花火！花火だよね！あとどれくらいなの!？」

「あと五分くらいかな…」

「そっか…」

それにしてもいい場所だな…見晴らしもいいし。それに私は花火をちゃんと見るの初めてだから楽しみだ。

「…さっきの続きになるけど夏休み開けたら文化祭があつたよな」

「大変だつたよね…あれは」

「ああ…正直あんなにもう働きたくないって思った」

「私も」

「愛川はバンドもやってたよな」

「そうそう。コスプレバンドね。似非お姫様でやってみましたよ!」

「まさかあれで歌うとはな…」

「まあね。そこそこ恥ずかしかった」

「まあ…でも気持ちは届いたかもしれないぞ?」

「え?」

それってどういう…

「そのあと修学旅行だつたな」

「あれは…黒歴史だよ」

「俺もだ…」

比企谷君は嘘の告白、私はそれを見て真に受けて泣くと言うね。本当に情けないっす。はい。

「修学旅行パスで！」

「同意だ」

「そのあとは選挙やったよね」

「生徒会のやつな」

「私が一肌脱いでやろうと息巻いたのに比企谷が勝手に解決しちゃうんだもん」

「解決はしてない。別の方法で誤魔化しただけだ」

「なにを謙遜してるのやら。嫌がつてる人をやる気にさせるなんて逆転の発想なかなか出来ないよっ…」

「…それ誉めてるのか？」

「どうだろうね…」

「たく…」

「…それでクリスマスイベントだね」

「ああ…これも色々あった」

「奉仕部の二人とも和解できたしね…」

「…お前も聞いてたんだよな…あれ」

あれとはきつとあれのことなんだろう。きつと思い出すだけでも恥ずかしい心の叫び。

「うん」

「…あの時な…前の日に色々考えてたんだ。あいつらは俺にとつてなんなのか…どうしたいのか…どうなつていきたいのか」

「…うん」

「考えた結果があれだったんだ」

「そっか…」

なんかやっぱり疎外感あるな…。

「それで…俺は…愛川、お前のことについても考えたんだ」

「…え？」

私のことも？

「奉仕部の二人とも違う、小町とも違う、材木座や戸塚とも違う。俺にとつて愛川はどういう存在なのか、奉仕部の二人について考えてた日からずっと考えてたけど答えは出なかつた」

「…うん」



「他のやつらとも違う、今までにいたやつらとも違う。俺には分からなかった。だからもう一度最初から解き直したんだ。いつから違うと思ったのか：いつから俺にとつて特別になったのかを」

「特…別…」

「お前が特別になった瞬間、それは夏休みにプールに行つたとき俺に向かつて放つた一言を聞いたとき、そしてそのときの笑顔を見たときなんだ」

あれ…なんだか震えてきた…。

「それに気づいたら…愛川に対する気持ちがあんなのか分かつたんだ」

目頭があつい…震えが止まらない。

「本当は分かっていたのかも…かもしれない…気付かない振りをしていただけかもしれない気持…愛川…」

臨海部に位置するデステイニールランドでは夜になると冷たい潮風が吹く。そしてライトアップされたこの象徴である白亜の城が佇み幻想的な空間を作り出していた。

そして…この場所で…

「あなたの事が好きです。付き合ってください」

真つ黒な空に花火が咲いたと同時に彼は私に手を差し出してきた。

「っ！」

もう我慢なんて出来ない。私の中の想いと同じように目からたくさん涙が溢れてきた。

なんて素敵なんだろう…今までに色んな人から告白されてきたけどこんなにも素敵で、こんなにも嬉しかった告白はなかった。

私の目の前には頭を下げ、手を差し出してきた想い人がいる。

「答えを聞かせてほしいんですが…」

少し顔をあげ不安そうに見つめてくる彼を見てるやつぱり心が暖まる。

「私…こう見えて嫉妬深いよ？」

「ああ」

「実は腹黒かもしれない」

「知ってる」

「これからも一杯困らせるかもしれない」

「それはお互い様だ」

「つまらないことで怒るかもしれない…こんなわたしでも…いいの？」

「愛川がいいんだ」

目からはポロポロと涙をこぼし前が滲んで見えないし、震える声しか出せないが返事をしよう。そこまで言ってくれたなら私の答えは一つに決まってる。

強く。今までで一番強く、離さないように彼の手を握りしめた。

「愛川、付き合ってください」

「はい、比……企……谷君……」

もう我慢できない。

握っていた手を引き彼を抱き締める。

比企谷君の体温を感じる……すごい幸福感……。

今度こそ聞き逃したりなんてさせない。花火の音でとか言い訳もさせない。

彼を抱き寄せさらに顔を接近させる。

さつきよりも断然大きくなった彼への気持ち

彼が好きになつてくれた笑顔以上の笑顔をあなたに届けます。

「私も……あなたが大好きです……」

———完———